バカと人格と召喚獣

風凪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
バカと人格と召喚獣

【Ｎコード】
Ｎ０２８８Ｒ

【作者名】
風凪

【あらすじ】
主人公、多重風太は文月学園に通うちょとどころかかなり変わった高校生。だから、悪友たちのせいで色々な事件に巻き込まれる！そして風太の衝撃の事実がラストで判明する！？――――――「優子寄り」

キャラ設定

キャラ名
「多重（タジュウ）　風太（フウタ）」

年齢　１７

性別　男

身長　優子よりは高い。

目の色　左が黒、右が緑のオッドアイ。

髪の色　黒だが前髪の右半分は深い緑色のメッシュ。

髪型　後ろの髪は逆立っていて、前髪を真ん中で分けている。

顔　色白だけど焼けやすい。だからしばらく外に出ないと白くなる。
結構可愛い系の女顔。（何故かムッツリ商会で売られていない。）
勝気な目をしている。

得意科目　全体的に得意。１教科３５０点前後。

所属　Ｆクラス（当日欠席により０点）

特殊能力　「化合」他の人格と使った人格を化合（もとい合体）を
させることができる
普段からできるが使った後は必ずぶっ倒れるのであまり使えないし、
それに使われた人格もしばらく替われない。

追備

幼い頃に両親を亡くし、さらに小学校に入って数日後に交通事故に遭い記憶喪失している。
その時には両親や祖父等は既に他界しており、親戚に引き取られた。だが、中学入ってからその親戚も他界してしまう。その頃から人格ができ初めてしまった、多重人格者。文月学園に入学した時はまだ二人だった。色々な事件に巻き込まれ増えていった。今は一人暮らししている。学園長からオマケということで制服と召喚獣にオマケが付けられた。制服には人格が替わったら感知するセンサーがあり、召喚獣にはその人格に合った武器や能力が得られる様になっている。密かに優子が気になっている。

他の人格に替わると髪のメッシュの部分と右目の色が変わる。
他の人格が使うリアルの武器を多少扱える。

人格紹介

―　入学時　―

1嵐士（アラシ）　短気。不良倒しが最近の趣味で、異名を持つほどの実力。左目にアイパッチをする。変化する色は「赤」　得意科目は現国。
エアーガン（改造）を五丁所持。
2霧幻（ムゲン）　何時でも冷静。伊達眼鏡を掛ける。非常に優しいが友人が馬鹿にされると激怒する。変化する色は「青」　得意科目は数学。
折りたたみの槍所持。

―　Aクラス戦　―

3空海（クウカイ）楽天家の若干天然が入った人格。基本のスポーツは大体何で

もできる。理系が得意。変化する色は「橙」　得意科目は特に物理。強化グローブ所持。

―　清涼祭　―

４孤雲（コグモ）　人が少ない時にはよくしゃべるようになる。戦いは人格の中で一番強い。色々と謎。変化する色は「灰」　得意科目は世界史と日本史。トンファー所持。

―　学力強化合宿　―

５雨音（アマネ）　女。普段は前髪を上に上げてピンをする。その時点でさらに女に見えるようになる。変化する色は「水」　得意科目は古典。変則四刀流を使う。

召喚獣

主　風太　ヴェントゥス。キーブレードを逆手に持って戦う。武器はフレッシュブリーズ。

１嵐士　ソラのブレイブフォーム。二刀流になり、攻撃の数が増え、威力が高くなる。武器はキングダムチェーンと約束のお守り。

２霧幻　ソラのウィズダムフォーム。攻撃が遠距離になり、地面を滑るように動く。武器はキングダムチェーン。

３空海　ソラのマスターフォーム。攻撃が空中戦専用になり、二刀流。二段ジャンプのエアドッジが可能。武器はキングダムチェーンと過ぎ去りし思い出。

４孤雲　ソラのファイナルフォーム。浮いている。直接はキーブレードを持っていない。背中の所で交差する様に浮いている。武器は約束のお守りと過ぎ去りし思い出。

５雨音　アクア。顔が若干女になる、というよりは体が女になっている。武器はレインストーム。

ライバル
「機関（キカン）　綾子（アヤコ）」

年齢　１７

性別　女

身長　瑞希と同じくらい。

目の色　灰色

髪の色　銀

髪型　短めのツインテール。下ろすと秀吉より少し長いぐらい。

顔　かわいい系で結構モテる。前髪で左目が隠れる。

得意科目　全体的に得意。１教科本気を出せば５００点前後。いつもは４００点いくかいかないかぐらいしか実力を出さない。

所属　Ａクラス

特殊能力　「硬化」武器を硬くしたり、弾丸を硬くしたりできる。

追備

　風太と同じ多重人格者。人格は６人いる（少しずつだが）。親に捨てられてから数年後、風太に助けられたが何故か仲が悪く、何年かの間喧嘩が絶えなかった。高校に入る時に出て行き、一人暮らしを始めた。文月学園に入学時に風太に出会った、がまたすぐに喧嘩をし、結局１年の間一度も話さなかった。今は仲が良い。
　容姿は銀髪のツインテールで瑞希に負けないくらいの巨乳。結構モテるが本人はまったく気付かず告白されても鈍感。学園長に風太と一緒のことを言われ、同じ仕様になった。しかし、武器が変わるのだけ使っている。優子の親友だが風太のことを取りあっている。

　人格が替わるとツインテールと左目の色が変わる。

人格紹介

―　入学時　―

１時子（トキコ）時間に律義で１分でも遅れると不機嫌になる。色は「紫」

―　清涼祭　―

２楓子（フウコ）自由気ままでよく優子に怒られる。色は「緑」

―　学力強化合宿　―

3氷子（ヒョウコ）冷たい。研究者みたいなとこがある。色は「水」

―　期末テスト　―

4水子（ミコ）音楽をこよなく愛している。ヘッドホン常備。色は「青」

―　肝試し　―

5雷子（ライコ）冷酷でよく愛子と一緒に誰かを弄ってる。色は「黄」

―　　―

6光子（ヒカリコ）人見知り。話すと何処かに走って行ってしまう。色は「白」

召喚獣

KHの??機関の黒いコートでフードは被っていない。武器は??

機関それぞれの武器。

人格が替わると武器が変わる。

主　綾子　ゼクシオン。本を扱う。点数を減らせば幻覚で相手を動けなくする。

1時子　ジグバール。二丁拳銃。点数を減らして打つ。空間を歩くことができる。

2風子　ザルディン。六本の槍を同時に扱う。振ると突風が起きる。

3氷子　ヴィクセン。大きな盾を扱う。相手を凍らせる。

４水子　デミックス。ギター。かき鳴らして周りの水を操る。

５雷子　ラクシーヌ。ナイフ。雷の如く素早い攻撃で惨殺する。

６光子　ロクサス。キーブレードの二刀流。光柱を発生させる。

親友
「獅子神（シシガミ）　片雲（ヘンウン）」

年齢　１７

性別　男

身長　雄二と同じくらい。

目の色　赤

髪の色　赤

髪型　前髪だけ残したオールバック。

顔　かなりのイケメン。だけど少し怖い目をしている。

得意科目　保健体育。６００点常連。他は２００点前後。

所属　Ｆクラス（名前の書き忘れ。というよりはわざと書いてない。）

特殊能力　「強化」自分や味方を強化できる。ただし、一回で４０点使う。

追備

風太の親友。初めて会ったのは文月学園に入学して数日後だった。それから二人で学校以外でもツルむ様になった。が、雄二や明久などがいるときはほとんど話に入らず寝ている。実は多重人格者でこれ以上は増えないらしい。現在４人いて、できた経緯は不明。風太の家の隣に住んでいて、明久と瑞希の幼馴染。今は二人を応援している。何故か片雲だけ学園長に言われなかった。（忘れてて行かなかった。）結局武器が変わるのだけ使っている。

人格紹介

１雨獅子（アメシシ）　基本無口。ファーが付いたパーカーを着用。

２双雲（ソウウン）　執念深く復讐をする。右腕だけ腕まくりをする。

３黒翼（コウヨク）　冷徹で悪の塊。銀髪になる。長剣を突然出すことがある。

４楽蹴（ラクシュウ）　楽天家でサッカーとハンドボールが得意。ボタンを全てはずす。

召喚獣

黒いＴ－シャツに黄色いベストを着ている。綾子と同じ。

主　片雲　ティーダとクラウドを合わせた感じ。武器は片手剣と大

剣。

1雨獅子　FFのレオン。黄色のベストの色が黒になり、ファーが付いた。
武器はガンブレード

2双雲　FFのクラウド。ベストが無くなり、左肩に鎧が付いた。
武器は大剣。

3黒翼　FFのセフィロス。ベストが黒くなり、左肩甲骨あたりから黒い翼が出ている。
武器は長剣。

4楽蹴　FFのティーダ。シャツが無くなり、ボールを持っている。
武器は片手剣。

親友の彼女
「椿木（ツバキ）　神楽（カグラ）」

年齢　17

性別　女

身長　秀吉と同じくらい。

容姿　金髪碧眼の美少女。胸が残念なこと以外完璧。髪型はお団子を二つに分けた感じ。

下ろすと背中の真ん中ぐらい。

得意科目　無し。基本は全教科２５０点台。

所属　Ａクラス

追備

　唯一のノーマル。片雲とは婚約者で、同棲している。片雲が多重人格者なのを知った上で婚約した。外国人の様な外見だが列記とした日本人。成績はそれなりにいいのだが二年に入った頃から段々落ちている。常に片雲ＬＯＶＥで昼休みにはすぐにＦクラスに来るほど。家事が全体的にできる。（本人曰く、嫁入り修行だとか）両親には話してあり、もう少しで結婚する予定。秀吉、優子の従妹で、優子が風太のことが好きなのを知っているのでいつも相談に乗っている。秀吉の相談も乗っている。

召喚獣

白いシャツに黒いロングコートを着て下は短パン。（ＦＦのティファ）武器は無し。

第一問（前書き）

初めて書きます。よろしくお願いします！

第一問

1年の最後のテスト、それは振り分け試験。成績によってクラスが決まる大事な試験である。そんな中……

風太
「うぅ～……38，7度、風邪かぁ～……」

俺こと多重風太（タジュウフウタ）はベッドで寝ていた。

風太
「こんな日に限って……」

俺は諦めて寝ることにした……。

俺が文月学園に入学してから二度目の春が訪れた。

通学路には桜が咲き誇っており、美しいぐらい。

だが、今はそんな時間が俺には無い。

何故かって？それは……

風太
「遅刻だ遅刻だ遅刻だーーー！！！」

初日から遅刻しそうだからだ。

風太
「目覚まし止まってんじゃん！あれ！」

文句を言いながらも、とにかく俺は走ることにした。

校門が見えてきた頃に、人影があるのに俺は気づいた。だがお構いなしにスライディングをして……。

風太
「セーーーーフ！」

？？？
「アウトだ」

校門にいた人影は浅黒い肌のスポーツマンと呼ぶに相応しい体をした人に怒られた。

この人は鉄人こと西村先生である。

俺は立ち上がり、

風太

「見逃してください」

説得に移った。

西村
「ダメだ」

風太
「そこを何とか……」

西村
「お前は遅刻初めてなんだから大丈夫だろ。ほら、お前のクラスだ」

そう言って俺に一通の封筒を渡してくる。

結果は分かっているけど……。

西村
「体調は良いのか？風太」

先生が俺のことを名前で呼ぶには理由があるがそれは後で話そう。

風太
「お陰様で」

西村
「そうか、あまり無理するなよ？」

風太
「ありがとうございます。ではこれで」

西村
「あぁ」

西村先生に見送られながら歩いて行き、

風太
「一応見ておくかな」

そう言って俺は封筒を破ると中には1枚の紙が入っていた。それに書かれていたものは

「多重風太：クラス　F」

と書かれていた。

続く

第二問

風太
「何……これ……」

廊下を歩いていて見つけた教室を見て俺は愕然とした。

それは……

風太
「でかくない……？これ……」

そう、この教室、通常の倍以上あるからだ。

リクライニングシートに個人用の冷暖房、冷蔵庫、ノートパソコンなどがあるから。これ新手の差別じゃない？

風太
「もう、無駄の塊としか言えないなぁ……」

？？？

「あれ？風太君？そうだよね？」

声をかけられた。ってかいないでしょ、普通この時間。

とりあえず、

風太
「おはよ、優子」

優子
「おはよ、風太君」

声をかけてきた人物は木下優子だった。俺が気になっている人だ。

風太
「優子のクラス、先生は？」

優子
「今プリント取りに行ってるから居ないのよ」

納得。

優子
「風太君は？Ａクラス……はないよね、当日休んじゃったもの……」

優子の元気がなくなった。そんなに一緒がよかったのかな？

風太
「それより教室行くから。じゃね」

そう言って俺は自分の教室に向かう。

教室のドアを開けると、

？？？

「早く座れ、このウジ虫野郎」

って言われた。酷くない？

風太

「そりゃ無いよ……雄二」

俺が雄二と呼んだ男は、

雄二

「ん？なんだ風太だったのか。すまん、どっかのバカだと思ってな」

坂本雄二、１８０強くらいでボクサーのような機能美を備えた細さも感じる。短い髪がたてがみのように見える。俺の悪友だ……。

風太

「それにしても雄二が教壇にあがっているってことは代表なの？」

雄二

「あぁ、先生が遅れるらしいからな」

俺は教室を見回した。そこで俺はまた愕然とした。何故かって？そりゃ～……こんな教室を見たらねぇ……。

畳、

座布団、

卓袱台。

おまけに教室は古びて老朽化している。

風太
「ひどいなぁ……」

雄二
「まったくだ」

とりあえず俺は席?に座った。

しばらくするとバカ代表の吉井明久が入ってきた。

そこから雄二と明久の面白いやりとりを見ていると、

???

「えーと、ちょっと通してもらえますかね?」

と、先生が入って来た。

明久
「あ、すいません」

雄二
「うーっす」

そう言って二人は自分たちの場所に戻って行った。

それを確認した先生は、

福原
「えー、おはようございます。二年Ｆ組担任の福原慎です。よろしくお願いします」

……？何故だろう……誰か分からない……。

福原
「皆さん全員に卓袱台と座布団は支給されていますか？不備があるなら申し出てください」

……すいませーん……不備だらけですけど……。

福原
「必要なものがあれば極力自分で調達するようにしてください」

いやだめでしょ！？ここ学校だよ！？

福原
「では、自己紹介でも始めましょうか。そうですね。廊下側の人からお願いします」

？？？

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる」

秀吉だ。それにしてもいつでも女みたいだなぁ。実際は男だけど……。

――それはお前もだよ！ｂｙ作者

？？？
「……土屋康太」
秀吉の紹介が終わり、次の生徒の名は康太。小柄で運動神経がいい。
それに口数が少ない。
？？？
「――――です。海外育ちで、日本語は会話はできるけど読み書きが苦手です。趣味は――――」
なんか危ない雰囲気がする声だなぁ……。
？？？
「趣味は吉井明久を殴ることです☆」
完璧に危険な趣味だな！おい！
と思ったら知り合いだった。
？？？
「はろはろー」
明久
「……あぅ。し、島田さん」
風太
「久しぶり～、美波～」
美波
「久しぶり、風太」

と、手を振ってくれる。

美波はドイツから来た帰国子女。トレードマークとも呼べるポニテが分かりやすい。

おっと、次は明久の番だ。

明久
「――コホン。えーっと吉井明久です。気軽に［ダーリン］と呼んで下さいね♪」

『ダァァーーリィーーン！！』

明久
「失礼。忘れてください。とにかくよろしくお願いします」

凄いなFクラス。これが女子だったらよかったのに……

『――です。よろしくお願いします』

前の人が自己紹介を終えた。ってことは次は俺なのか。俺は立ち上がり、

風太
「多重風太です。このメッシュは気にしないでください。先天性ですので。あとオッドアイです」

俺は自分の前髪の右半分の深い緑色の髪を指差して言ったあと、前髪をどかして見せた。

座って見回してみると明久が分からないという顔をしていた。この程度が分からないなんて重症だな。

その後は名前を告げるだけの自己紹介が続き、三分の二くらいが終わった頃に、

ガラリ、

ドアが開き、そこにいた人間は、

???

「あ、あの……遅れて、すみま、せん……」

『え?』

……マジ?

福原

「丁度よかったです。今自己紹介をしているところなので姫路さんもお願いします」

瑞希

「は、はい!あの、姫路瑞希といいます。よろしくお願いします……」

か弱い少女、というのが表現としては正解かな。

F生徒

「はい!質問です!」

瑞希
「あ、はい！」
F生徒
「どうして此処にいるんですか？」
普通は失礼な質問だけど、仕方がない。
瑞希は学年次席につくほどの天才だから。
バカばっかりのFクラスに居るのはおかしいぐらいだ。
瑞希
「そ、その……振り分け試験の時に高熱を出してしまって……」
そういうことね。
振り分け試験の途中退席は無得点扱いになるから。

『そういえば、俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに』
『ああ。化学だろ？あれは難しかったな』
『俺は弟が事故に遭ったと聞いて実力が出し切れなくて』
『黙れ一人っ子』
『前の番、彼女が寝かせてくれなくて』
『今年一番の大嘘をありがとう』

……バカばっかりだ。

そんな中、逃げるように空いている卓袱台に突っ伏す瑞希。
そして雄二と明久と話して……明久が泣いた。ドンマイ明久。

福原
「はいはい。そこの人達、静かにしてくださいね」

先生がパンパン、と教卓を叩いて明久たちに警告した。

明久
「あ、すいませ――」

バキィッ！バラバラ……

……きょ、教卓がごみ屑と化した。

これは酷い……

福原
「え～……替えを用意してきます。少し待っていてください」

瑞希
「あ、あはは……」

やっぱり酷いことがよく分かった。
瑞希も苦笑いだ……

風太
「ふあ……」

眠くなってきたので俺は寝た。

『大ありじゃぁっ！！』

ビクッッッ！！！

何事！？

雄二

「みんなの意見はもっともだ。そこで」

なんの話？

雄二

「これは代表としての提案だが……」

雄二は野生味満点の八重歯を見せ、

雄二

「――Ｆクラスはａクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けよう思う」

我らがＦクラス代表、坂本雄二は戦争の引き金を引いた。

だから何っ！！！

続く

第三問

Aクラスへの挑戦？

俺はさっぱり分からない。『俺は』だけど。

とにかく俺達Fクラスには現実味がない。

『勝てるわけがない』

『これ以上設備を落とされるのは嫌だ』

『姫路さんがいたら何もいらない』

そんな悲鳴が教室のいたるところから上がる。

確かにどう見てもAクラスとFクラスの戦力差は明らかだ。

雄二

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺たちが勝たせてみせる」

しかし雄二は自信満々にそう宣言した。

『何を馬鹿なことを』

『できるわけないだろう』

『何の根拠があってそんなことを』

否定的な意見が教室に響く。

っつーか何で？

――設備が悪いから戦争するってさ。

（あ、そうなの？サンキュ）

いつの間にか進んでいた。

雄二

「土屋康太。こいつはあの有名な、寡然なる性職者（ムッツリーニ）だ」

康太

「……！！（ブンブン）」

土屋康太という名前はそこまで有名ではない。しかし、ムッツリーニという名前は別。

その名は男子には畏怖と畏敬を、女子には軽蔑を以って挙げられる。

『ムッツリーニだと……？』

『馬鹿な、ヤツがそうだというのか……？』

『だが見ろ。あそこまで明らかな覗きの証拠を未だに隠そうとしているぞ……』

『ああ。ムッツリの名に恥じない姿だ……』

自分の下心を隠し通そうとするなんて……ある意味男だ。

雄二
「姫路のことは説明する必要もないだろう。皆だってその力はよく知っているはずだ」

瑞希
「えっ？わ、わたしですかっ？」

雄二
「ああ。ウチの主戦力だ。期待している」

確かに瑞希ほど頼りになる戦力はいないかな。

『そうだ。俺達には姫路さんがいるんだった』

『彼女ならＡクラスにも引けをとらない』

『ああ。彼女さえいれば何もいらないな』

……さっきから瑞希に熱烈なラブコールを送ってるのは誰？絞めてやる。

雄二
「木下秀吉だっている」

演劇部だし。戦略的には使える。

雄二

「それに多重風太だっている」

……は？

『誰だ？』

『聞いたことないぞ』

知ってたら気持ち悪い。

雄二

「それなら、こっちは聞いたことがあるだろ？『フォームマスター』」

いきなり騒がしくなった。

『そんな奴居るのか！？』

『それより何処にいる！？』

『あれだ！あのメッシュだ！』

何で？っていうかこっち見ないで。

雄二

「そうだ。こいつは多重人格者の多重風太だ」

風太

「！！雄二！何で知っているの！？それは誰にも言ってないはずだよ！！」

すると、雄二は指を差し、

雄二
「なぁに、そこの奴が親切にな」

そう言った雄二の指した方向を見るとそこにいたのは……

風太
「片雲!?お前何で!」

そこには俺の親友の獅子神片雲(シシガミヘンウン)がいた。

片雲
「ん?あぁ、名前の書き忘れ」

風太
「……」

雄二
「ちなみにそいつも多重人格者だ」

……もう何が何だか分からない……

(ちょっとしばらく頼むよ、霧幻(ムゲン))

霧幻
―分かりました、しばらく休んでください。

それから俺は意識を手放した……

～霧幻視点～

雄二
「お、替わったか」

皆私のほうを見る。何かあるのでしょうか？

明久
「ねぇ……雄二……」

雄二
「何だ、明久」

明久
「風太の髪のメッシュの部分……色替わってない？」

明久君は驚いた顔をしていますが、普通でしょう。何故なら……

私の髪の色が変わっているのだから。今は青。目の色も変わっています。

雄二
「あぁ。ほら霧幻、眼鏡だ」

雄二君が私の眼鏡を投げてくる。

霧幻
「ありがとう、雄二君」

飛んできた眼鏡を私は受け取り、それをかける。

……教室に沈黙が流れた。

『お前風太じゃないのか？』

『まさか本物？』

聞かれたので私は、

霧幻
「初めまして、私は霧幻と言います」

雄二
「とまぁ、こんな感じになる。こいつには今はほかにあと一人いる」

霧幻
「明久君は知っているはずです。『嵐士』を」

明久
「？？？」

雄二
「いい加減話を戻したいんだが」

霧幻
「すいません。雄二君」

不機嫌そうに雄二君は言ってきたので一旦止めることにしました。

雄二
「獅子神は『ソードマスター』だったかな？」

また教室が騒がしくなりました。

『まさか、そんなはずはないだろ！」

『あり得ない！」

片雲
「なぁ、うるさいんだけど？」

一向に治まる気配がなく、

ブチッ！！！

そんな音が聞こえ、

片雲
「はぁ、黒翼黙らせろ」

そう言った瞬間、片雲の髪が銀髪になりました。

黒翼
「お前ら黙らないと……斬るぞ？」

そう言って長剣を見せた……何処から出したのでしょう？

『すいませんでしたぁーーーーーー！！！』

全員で土下座した。プライドは無いのでしょうか？

雄二
「そいつは危険だから怒らせない様にしろよ？」

『はいっ！！！』

雄二
「この二人はＡクラス並みの実力だ」

明久
「え？じゃあ何でＦクラスに？」

霧幻・片雲
「「めんどくさくて」」

雄二
「ったく……。まぁ、俺も当然全力を尽くす」

雄二君も昔は神童だとか呼ばれてたらしいからね。頭の回転もかなり早いし。

これでクラスの士気は最高値に達している。
これなら……

雄二
「それに、吉井明久だっている」

―シーン……―

うわぁ……

霧幻
「明久君……駄目じゃないですか……」

明久
「えぇ！僕のせいなの！？」

雄二
「そうか。知らないようなら教えてやる。こいつの肩書きは《観察処分者》だ！」

霧幻
「つまりバカの代名詞です」

明久
「ち、ちがうよ！ちょっとお茶目な生徒につけられる愛称で・・・」

雄二
「いかにもバカの代名詞だ！」

明久
「そこは否定する所だよね雄二！？」

雄二
「学校生活不適格の烙印を押された、開校以来初の、ろくでなしとも言える！」

明久
「よくそこまで言ってくれた！表に出ろチクショウ！」

否定は駄目ですよ……明久君……

瑞希
「あの、それってどういうものなんですか？」

知らないでしょうね、瑞希さんは絶対なれませんから。

雄二
「簡単に言えば、教師の雑用係だな。特例として物に触れる召喚獣で力仕事をこなしすといった具合だ」

普通は触れられないけど、明久君のは特例で触れることができる。

だけど、そんないいもんじゃないのです。
召喚獣が受けた痛みや疲れは自分にフィードバックされるからなのです。

つまり、おいそれと召喚することは極力避けることになります。

霧幻
「けど、居ても居なくても変わらないザコなので問題ありません」

明久
「そこは僕をフォローしようよ！」

雄二

「とにかくだ。俺たちの力の証明として、まずはDクラスを征服してみようと思う」

明久
「うわ、すっごい大胆に無視された」

しょうがないですよ、本当のことなのですから。

雄二
「皆、この境遇は大いに不満だろう？」

『当然だ！！』

雄二
「ならば全員、筆（ペン）を執れ！出陣の準備だ！」

『おおーーっ！！』

雄二
「俺達に必要なのは卓袱台ではない！Aクラスのシステムデスクだ！！」

『うおおーーっ！！』

瑞希
「お、おー……」

可愛らしいなぁ……

雄二
「明久にはDクラスへの宣戦布告の使者になってもらう」

霧幻
「行ってきてください」

明久
「……下位勢力の宣戦布告の使者ってたいてい酷い目に遭うよね？」

雄二
「大丈夫だ。やつらがお前に危害を加えることはない」

霧幻
「心配せずに、騙されたと思って行ってください。」

明久
「本当に？」

雄二
「ああ、俺達を信じろ明久！俺達は友人を騙すような真似はしない」

明久
「わかったよ。それなら使者は僕がやるよ」

雄二
「ああ、頼んだぞ」

クラスメイトの歓声と拍手に送り出され、明久君は使者らしく毅然とした態度で教室を出て、Dクラスへと歩いて行った。

霧幻
「バカほど扱いやすいものは無いですね（ニヤニヤ）」

雄二
「まったく同感だな（ニヤニヤ）」

私と雄二君は顔をニヤつかせながらバカの帰りを待った。

明久
「騙されたぁ！」

数分後、ボロボロになった明久君が教室に転がり込んできた。

霧幻
「くくく、ぷっ、ははははは！」

雄二
「やはりそう来たか」

明久
「やはりってなんだよ！使者への暴行は予想通りだったんじゃないか！」

雄二
「当然だ。そんなことが予想もできないで代表が務まるか」

明久
「少しは悪びれろよ！」

霧幻
「ははははは、でも……嫌です。ぷふふふ」

明久
「霧幻もやめて！物凄い傷つくんだけど！」

やっぱり面白いですね、明久君は。

瑞希
「吉井君、大丈夫ですか？」

瑞樹さんが心配して明久君に近づく。

明久
「あ、うん。大丈夫。ほとんどかすり傷」

嘘ですね。

島田
「吉井、本当に大丈夫？」

こんどは美波さんが近づく。

明久

「平気だよ。心配してくれてありがとう」

島田
「そう、良かった……ウチが殴る余裕はまだあるんだ……」

明久
「ああっ！もうダメ！死にそう！」

明久君が腕を抱えて転げまわる。

雄二
「そんなことはどうでもいい。それより今からミーティングを行うぞ」

相変わらず酷い扱いですね、明久君。

それから私達は教室を出て、屋上に向かう。

この喋り方めんどいので敬語無しにしまーす。

雄二
「明久。宣戦布告はしてきたな？」

雄二君がフェンスの前に座ったので私達も座ることにした。

明久
「一応今日の午後に開戦予定と告げて来たけど」

美波
「それじゃ、先にお昼ご飯ってことね？」

霧幻
「そうだね。明久君、まともなお昼ご飯は？」

明久
「今日もアレだけだよ」

霧幻
「ちゃんと食べなきゃ駄目だよ？」

明久
「そう思うならパンでもおごってくれると嬉しいんだけど」

瑞希
「えっ？吉井君ってお昼食べない人なんですか？」

瑞希が驚いてる。それより明久君が『アレ』って言ってるのにも関わらず、食べないって決めてる。天然？

明久
「いや。一応食べてるよ」

雄二

「……あれは食べていると言えるのか？」

霧幻
「言えないと思う……」

明久
「何が言いたいのさ」

雄二
「いや、お前の主食って――」

霧幻
「――水と塩だけでしょう？」

否定しちゃだ――

明久
「きちんと砂糖だって食べているさ！」

瑞希
「あの、吉井君。水と塩と砂糖って、食べるとは言いませんよ……」

秀吉
「舐める、が表現としては正解じゃろうな」

予想外でした。まさかそんな答えが出るとは。

雄二
「ま、飯代まで遊びに使い込むお前が悪いよな」

明久
「し、仕送りが少ないんだよ！」

霧幻
「いや、ゲーム売れよ」

明久
「駄目だよそんなことしちゃ！」

瑞希
「……あの、良かったら私がお弁当作ってきましょうか？」

明久
「ゑ？」

霧幻
「現代に戻してあげよう」

ベシッベシッ！

明久
「痛い！叩かないでよ！」

それにしても、瑞希さんは大胆だね。

風太
――治った。替わってくれない？

霧幻
（分かったよ）

そうして私は眠りについた……

～風太視点～

それにしても酷い目にあった……

明久
「今だから言うけど、僕、初めて会う前から君のこと好き――」

何だろ？明久が愛の告白をし――

雄二
「今振られると弁当の話はなくなるぞ」

明久
「――にしたいと思っていました」

――なかった。っつかただの変態。

秀吉
「明久。それでは欲望をカミングアウトした、ただの変態じゃぞ」

雄二
「明久。お前はたまに俺の想像を越えた人間になるときがあるな」

明久
「だって……お弁当が……」

そこまで……？

風太
「それより、何の話？」

雄二
「風太、もういいのか？」

風太
「うん。それより皆、霧幻どうだった？」

『むかつく』

男子全員が即答した。

風太
「でしょ？」

雄二
「話がかなり逸れたな。試召戦争に戻ろう」

風太
「ミーティング？」

雄二
「あぁ」

秀吉
「雄二。一つ気になっていたんじゃが、どうしてDクラスなんじゃ

？段階を踏んでいくならＥクラスじゃろうし、勝負にでるならＡクラスじゃろう？」

瑞希
「そういえば、確かにそうですね」

風太
「何かある？」

雄二
「まあな」

瑞希
「どんな考えですか？」

雄二
「色々と理由はあるんだが、とりあえずＥクラスを攻めない理由は簡単だ。戦うまでもない相手だからな」

明久
「え？でも、僕らよりはクラスは上だよ？」

雄二
「ま、振り分け試験の時点では確かに向こうが強かったかもしれないな。けど実際のところは違う。オマエの周りにいる面子をよく見てみろ」

明久
「えーっと……美少女が三人と馬鹿が二人とムッツリが一人いるね」

雄二
「誰が美少女だと!?」

明久
「ええっ!?雄二が美少女に反応するの!?」

康太
「……（ポッ）」

明久
「ムッツリーニまで!?どうしよう、僕だけじゃツッコミ切れない!」

秀吉
「まぁまぁ。落ち着くのじゃ、代表にムッツリーニ」

雄二
「そ、そうだな」

明久
「いや、その前に美少女で取り乱すことに対してツッコミいれたいんだけど」

雄二
「ま、要するにだ」

コホン、と咳払いをして説明を続ける雄二。

雄二

「姫路に問題のない今、正面からやり合ってもEクラスには勝てる」

明久
「？それならDクラスとは正面からぶつかると厳しいの？」

雄二
「ああ。確実に勝てるとは言えないな」

明久
「だったら、最初から目標のAクラスに挑もうよ」

明久の言ってることは合ってるけど……

雄二
「これは初陣だからな。派手にやって今後の景気づけにしたい。それに、さっき言いかけた打倒Aクラスの作戦に必要なプロセスだしな」

まだあるの？

瑞希
「あ、あの！」

びっくり！瑞希には珍しいのかな？

雄二
「ん？どうした姫路」

瑞希
「えっと、その。さっき言いかけた、って……吉井君と坂本君は、

前から試召戦争について話し合ってたんですか？」

雄二
「ああ、それか。それはついさっき、姫路の為にって明久に相談されて――」

明久
「それはそうと！」」

分かりやすいなぁ明久は。

明久
「さっきの話、Ｄクラスに勝てなかったら意味がないよ」

雄二
「負けるわけないさ」

風太
「矛盾してんじゃん」

雄二
「さっきのはただ普通に挑めば確実とは言えないって話だ。お前らが俺に協力してくれるなら勝てる」

へぇ……よくわかったよ。

雄二
「いいか、お前ら。ウチのクラスは――最強だ」

不思議だなあ。なんの根拠もない言葉なのに
雄二の言葉にはその気にさせる『自信』があった。

島田
「面白そうじゃない！」

秀吉
「そうじゃな。Ａクラスの連中を引きずり落としてやるかの」

康太
「……（グッ）」

瑞希
「が、頑張りますっ」

風太
「楽しいじゃん！できたら！」

打倒Ａクラス。

実現不可能な絵空事かもしれない。

しかしやってみないとなにも始まらねぇ。

こうして全員で何かを成し遂げてみるのも悪くない。

雄二
「そうか。それじゃ、作戦を説明しよう」

涼しい風がそよぐ屋上で、俺達は勝利の為の作戦に耳を傾けた。

続く

第四問

Dクラス戦が始まった。

今現在前線にいるのは秀吉率いる先行部隊で、そことFクラスの間あたりに明久が部隊長の中堅部隊が配置されている。

全員初陣とだけあって気合が入っている。

しかし、俺はというと……。

風太
「ひ・ま！」

雄二
「しょうがないだろう。お前はうちのクラスの最終兵器なんだ。それを序盤で使うバカがどこにいる？」

明久あたりかな？

風太
「いやでも暇なんだけど」

雄二
「戦場の声聞いてみろ」

そう言われたのでよーく聞いてみると……

『さぁ来い！この負け犬が！』

『て、鉄人!?嫌だ!補習室は嫌なんだっ!』

『黙れ!捕虜は全員この戦闘が終わるまで補習室で特別抗議だ!終戦まで何時間かかるかわからんが、たっぷりと指導してやるからな』

『た、頼む!見逃してくれ!あんな拷問耐え切れる気がしない!』

『拷問?そんなことはしない。これは立派な教育だ。補習が終わる頃には趣味が勉強、尊敬するのは二宮金二郎、といった理想的な生徒に仕立て上げてやろう』

『お、鬼だ!誰か、助けっ――イヤァァ――(バタン、ガチャ)』

風太
「よし、やめた!」

雄二
「そう思うよな?」

風太
「……!!(コクコクコクコク)」

雄二
「おい、横田」

雄二が傍にいた適当なクラスメイトを呼んだ。

横田
「なんだ?坂本」

雄二
「中堅部隊に連絡を頼む。【逃げたらコロス】」

良く分かる。あのバカのことだ、絶対に総員退避しそうだ。

横田
「わかった。任せろ！」

横田はわざわざメモを取って教室から出て行った。

秀吉
「前線部隊、今戻ったぞい」

暫くしたら前線部隊隊長の秀吉が部隊を引き連れて帰ってきた。
出陣よりメンバーが少ないのは何人かは鉄人の餌食になっているんだろう。合唱。

風太
「お疲れ～。水」

部隊長は指示のために人一倍声を出さないといけないからな。喉も渇くだろうと思って俺は秀吉に水の入ったペットボトルを投げ渡してやった。もちろんしっかり冷やしてある。

秀吉
「おお、スマンのう風太。んく……んく……」

……もはや女だな。

秀吉
「んく……？……どうしたのじゃ風太？」

風太
「い、いや……なんでもない／／／」

秀吉
「そんな顔を赤らめられたらすごく気になるのじゃがのう・・・」

風太
「本当になんでもないって！気にするな！！それより、補充テスト受けてきたら？」

秀吉
「おお、そうじゃったな。そうするかの」

秀吉は補充テストを受けるために教室の奥へ行った。

美波「須川！離しなさい！ウチは吉井を絶対に許さないわ！殺してやるんだからぁぁ！」

須川「落ち着け島田！」

暫くすると、須川に羽交い絞めされた美波が物騒なことを叫びながら戻ってきた。

明久は何をしたの？

仕方ない……

風太
「美波……やめて……？ね……？」

涙目＋上目づかいに勝てるやつはいない！

美波
「う……分かったわ」

暴れるのをやめてくれた。ふっ……

風太
「回復してきたら？」

美波
「そうね、行ってくるわ」

美波は教室を出て行った。

風太
「ねぇ、雄二」

雄二

「何だ？」

風太
「帰っていい？」

雄二
「あぁ、お前はもういいぞ。」

風太
「そ、んじゃ」

雄二
「あぁ」

そう言って俺は帰ることにした。

～多重家～

風太
「はぁ、寝み……」

俺の家はマンションだ。

意外にも明久と同じで片雲とも一緒だ。片雲は俺の家の隣りである。

風太

「そういえば、片雲は何処に行ったんだ？」

片雲
「此処にいるが？」

風太
「どわっ！」

俺は勢いよくベッドから落ちた。片雲は俺の部屋のドアのところにいた。

風太
「いつ学校をでたの？」

片雲
「黒翼から戻ったとき」

風太
「はぁ、それより帰れ」

片雲
「晩メシおごれ」

風太
「い・や・だ！」

片雲
「ツレねーな」

そう言って帰った。

風太
「寝るか……」
そう言って俺は目を閉じた……

余談だが、Ｆクラスはｄクラスに勝ったらしい。

続く

第五問

翌日、いつも通り学校に向かう。

風太
「おはよう」

相変わらずの畳と卓袱台。ま、Ａクラスに勝つまでの辛抱だ。

雄二
「よう風太、ギリギリだな」

風太
「あ、雄二勝った？」

雄二
「当たり前だ」

既に到着していた雄二が胡坐をかいていた。
持っている英語の教科書は最後の悪あがきだろう。

風太
「ねぇ、馬鹿は？」

卓袱台に鞄が置いてあるから来ているはずだけど姿がない。

美波
「吉井なら逃げたわよ」

風太
「……何で？」

その後、昨日起きた事件？のことを教えてもらった。

帰るんじゃなかった。

明久
「うあー……づがれたー」

秀吉
「うむ。疲れたのう」

康太
「……（コクコク）」

風太
「そう？いつも通りだけど」

とりあえず四教科テストが終了。昼休みだ。

風太
「そういえば明久、美波から聞いたんだけど、船越女史はどうした？」

明久

「それなら僕の近所のお兄さん（？）を紹介してあげたよ」

風太
「よく助かったね」

明久
「まぁね」

そう言う明久は結構疲れた顔をしている。今日は消費した点数の補給の為に今日一日テストしかしていない。明久にとっては疲れ倍増だろう。

雄二
「よし、昼飯食いに行くぞ！今日はラーメンとカツ丼と炒飯とカレーにすっかな」

風太
「いや、多いでしょ」

雄二は食堂に行くようだ。俺はどうしよっかな？

美波
「ん？吉井たちは食堂に行くの？だったら一緒していい？」

雄二
「ああ、島田か。別に構わないぞ」

美波
「それじゃ、混ぜてもらうわね」

康太
「……（コクコク）」

明久
「じゃ、僕も今日は贅沢にソルトウォーターあたりを――」

風太
「塩水だろ？」

わざわざ英語で言うな。

瑞希
「あ、あの。皆さん……」

明久
「うん？あ、姫路さん。一緒に学食に行く？」

瑞希
「あ、いえ。え、えっと……、お、お昼なんですけど、その、昨日の約束の……」

秀吉
「おお、もしや弁当かのう？」

瑞希
「は、はいっ。迷惑じゃなかったらどうぞっ」

と、身体の後ろに隠していたバッグを出してくる姫路。

明久

「迷惑なもんか！ね、雄二！」

雄二
「ああ、そうだな。ありがたい」

瑞希
「そうですか？良かったぁ～」

美波
「むー……っ。瑞希って、意外に積極的なのね……」

秀吉
「それでは、せっかくのご馳走じゃし、こんな教室ではなくて屋上でも行くかのう」

風太
「ここで食うほうが凄いと思う」

こんな腐った畳と男臭い教室では食う気分にはなれない。屋上の気持ちの良い空間で頂くべきだ。

雄二
「そうか。それならお前ら先行っててくれ」

明久
「ん？雄二はどこか行くの？」

雄二
「飲み物でも買ってくる。昨日頑張ってくれた礼も兼ねてな」

美波
「あ、それならウチも行く！一人じゃ持ち切れないでしょ？」

おお、珍しく美波がやさしい。

雄二
「悪いな。それじゃ頼む」

美波
「おっけー」

雄二
「きちんと俺達の分をとっておけよ」

明久
「大丈夫だってば。あまり遅いとわからないけどね」

雄二
「そう遅くならないはずだ。じゃ、行ってくる」

きっと一階の売店で買ってくる気だろうな。

風太
「早く行こう！」

瑞希
「そうですね」

明久が瑞希のバックを受け取り、屋上に向かって歩いた。

何故か俺の危険を知らせるアラームがガンガンになってるんですけど。

屋上への扉を開けると、俺達を出迎えたのは抜けるような青空だった。

風太
「最高！」

秀吉
「なによりじゃな」

瑞希
「そうですねー」

まさに弁当日和だ。

瑞希
「あ、シートもあるんですよ」

シートを敷いてわいわいと準備を始める。もはや俺たちの貸切状態だ。

瑞希

「あの、あんまり自信はないんですけど……」

瑞希が重箱のふたを開けた。

『おおっ！』

俺たちは一斉に歓声をあげた。

見た目はかなりいい。唐揚げ、エビフライ、おにぎり、アスパラ巻きなどの定番のメニューが重箱の中に詰まっている。……何故か腐ったような匂いがする……？まさか！？

明久
「それじゃ、雄二には悪いけど、先に――」

康太
「……（ヒョイ）」

明久
「あっ、ずるいぞ、ムッツリーニっ」

風太
「待って！康太！」

俺の注意も聞かず、康太は流れるように口に運び――

康太
「……（パク）」

バタン　ガタガタガタガタガタ

豪快に顔から倒れ、ガタガタと震えだした。

明久
「……」

秀吉
「……」

風太
「あちゃ～」

俺達三人は顔を見合わせる。

俺は顔に手をつく。

瑞希
「わわっ、土屋君!?」

慌てた瑞希が割り箸を取り落とす。

康太
「……（ムクリ）」

すると康太が黙って起き上がった。

康太

「……（グッ）」

そして瑞希に向けて親指を立てる。

おそらく『すごく美味いぞ』と伝えたいんだろう。

瑞希

「あ、お口に合いましたか？良かったですっ」

だったら康太よ、何故足が尋常じゃなく震えているんだ？

瑞希

「良かったらどんどん食べてくださいね」

瑞希は笑顔で勧めてくる。

しかし俺はあの康太の姿が忘れられない……

明久

（みんな。あれ、どう思う？）

明久が瑞希に聞こえないくらいの小さな声で話し掛けてきた。

秀吉

（……どう考えても演技には見えん）

風太

（手遅れだった……）

明久

（分かってたの？）

風太
（匂いでね）

明久
（正直胃袋に自信はないよ。食事の回数が少なすぎて退化してるから）

風太
（嵐士なら半分いけるかも……）

表情は笑顔のまま崩さない。瑞希に気取られないためだ。

秀吉
（ならば、ワシら二人に任せてもらおう）

明久
（そんな、危ないよ！嵐士はいいとして！）

風太
（あとで死ぬよ、明久）

明久
（そんな、危ないよ！）

秀吉
（大丈夫じゃ。ワシは存外頑丈な胃袋をしていてな。ジャガイモの芽程度なら食ってもびくともせんのじゃ）

風太
（俺も替わるよ）

俺は目を閉じ、嵐士と替わる。

～嵐士視点～

何だ突然？ん？うまそうな弁当発見！

嵐士
「いただき！」

そう言って卵焼きを取ろうとすると、

雄二
「おう、待たせたな！へー、こりゃ旨そうじゃないか。どれどれ？」

明久
「あっ、雄二」

嵐士
「あ、てめ・・・」

俺から素手で卵焼きを奪い放り込み……

パク　　バタン――がシャガシャン、ガタガタガタガタ

ジュースの缶をぶちまけて倒れた。

美波

「さ、坂本!?ちょっと、どうしたの!?」

遅れて屋上に来た島田が雄二に駆け寄る。

これは……毒か?

雄二が明久に目で訴えた。

雄二

(毒を盛ったな)

明久

(毒じゃないよ。姫路さんの実力だよ)

明久も目で返事をする。

常に一緒に行動している明久だからこそ出来る技だ。

雄二

「あ、足が……攣ってな……」

姫路の実力だと知った雄二がウソをついた。

嵐士

「いったい何が……ッムグ!」

秀吉が俺の口を塞ぐ。言うなと、目で訴える。

明久
「あはは、ダッシュで階段の昇り降りしたからじゃないかな」

秀吉
「うむ、そうじゃな」

美波
「そうなの？坂本ってこれ以上ないくらい鍛えられてると思うけど」

そうだ！追求しろ！

明久
「そういえば島田さん。その手をついてるあたりにね」

美波
「ん？何？」

明久
「さっきまで虫の死骸があったんだよ」

美波
「えぇっ！？早く言ってよ！」

慌てて手をよける。

何言ってやがる！死骸なんてねぇだろ！

明久
「ごめん、島田さん。とりあえず手を洗ってきた方が良いよ」

美波
「そうね。ちょっと行ってくる」

くそ～、島田を退場させやがったな！

秀吉
「島田はなかなか食事にありつけずにいるのう」

明久
「本当だね」

はっはっは、男三人が笑い合う。

しかしその裏側では必死に作戦会議を行っている。

雄二
（明久、今度はお前がいけ！）

明久
（む、無理だよ！僕だったらきっと死んじゃう！）

秀吉
（流石にワシもさっきの姿を見ては決意が鈍る……）

明久
（雄二がいきなよ！姫路さんは雄二に食べてもらいたいはずだよ！）

秀吉
（そうかのう？姫路は明久に食べてもらいたそうじゃが）

明久
（そんなことないよ！乙女心をわかってないね！）

雄二
（俺もわかってないのはどちらかと言うとお前のことだと思うが）

明久
「（ええい往生際の悪い！）あっ！姫路さん、アレはなんだ！？」

瑞希
「えっ？なんですか？」

おい、まさか！

嵐士
（雄二～～！！！）

雄二
（おい、お前何を――）

明久
（おらぁっ！）

雄二
（もごぁぁっ！？）

弁当が雄二の口へと押し込まれた。

さらに明久はすぐさま雄二の顎を掴み、咀嚼させる。

明久
「ふぅ、これでよし」

秀吉
「……お主、存外鬼畜じゃな」

その意見は俺も賛成だ。

明久
「ごめん、見間違いだったよ」

瑞希
「あ、そうだったんですか」

しかし、姫路があんな古典的な手にひっかかるとは、天然だな。

明久
「お弁当美味しかったよ。ご馳走様」

秀吉
「うむ、大変良い腕じゃ」

嵐士
「ムーッ！」

瑞希
「あ、早いですね。もう食べちゃったんですか？」

明久
「すごい勢いだったよ。特に雄二が『美味しい美味しい』ってね」

視界の端では雄二が力なく首を振っている。
それは姫路に『うまかった』と主張しているのか、『もう勘弁してくれ』と主張しているのかは俺にはわからない。

瑞希
「そうですかー。嬉しいですっ」

明久
「いやいや、こちらこそありがとう。ね、雄二」

雄二
「う……うぅ……あ、ありがとうな、姫路……」

マズい、雄二の目が虚ろだ。

明久
「そういえば、美味しいと言えば駅前に新しい喫茶店が――」

明久が話題を逸らしにかかる。そりゃあ『また作ってきますね』なんて言われたらたまらんだろうな。

秀吉
「ああ、あの店じゃな。確かに評判が良いな」

瑞希
「え？そんなお店があるんですか？」

明久
「うん。今度今日のお礼に雄二がおごってくれるってさ」

雄二
「てめら、勝手なこと言うなっての」

もう帰るわ……

～風太視点～

なんとか生還したようだ。

嵐士がキレてたけど。

瑞希
「あ、そうでした」

瑞希がポン、と手を打った。

なんだ!?またアラームが!

明久
「ん?どうしたの?」

瑞希
「実はですね――」

ごそごそ、と鞄を探る。

瑞希
「デザートもあるんです」

明久
「ああっ！姫路さんアレはなんだ！？」

雄二
「明久！次は俺でもきっと死ぬ！」

……さっき……何があったの？

雄二
（明久！俺を殺す気か！？）

明久
（仕方がないんだよ！こんな任務は雄二にしかできない！ここは任せたぜっ）

雄二
（馬鹿を言うな！そんな少年漫画みたいな笑顔で言われてもできんものはできん！）

風太
（良い奴だった。）

雄二
（俺は死ぬのか！？）

明久
（この意気地なしっ！）

雄二
（そこまで言うならお前にやらせてやる！）

風太
（よし分かった！）

明久
（なっ！その構えは何！？僕をどうする気！？あと風太！そこは分かっちゃだめだ！）

雄二
（拳をキサマの鳩尾に打ち込んだあとで存分に詰め込んでくれる！歯を食いしばれ！）

風太
（俺はそれに協力する！）

明久
（いやぁー！殺人鬼ーー！）

雄二が拳を作り、俺が明久を羽交い絞めにしていると、秀吉がすっと立ち上がった。

秀吉
（……ワシがいこう）

風太
（あれ？片雲は？）

秀吉
（あそこで寝ておるぞ）

秀吉が指を指した方向には

片雲
「ｚｚｚ・・・」

貯水タンクの上で寝ている片雲がいた。

風太
「はぁ……」

俺は立ち上がり、片雲のほうへ歩き、タンクの上に登り、

風太
「せいっ！！」

ドゴッッ！！！

片雲
「がはっ！」

風太

「起きたかコラ」

片雲
「ふざけんなやゴラ」

そんなことをしていると、

秀吉
「うむ。任せておけ。頂きます」

秀吉が何かが入っているであろう容器を傾け中身を一気にかきこみ、

秀吉
「むぐむぐ。なんじゃ、以外に普通じゃとゴばぁっ！」

死んだ。

風太・片雲
「「秀吉ーーーーーーーーーーー！！！！！！！！！」」

俺らの声はしばらくこだました。

美波
「そいえば坂本、次の目標だけど」

雄二

「ん？試召戦争のか？」

美波
「うん」

激しい昼食を終え、何とか復活した皆でお茶をすする。特に秀吉にお茶を飲ます。殺菌成分が含まれているから。

美波
「相手はＢクラスなの？」

雄二
「ああ。そうだ」

美波
「どうしてＢクラスなの？目標はＡクラスなんでしょう？」

まぁ確かにそうだろうね。通過点のＢクラスを相手にする理由が分からないだろうから。

雄二
「正直に言おう」

雄二が神妙な面持ちになる。

雄二
「どんな作戦でも、うちの戦力じゃＡクラスには勝てやしない」

戦う前から降伏宣言。雄二らしくないなぁ。

しかし、AクラスとFクラスの差が激しいのも事実。特にそのAクラス代表である霧島翔子。たとえ彼女を追い詰めても返り討ちにされるであろう。

美波
「それじゃ。ウチらの目的はBクラスに変更ってこと？」

Aクラスほどではないけど、Bクラスの設備とて立派過ぎるほど。皆も文句は言わないだろう。

雄二
「いいや、そんなことはない。Aクラスをやる」

明久
「雄二、さっきといってることが違うじゃないか」

美波の言葉を継ぐように明久が間に入る。

雄二
「クラス単位では勝てないと思う。だから一騎打ちに持ち込むつもりだ」

風太
「何故に？」

雄二
「Bクラスを使う」

風太
「無視すんな」

雄二
「ぐはっ！？」

ドゴッ！、と雄二の腹を殴る。

雄二
「ゲホッゲホッ……ところで試召戦争で下位クラスが負けた場合の設備はどうなるか知っているよな？」

風太
「明久は知らないでしょ」

明久
「し、失礼な！もちろん知ってるよ！」

じゃぁ瑞希から聞くことをやめたら？

明久
「設備のランクを落とされるんだよ」

雄二
「……まあいい。つまり、Ｂクラスならｃクラスの設備に落とされるわけだ」

明久
「そうだね。常識だね」

雄二
「では、上位クラスが負けた場合は？」

明久
「悔しい」

あながち間違いではない。

雄二
「ムッツリーニ、ペンチ」

明久
「やや、僕を爪切りいらずのからだにする動きが」

瑞希
「相手クラスと設備が入れ替えられちゃうんですよ」

瑞希が明久を庇う。そんなに好きなのか？いや同情か。

明久
「つまり、うちに負けたクラスは最低の設備と入れ替えられるわけだね」

雄二
「ああ。そのシステムを利用して、交渉をする」

瑞希
「交渉、ですか？」

風太
「へぇ、よく考えたね。Ｂクラスに攻め込むようにさせる。そうさせればＣクラス設備で済むからね」

雄二
「そうだ。まずうまくいくだろう」

明久
「ふんふん。それで？」

雄二
「それをネタにＡクラスと交渉する。『Ｂクラスとの勝負直後に攻め込むぞ』といった具合にな」

明久
「なるほどね！」

風太
「策士だ……」

学年で二番手のクラスと戦った後に休む暇なくまた戦争。これはＡクラスでもキツいだろう。

Ｆクラスも連戦だが、我らには不満というモチベーションがある。勝っても何も得られないＡクラスは俺たちと勝負するのを嫌がるはずだからね。

秀吉
「じゃが、それでも問題はあるじゃろう。体力としては辛いし面倒じゃが、Ａクラスとしては一騎打ちよりも試召戦争の方が確実であるのは確かじゃからな。それに――」

明久
「それに？」

秀吉
「そもそも一騎打ちで勝てるのじゃろうか？こちらに姫路がいるということは既に知れ渡っていることじゃろう？」

確かに。さすがにバレてるからね。

雄二
「そのへんに関しては考えがある。心配するな」

風太
「とにかくＢクラスを殺れと」

雄二
「ああ。細かいことはその後に説明してやる」

明久
「ふーん。ま、考えがあるならいいけど」

明久。お前はなにを考えている。

雄二
「で、明久」

明久
「ん？」

雄二

「今日のテストが終わったら、Ｂクラスに宣戦布告して来い」

明久
「断る。雄二が行けばいいじゃないか」

だろうね。

雄二
「やれやれ。それならジャンケンで決めないか」

明久
「ジャンケン？」

風太
「公平だよ？」

明久
「ＯＫ。乗った」

雄二
「よし。負けたヤツが行く、で良いな？」

絶対裏がある。

雄二
「ただのジャンケンでもつまらないし、心理戦でいこう」

この勝負、見えた。

明久

「わかった。それなら僕はグーを出すよ」

雄二
「そうかそれなら俺は――」

雄二が指をパキパキ鳴らしながら

雄二
「――お前がグーを出さなかったらブチ殺す」

なにその心理戦！だいたい予想してたけど！

雄二
「行くぞ、ジャンケン」

明久
「わぁぁっ！」

雄二
「ホイッ」

パー（雄二）

グー（明久）

雄二
「決まりだ。行って来い」

明久
「絶対に嫌だ！」

風太
「うるせーな」

ゲシゲシゲシ、と明久を蹴る。

明久
「痛い！蹴らないで！」

雄二
「Ｄクラスの時みたいに殴られるのを心配しているのか？」

明久
「それもある！」

雄二
「それなら今度こそ大丈夫だ。保障する」

雄二が説得してる。

雄二
「なぜなら、Ｂクラスは美少年好きが多いらしい」

明久
「そっか。それなら確かに大丈夫だね」

明久、それは死亡フラグなんじゃないのかな？

雄二
「でも、お前不細工だしな……」

明久
「失礼な！３６５度どこからどう見ても美少年じゃないか！」

雄二
「５度多いぞ」

秀吉
「実質５度じゃな」

明久
「二人なんて嫌いだっ」

雄二
「とにかく、頼んだぞ」

こうして昼食はお開きになり、再びテスト漬けの午後が始まった。

～風太家～

ＰｉＰｉＰｉＰｉ！

突然俺の携帯が鳴る。電話だ。

風太
「もしもし？」

？？？

『風太？私、綾子』

風太

「ん？アヤか、どした？」

相手は機関綾子（キカンアヤコ）。俺の仲間でもある。

綾子

『実はカクカクシカジカって言うわけなんだ』

風太

「つまりは家にくると」

綾子

『うん』

風太

「分かった。今から来て」

綾子

『ありがとう～。でも、もう居るんだよね』

風太

「……はい？」

綾子

『じゃぁ鳴らすね』

そう言った後、

ピンポーン

と鳴った。マジですか。

俺は玄関に向かい、ドアを開けると、

綾子
「こんばんは～」

風太
「……」

綾子
「なに？その沈黙は？」

風太
「予想外だからこその反応だよ」

綾子
「まぁいいや。おじゃましまーす」

片雲
「ついでに俺もー」

風太
「お前は来るな」

ガスッ！

俺は片雲の顔面に右ストレートを浴びせてやった。

片雲
「たまには三人で話そうぜ～」

だが、何事も無かったかのように話を戻した。

風太
「同棲している奴はどうした？」

片雲
「友達と外食だとさ」

風太
「……分かったよ上がって」

片雲
「サンキュ」

そう言って片雲は上がってくる。

風太
「じゃぁ、飲み物買ってくるよ」

綾子
「お願いねぇ～」

片雲
「サンキュー」

風太
「……はぁ……」

俺は家を出てコンビニに行った。

風太
「どれがいいんだ～？」

俺は飲み物で悩んだ。何故なら…

風太
「あいつらの好きなのがなぁ……」

そう、あの二人のお気に入りのジュースが無いからだ。

風太
「あぁぁ～～～」

そうしていると、

？？？
「風太？何してるの？」

後ろからどっかの馬鹿の声が聞こえてきた。

風太
「明久？お前こそどうした？」

振りかえった先にいたのは、

明久
「風太を見かけたからね」

風太
「俺はちょっと買い物に」

バカ代表の明久が居た。

風太
「そうだ。明久、家に来ない？」

明久
「え？いいの？」

風太
「まだ飯食ってないからね」

そう言った瞬間明久の目が光った。

明久
「行く！絶対行く！」

風太
「そう、ならさっさと行くよ」

そう言って俺は買い物を済ませ家に帰った。

風太
「ただいまー」

綾子・片雲
「「おかえりー」」

明久
「おじゃましまーす」

綾子
「明久君？何でいるの？」

片雲
「このバカどうした？」

風太
「コンビニで拾った」

片雲
「そうか、ゴミかと思ったじゃねぇか」

明久
「酷いよ！」

風太
「それよりご飯たべよ？」

綾子・片雲・明久
「「「いえーい！」」」

風太
「はあ……」

そのあと、ご飯食って談笑していると、

綾子
「そういえば戦争どうだった？」

そう聞いてくるので

風太
「勝ったらしいよ。ねぇ、明久。」

明久
「うん」

綾子
「瑞希ちゃんが居たらねぇ」

片雲
「やはり知っていたか」

当たり前だよ、と言いたげな顔をするアヤ。

風太
「次はＢクラスと戦争をする」

片雲
「その後にＡクラスだ」

片雲が俺の言葉の続きを言ってくれた。

綾子
「そう、じゃぁそれはFクラスの負けだね」

風太
「はぁ？」

俺はアヤを睨む。

綾子
「そのままだよ」

アヤも睨んでくる。

風太
「いや、俺たちFクラスは絶対に勝つ」

綾子
「そんな自信があるなら賭けをしない？」

風太
「賭け？」

綾子
「うん、負けたほうが勝ったほうの言うことを聞く。もちろん、クラスでね」

俺は少し考え、

風太
「いいよ。その賭け乗った！」

綾子
「決定だね」

そのあとも談笑してから皆帰った。

それにしてもアヤが嬉しそうだったな……

風太
「はぁ……疲れた……」

そう言って俺は寝た。

続く

第六問

キーンコーンカーンコーン

昼休み終了のベル。すなわちＢクラス戦開始の合図。

雄二
「よし、行ってこい！目指すはシステムデスクだ！」

『サー、イエッサー！』

今回の作戦はまず敵を教室に押し込むことが目的なので、渡り廊下戦は絶対に負けられない。俺達は廊下へと駆け出した。

風太
「Ｂクラスの連中は絶対に生きて返すなよ！逃げたら明日は来ない」

『了解！！』

うちのクラスは勢いは良いが、戦力差が半端じゃない。第一陣がことごとくやられていく。

つまりは俺も出ることになる。

前に出て、

風太
「Ｆクラス、多重風太！かかってこい！」

B生徒
「Fクラスの癖に生意気な！」

B生徒
「やっちまえ！」

二人か、余裕だ。

風太
「ふん、来い！」

『試獣（サモン）召喚！！』

科目は日本史、俺たちの召喚獣が姿を現す。

相手も強そう。

俺の召喚獣はキングダムハーツのヴェントゥスの服だ。
左肩の少し下から肘の少し上ぐらいまでの鎧があり、右の腰辺りからももの右側を覆っている鎧がある。服は白くて真ん中に襟元から全開できるぐらいまでのジッパーがあり左胸の真ん中に謎の赤いマークが書いてあった。ズボンは緑と茶色の中間ぐらいの色をした無地で膝くらいまでだ。武器は羽のような形をしたキーブレードで逆手に持っている。

遅れて点数が表示される。

日本史

Fクラス
多重風太　３１２点
　　ＶＳ　　ＶＳ
Bクラス
野中長男　１７２点
秋田正義　１４５点

調子悪いな。

B生徒
「な、なんだその点数は！？」

B生徒
「Aクラス並じゃないか！？」

風太
「それじゃ、ウォーミングアップだ」

俺の召喚獣は相手の召喚獣に近づき

風太
「それではさよなら♪」

ズバッ！

斬った。

B生徒
「ぐわぁ！」

B生徒
「く、野中がやられた！」

ふむ、一人か。じゃぁ、

風太
「お前も終わりだ！」

一瞬のうちに相手に近づき斬り捨てる。音がしないくらいの速さで。

風太
「終了。西村先生～！こいつらお願いします」

西村
「さぁ来い！負け犬が！」

二人の生徒が連れて行かれた。あと先生、言葉を改めましょう。

B生徒
「岩下と菊入が戦死したぞ！」

B生徒
「こっちは野中達が一瞬でやられた！！」

B生徒
「なっ！そんな馬鹿な！？」

B生徒
「こっちもまずい！獅子神が来た！」

瑞希と片雲は結構やってるねぇ。

瑞希
「み、皆さん、頑張ってくださいー」

瑞希の指揮官らしくない指示。しかし、効果は絶大だ。

F生徒
「やったるでぇーっ！」

F生徒
「姫路さんサイコーッ！」

信者急増中。

B生徒
「中堅部隊と入れ替わりながら後退！戦死だけはするな！」

……馬鹿だなぁ。俺たちの手のひらで踊らされることに……残念な奴らだ。

秀吉
「明久、ワシらは教室に戻るぞ」

明久
「ん？なんで？」

秀吉達の会話が聞こえる……

秀吉
「Ｂクラスの代表じゃが……」

明久
「うん」

秀吉
「あの根本らしい」

明久
「根本って、あの根本恭二？」

秀吉
「うむ」

やばいな。

風太
「明久、お前は戻れ。教室が大変なことになる」

根本のヤツはとにかく評判が悪い。カンニングなど、目的の為なら手段は選ばないヤツだ。

明久
「確かに……戻るからよろしく、風太」

風太
「はいはい、任されたよ」

そう言って明久と秀吉、その他何人かを連れて教室に戻って行った。

風太
「さてと嵐士、出番だよ。暴れて来い！！」

それから俺は嵐士と替わった。

～嵐士視点～

嵐士
「よっしゃー！暴れるぜぇ！」

そう言って俺は左目にアイパッチもとい、眼帯を付けた。

嵐士
「フォームチェンジ！」

言った直後、召喚獣は光に包まれ、服が変わった。

特長的なのは、服のほとんどが赤で統一されていることと、ＫＢが二本に増えていること。
さらに、ＫＢは鍵の形をしたものと、白くて輝いているものの二刀流になっている。

B生徒
「なんだ！それは！」

B生徒
「特殊能力か！」

B生徒
「いや違う！『フォームマスター』だ！」

B生徒
「構うな！やれ！」

そう言って十人の生徒が来た。余裕だ。

嵐士
「相手にならねぇな」

Bクラス生徒
「なんだと！？それな――」

ズバババッ！！

気付いた時には三体の召喚獣が倒れていた。

点数が表示された。

現国

Fクラス
嵐士　　７４６点
ＶＳ　　ＶＳ
Ｂクラス
生徒十人　合計１９５７点

雑だな。

Ｂ生徒
「怪物だ！」

Ｂ生徒
「くそ！死ねー！」

Ｂ生徒
「やめろ！」

嵐士
「ふん。お前が死ね」

そこから残った相手を斬りまくった。

それからしばらくして、

須川
「嵐士！」

嵐士
「どうした？」

須川
「……島田が捕まった」

嵐士
「……あのクズの仕業か」

須川が怯んだ。それもそうだ、俺がもの凄い殺気を放つのだから。

須川
「ん？吉井！戻ってきたか！」

馬鹿が戻ってきた。だが、今はそれどころじゃない。

秀吉
「どこにいくのじゃ！嵐士！」

嵐士
「……島田を助ける」

そう言い残し、俺は歩く。

嵐士
「……島田」

美波
「嵐士！？」

B生徒
「そこで止まれ！それ以上近寄るなら、召喚獣に止めを刺して、この女を補習室送りにしてやるぞ！」

ただでさえ少ない女子を人質にとって戦死ではなく補習室送りをちらつかせ、こっちの士気を挫く作戦か。

下手に動けば島田を補習室送り。さて、どうするか……なら

嵐士
「俺を人質にしたらどうだ？」

B生徒
「！……ほぉ、ならこっちに来い」

B生徒
「武器を捨ててだ」

俺の召喚獣はＫＢを地面に突き刺し、歩いて行く。

俺が着くと二人は島田を解放した。

嵐士
「ふっ（かかった！）……気づけよ。このくらいよ！」

俺は不敵に笑い叫ぶと、ＫＢが手元に来た。そこから素早い動きで二体の召喚獣の首を斬った。

B生徒

「な……せこいぞ！」

B生徒
「お前これを狙って……」

俺は近づき、他に聞こえないような小さい声で、

嵐士
「俺の惚れた女に手を出したからだ」

と、ドスをきかせて言った。

そのあと、相手の二人は補習室に連れて行かれた。

嵐士
「大丈夫か？」

美波
「……うん……ありがとう」

そう言ったとき島田は泣きそうだった。

嵐士
「おいおい、泣いてどうする？」

美波
「ごめん」

嵐士
「いんだよこれくらい。気分晴らしたいなら馬鹿でも殴っとけ」

美波
「うん！」

その直後、俺は島田から目を逸らした。何故なら島田の笑顔に見惚れてしまったからだ。

その後、馬鹿の断末魔が聞こえたが、ほっとこう。

それからしばらくするといつのまにか結ばれていた協定により休戦になった。

明久
「う……ん……」

嵐士
「起きたか、馬鹿」

明久
「いきなり馬鹿は酷くない？」

嵐士
「本当のことだ。それよりめんどいから戻る」

そう言って俺は寝た。

～風太視点～

風太
「う～ん。おはよう。今どう？」

秀吉
「今は協定どおり休戦中じゃ。続きは明日になる」

協定？何のこと？

明久
「戦況は？」

雄二
「一応計画通り教室前に攻め込んだ。もっとも、こちらの被害も少なくはないがな」

明久
「ハプニングはあったけど、今のところ順調ってわけだね」

雄二
「まぁな」

結構有利な状況のようだ。

風太
「俺眠いから寝るわ」

秀吉
「分かったのじゃ」
俺は目を閉じ寝た。

風太
「ん……あれ？雄二達は？」

片雲
「雄二達ならCクラスに行ったぞ」

風太
「そう……まずいかも……」

秀吉
「なんでじゃ？」

風太
「根本がいるね……」

片雲
「何！？」

秀吉
「それは本当か！？」

風太
「あぁ。だけど、心配しなくていいよ」

秀吉
「何故そんなことが言えるのじゃ！」

秀吉が俺に詰め寄る。そんな答えは簡単だ。

風太
「信じてるからだよ」

秀吉が呆気にとられた。

片雲
「それなら俺も信じなくちゃな」

片雲は納得してくれた。

秀吉
「……そうじゃな」

なにこの茶番。

風太
「そうだよ。だから信じるんだよ？」

そう言うと秀吉は何も言わずにただ頷いた。

風太

「と言っても、雄二は明久を置いて来るけどね」

片雲
「おい」

秀吉
「それじゃ駄目なのじゃ！」

雄二
「くそっ、根本の野郎……！！」

瑞希
「はぁ、はぁ……つ、疲れ、ました…」

風太
「雄二！瑞希！康太！無事だったの！？」

片雲
「何故死んだことが前提なんだ」

お前のツッコミはスルーだよ馬鹿野郎。

雄二と瑞希と康太が帰ってきた。走って帰ってきたみたいで、瑞希が肩で息をしている。やっぱりね……

康太
「……根本が、協定違反をした」

風太
「そう……だけど、予想通りだよ」

雄二
「どういうことだ？」

風太
「ちょっとね。それより俺に作戦があるけど、いい？」

雄二
「……分かった」

俺と雄二は教室の隅に移動した。

風太
「それで、さっき言ったことだけど」

雄二
「あぁ」

風太
「これでどう？――――――というのだけど」

雄二
「いいな。それで行こう」

これで、とりあえずは対策を取った。あとは明久を待つだけだ。

明久
「あー、疲れたー」

ちょうど来た。

瑞希
「よ、吉井君！無事だったんですね！」

戸が開くと同時に瑞希が明久の元へ駆け寄った。よほど心配したんだ。

明久
「うん。このくらいなんともいだぁっ！」

美波がおもいっきり明久の爪先を踏み付けた。今日は明久の扱いが特に悪いな。

美波
「ふんっ」

明久
「し、島田さん。僕が何か悪いことでも」

美波
「（キッ！）」

明久
「あ。い、いや。美波」

狼もビビりそうな眼光で明久を睨んだ。
呼び方から察するに、微妙に進展があったらしい。

瑞希
「……随分二人とも仲良くなったみたいですね？」

明久
「え？これで？」

ま、あいつはなんにも気付いてないんだろう。筋金入りの朴念仁だからね。

雄二
「お。戻ったか。お疲れさん」

秀吉
「無事じゃったようじゃな」

雄二
「さて、お前ら」

その場に残る全員を見回して雄二が告げる。

雄二
「こうなった以上、Ｃクラスも敵だ。同盟戦がない以上は連戦という形になるだろうが、正直Ｂクラス戦の直後にＣクラス戦はきつい」

風太
「まぁ、根本の策略なんだけど」

片雲
「Ｃクラスの餌食に変わらない」

秀吉
「そうじゃな……」

雄二
「心配するな。向こうがそう来るなら、こっちにだって考えがある」

明久
「考え？」

雄二
「ああ。明日の朝に実行する。目には目を、だ」

この日はこれで解散となり、続きは明日への持ち越しとなった。

続く

第七問（前書き）

次回から二、三週間くらいで更新します。誠に勝手ながらすいません。

第七問

雄二
「昨日言っていた作戦を実行する」

次の日。登校した俺たちに雄二は開口一番にそう告げた。

明久
「作戦？でも、開戦時刻はまだだよ？」

風太
「Ｂクラスじゃなくて Ｃクラスに」

明久
「あ、なるほど。それで何をすんの？」

雄二
「秀吉にコイツを着てもらう」

そう言って雄二が鞄から取り出したのは、我が文月学園指定女子制服だった。

……雄二、確かに言ったけど……本当に用意するんだ……

秀吉
「それは別に構わんが、ワシが女装してどうするんじゃ？」

少しは構った方がいいと思うぞ。

風太
「秀吉にAクラスの木下優子として使者になるんだ」

雄二
「そういうことだ。だから秀吉、用意してくれ」

秀吉
「う、うむ……」

雄二から制服を受け取った秀吉はその場で生着替えを始める。

風太
「明久……気持ちは分からないでもない……」

明久
「ありがとう」

康太
「……！！（パシャパシャパシャ！）」

指が擦り切れるんじゃないかと言うほどのスピードでカメラのシャッターを切る康太。

君はエロが絡んだらとんでもないほど身体能力が上がるね。

秀吉
「よし、着替え終わったぞい。ん？皆どうした？」

秀吉……あなたは女子ですか？

雄二
「さぁな?俺にもよくわからん」

秀吉
「おかしな連中じゃのう」

いや、どちらかと言うと秀吉の方がおかしいと思うよ。

雄二
「んじゃ、Cクラスに行くぞ」

秀吉
「うむ」

明久
「あ、僕も行くよ」

風太
「いってら~」

雄二達はCクラスに向かった。

戦争まであと十分というところで戻ってきた。

風太
「作戦成功?」

雄二
「あぁ」

風太
「よし！それじゃぁ今日は霧幻に暴れてもらうかな」

俺は霧幻と替わった。

～霧幻視点～

秀吉
「ドアと壁をうまく使うんじゃ！戦線を拡大させるでないぞ！」

秀吉君の指示が飛ぶ。

午前九時より昨日中断されたＢクラス前という位置から進軍を開始した。

雄二君の指示は『敵を教室内に閉じ込めろ』とのこと。

この指示を遂行しようとしてはいるものの、一つ問題があった。

瑞希さんが戦争に参加する気配がない。

秀吉
「勝負は極力単教科で挑のじゃ！補給も念入りに行え！」

そんなわけで、姫路さんの代わりに副司令の秀吉君が指揮をとって

いる。

ちなみに僕は数学のエリアを専門に相手しています。

F生徒
「左側出入り口、押し戻されています！」

F生徒
「古典の戦力が足りない！援軍を頼む！」

強力な個人戦力で流れを変えないと突破される可能性がある。

明久
「姫路さん、左側に援護を！」

瑞希
「あ、そ、そのっ……」

その瑞樹さんが泣きそうな顔でオロオロしている。しょうがない……

霧幻
「明久君、応急処置を！」

明久
「わかった！だあぁっ！」

明久君が走った先には古典の竹中先生が居て、明久君が耳打ちした。
あ、先生が走って何処かに行った。・・・〜脅迫ネタ・古典編〜を使ったね。

霧幻
「さて、僕もやらないとね！」

今の僕の召喚獣は青を中心とした服だ。武器はＫＢだが、嵐士のときと同じ鍵の形をしたものはあるが、二刀流ではない。足元が青くきらきらと光っている。

霧幻
「さぁ、いくよ！イッツ・ショータイム！」

相手は・・・ふむ、結構いるね。

数学

Ｆクラス
霧幻　　６４８点
ＶＳ　　ＶＳ
Ｂクラス集団　４３７５点

だけど、敵じゃないね。

僕の召喚獣は歩いているわけでもなく動いた。その状態でＫＢを前に突き出し、

パパパパパンッ！

突然ＫＢの先から弾が出る。実弾ではない。魔法でできている。つまりは・・・

Ｂ生徒

「ぐわぁ！」

B生徒
「なんだ今のは！」

B生徒
「追尾能力か！？」

相手を追いかけることができる。

霧幻
「もっと痛みつけてあげるからねぇ」

そう言って撃つのをやめない。楽しいけど、むごいね。

しばらくして、

F生徒
「右側出入り口、教科が現国に変更されました！」

霧幻
「何だって！？数学教師はどうしたの！？」

Fクラス
「Bクラス内に拉致された模様！」

ん？どうして知らないのか？それは単純に一分くらいよそ見していたからである。

霧幻

「はぁ・・・使いたくないんだけどなぁ・・・」

本当に替えられている。使うしかないなぁ・・・

霧幻
「はぁ・・・特殊能力発動！［コンタクトブレイブ！］」

僕の能力は『化合』。他の人格の能力や、点数をそのまま引き継ぐことができる。
ブレイブは嵐士。
・・・まぁ実際、僕達自身も合わさるんだけどね。名前は『嵐霧（ランム）』

～嵐霧視点～

嵐霧
「ん・・・はぁ」

一回伸びをする。

霧幻
―慣れないねぇ。

嵐士
―だな。

ちなみに召喚獣は紫になり、武器は鍵と白いＫＢが二刀流だ。まぁ、俺たち自身も変わっている。髪がメッシュの部分が紫になり、右目も紫になっている。そして、眼帯を左目にし、眼鏡をかけている。

さらにしばらくして雄二達本隊が来た。

嵐霧
「？どうした？」

雄二
「姫路を参加させるなって明久がな」

嵐霧
「へぇ」

根本
「お前らいい加減諦めろよな。昨日から教室の出入り口に人が集まりやがって。暑苦しいことこの上ないっての」

雄二
「ふん。軟弱なＢクラス代表様はそろそろ降参か？」

挑発ね。協力しようか。

根本
「はァ？ギブアップはそっちだろ？」

嵐霧
「無用な心配だぞ。ってかお前に心配されたくないｗｗｗ」

根本
「んなっ！・・・でもそうか？頼みの姫路さんも調子が悪そうだぜ？」

はぁ・・・くだらない、片づける。

嵐霧
「雄二、こいつら蹴散らしてもいいか？」

雄二
「あぁ、構わない」

根本
「けっ。言ってろ。どうせもうすぐｄ「ぐわぁぁ！」なんだ！？」

嵐霧
「どんどんいくぜ！」

『わぁぁぁぁ！！』

根本
「なんだアイツは！？」

現代国語

Ｆクラス　嵐霧　　７２３点
ＶＳ　　ＶＳ

Ｂクラス集団　５７２８点

どんどん潰してく！

雄二
「嵐霧！態勢を立て直す！一旦下がるぞ！」

雄二が下がれとのことだ

嵐霧
「しょうがないなぁ・・・」

まだ殺り切れてないのに・・・

根本
「どうした、散々ふかしておきながら逃げるのか？」

雄二
「あとは任せたぞ、明久」

・・・明久？よく見るといない。

明久
「だぁぁーーっしゃぁーっ！」

ドゴォッ！

豪快な音を立て、Ｂクラスの壁が崩れた。・・・いいなぁ・・・

根本

「んなっ！？」

戦力をほとんど前に出した根本の防御は薄い。

明久
「くたばれ、根本恭二ぃーっ！」

美波
「遠藤先生！Ｆクラス島田が――」

山本
「Ｂクラス山本が受けます！試獣召喚（サモン）！」

明久
「くっ！近衛部隊か！」

う～～ん・・・いけるかな？まぁいいや、ダッシュ！

俺は召喚獣を移動させた。

嵐霧
「エアスライド！」

その直後、召喚獣は一瞬ブレ、高速で根本の目の前移動したが、

ダン、ダンッ！

どうやらその必要がないらしい。

出入り口を人で埋め尽くされ四月とは思えないほど熱気がこもった

教室。そこに突如現れた生徒と教師、二人分の着地音が響き渡る。

エアコンが停止したので涼を得る為に開けられた窓。

そこから屋上よりロープを使って二人の人影が飛び込み、根本の前に降り立った。

康太
「……Fクラス、土屋康太」

根本
「き、キサマ……！」

康太
「……Bクラス根本恭二に保健体育勝負を申し込む」

根本
「ムッツリィーニィーーッ！」

近衛部隊は明久たちの周り。丸裸の王を守る兵士はもうどこにもいない。

康太
「――試獣召喚（サモン）」

保健体育

Fクラス

土屋康太　４４１点
ＶＳ　　ＶＳ
Ｂクラス
根本恭二　２０３点

忍者の格好をした康太の召喚獣は手にした小太刀を一閃し、一撃で敵を切り捨てた。

今ここに、Ｂクラス戦は終結した！

続く

第八問

秀吉
「明久、随分と思い切った行動に出たのう」

明久
「うぅ……。痛いよう、痛いよう……」

素手で壁ぶっ壊したからな。・・・まぁ、馬鹿だからかもしれないけど。

秀吉
「なんとも……お主らしい作戦じゃったな」

明久
「で、でしょ？もっと褒めてもいいと思うよ？」

嵐霧
「後のことなんて考えず、自分の立場を追い詰める。バカバカしいくらい男気溢れる素晴らしい作戦だった！！明久！！」

明久
「遠まわしに馬鹿って言ってない？」

嵐霧
「・・・さすがキング・オブ・馬鹿だな・・・」

明久
「ひどくない！？」
事実なんだが・・・。それより疲れたから替わるか・・・
風太
―お疲れ～
～風太視点～
・・・おう・・・すごいことになってる・・・
風太
「明久、君は期待を裏切らないよ！」
明久
「どういう意味で？」
明久がきらきらと目を輝かせて聞いてくる。そりゃもちろん・・・
風太
「馬鹿として☆」
明久
「ひどいよ！」
明久がうな垂れる。諦めて、明久。

雄二
「さて、それじゃ嬉し恥ずかし戦後対談をするんだから静かにしろ。な、負け組代表さん？」

根本
「・・・・・」

凄い勢いがなくなった様子で床に座り込む根本。

雄二
「本来なら設備を明け渡してもらい、お前らには素敵な卓袱台をプレゼントするとこだが、特別に免除してやらんでもない」

雄二の言葉に周りが騒ぎ始めた。

雄二
「落ち着け、皆。前にも言ったが、俺達の目標はＡクラスだ。ここがゴールじゃない」

風太
「いわゆる通過点だ」

雄二
「だから、Ｂクラスが条件を飲めば解放してやろうかと思う」

雄二は説得力あるね。皆納得しちゃったよ。

根本
「・・・条件はなんだ」

雄二
「条件？それはお前だよ、負け組代表さん」

根本
「俺、だと？」

雄二
「ああ。お前には散々好き勝手やってもらったし正直去年から目障りだったんだよな」

あぁ～・・・相当きてるね。雄二。

雄二
「そこで、お前らＢクラスに特別チャンスだ。Ａクラスに行って、試召戦争の準備が出来ていると宣言して来い。そうすれば、今回は設備については見逃してやってもいい。ただし、宣戦布告はするな。すると戦争は避けられないからな。あくまでも戦争の意思と準備があるとだけ伝えるんだ」

根本
「・・・それだけでいいのか？」

雄二
「ああ。Ｂクラス代表がこれを着て言った通りに行動してくれたら見逃そう」

そう言って雄二が取り出したのは、先程秀吉が着ていた女子制服。

・・・うぇっぷ・・・

根本

「ば、馬鹿なことを言うな！この俺がそんなふざけたことを……」

まぁ、妥当な反応だな。だけどね・・・

B生徒
「Bクラス生徒全員で必ず実現させよう！」

B生徒
「任せて！必ずやらせるから！」

B生徒
「それだけで教室を守れるなら、やらない手はないな！」

Bクラス全員での裏切り。ぷくく・・・

雄二
「んじゃ、決定だな」

根本
「くっ！よ、寄るな！変態ぐふぅっ！」

B生徒
「とりあえず黙らせました」

雄二
「お、おう。ありがとう」

さすがに変わり身が早くない？

雄二

「では、着付けに移るとするか。明久、任せたぞ」

明久
「了解っ」

そう言って明久は根本の服を脱がす。何この地獄絵図。

風太
「ん～、眠い。じゃぁ、そういうことなので、雄二～俺帰るから～」

雄二
「ん？おぅ。じゃぁな」

雄二に手を振って鞄を取りに戻るために教室に向かう。

風太
「～～♪～～♪～～。っ！！」

なんだ・・・頭が・・・この痛み・・・まずい・・・意識が・・・・
？？？

「あれ？風太君？大丈夫？風太君！？風太君！！」

だれだろう・・・だけど・・・もう・・・限界・・・

俺はその場で倒れた。

～所変わって保健室～

風太
「んん・・・ん?誰だろう・・・」

俺が起きると誰かが寝ている。

とりあえず上半身を起こすと寝ていた人が丁度起きた。しかも、そのひとは知り合いだった。その人物は・・・

優子
「ん・・・あっ、風太君起きたんだ」

紛れもない俺の思い人である秀吉の双子の姉、木下優子だった。

風太
「うん、今ね。それより優子がここにいるのはなんで?」

優子
「なんでも何も私があの場にいたからね」

ということは優子に助けられたのか。

風太
「そうか、ありがとう、優子」

俺が笑顔でお礼を言うと優子が顔を逸らした。何気に傷つく・・・

風太
「ごめん・・・こんな奴にお礼言われて・・・ハァ・・・」

優子
「ふぇ!?い、いやそんなことないわよ!むしろ良かったって思うわよ!／／／」

顔を真っ赤にして優子が否定する。可愛いなぁ・・・

優子
「そ、それより、風太君はもういいの?／／／」

優子が心配してくれる。顔を赤くして。

風太
「うん。もう大丈夫。ありがと、優子」

優子
「いいよそんな。・・・それに風太君と一緒にいれたし（ボソッ）・・・」

優子の声が最後だけ聞き取れない。なんだろ?

風太
「それにしても外暗いね」

優子
「え?あ、本当だ」

そう今外は真っ暗である。こんな中女の子を一人で帰らすのは悪いので、

風太

「優子、暗いから送るよ」

優子
「え？あ、うん・・・」

元気がない優子。大丈夫か？

風太
「んじゃ、帰ろ？」

優子
「うん！」

今度は元気になった。なんなんだ？

その後は優子と談笑しながら送って行き、家に帰って寝た。

次はＡクラス戦か・・・

続く

第九問（前書き）

やっぱり少し早めに更新したいと思います。
さらに、今のところファミ通コミククリアのバージョンも考えています。もし、更新していたら見てください！

第九問

点数補給のテストを終えた二日目の朝。

雄二
「まずは皆に礼を言いたい。周りの連中には不可能だと言われていたにも関わらずここまで来れたのは、他でもない皆の協力があってのことだ。感謝している」

雄二がお礼を言った！？明日は嵐がくるぞ！？

風太
「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏……」

明久
「ゆ、雄二、どうしたのさ。らしくないよ？」

雄二
「ああ。自分でもそう思う。だが、これは偽らざる俺の気持ちだ」

……そうだろうね。この最低クラスがここまでくるとは思わないだろうし。

雄二
「ここまで来た以上、絶対にＡクラスにも勝ちたい。勝って、生き残るには勉強すればいいってもんじゃないとい現実を、教師どもに突きつけるんだ！」

F生徒
「おおーっ！」

F生徒
「そうだーっ！」

F生徒
「勉強だけじゃねぇんだーっ！」

雄二
「皆ありがとう。そして残るAクラス戦だが、これは一騎打ちで決着をつけたいと考えている」

前の昼食を食べた時のメンバー以外はかなり驚いたらしく教室にざわめきが広がった。

明久
（風太、そのバンダナどうしたの？）

明久が聞いてきた。明久の言う通り今は迷彩柄のバンダナをしている。

風太
「（ちょっとね）」

雄二
「落ち着いてくれ。それを今から説明する」

雄二が机をバンバンと叩いて騒いでいた皆を静まらせる。

……壊れないね。よかったよかった。

雄二
「やるのは当然、俺と翔子だ」

代表だからなんだろうけど……

風太
「正直、雄二が勝てるとは……」

パシッ！ドロ……

風太
「危ないじゃん、雄二」

雄二
「……そのグローブは何だ、風太……」

雄二が聞いてきた。普通だろうね。グローブで握った瞬間カッターが溶けたから。

風太
「特製強化グローブ。高熱を纏った状態になるんだ」

雄二
「……」

明久
「熱くないの？」

風太
「全然、つーか熱かったらはめられないじゃん」

明久
「……ちなみにどんぐらいの温度？」

風太
「うーん……２０００度？」

『……』

雄二
「そんな危ねぇーもん使うな！！」

風太
「雄二がカッター投げるからじゃん」

怯えた雄二、久しぶりに見るなぁ・・・

明久
「それはどこで手に入れたの？」

風太
「禁則事項です☆」

おどけてみせた。

※Ｆクラスに新しいルール、「風太を絶対に怒らせてはならない」ができた。

雄二
「と、とりあえず、風太の言うとおり翔子は強い。まともにやりあえば勝ち目はないかもしれない」

認めるならカッターを投げないで欲しい。

雄二
「だが、それはDクラス戦もBクラス戦も同じだっただろう?まともにやりあえば俺達に勝ち目はなかった」

確かに、Dクラスの時は居なかったけど勝ち進んでいる。

雄二
「今回だって同じだ。俺は翔子に勝ち、FクラスはAクラスを手に入れる。俺達の勝ちは揺るがない」

雄二の無理なことに思える発言を否定するヤツはもうこのクラスには居ない。

雄二
「俺を信じて任せてくれ。過去に神童とまで言われた力を、今皆に見せてやる」

『おおぉーーーっ!!』

確認するまでもない。俺を含めた全員が雄二を信じている。はぁ、ダルい。寝てよう。

～片雲視点～

片雲
「ん……く……はぁ……」

俺は起きて伸びをする。

明久
「総員狙えぇっ！」

片雲
「うおっ！」

なんだなんだ!?いきなり男子のほとんどが立ち上がったぞ!?上履き持って！

雄二
「なっ!?なぜ明久の号令で皆が急に上履きを構える!?」

明久
「黙れ、男の敵！Ａクラスの前にキサマを殺す！」

雄二
「俺が一体何をしたと!?」

雄二、お前を一生忘れない。俺は敬礼する。

雄二
「それを言うなら獅子神だって姫路と幼馴染みのは知っているだろ！？」

いや、行っても無駄だぞ、雄二。

明久
「片雲はいい！」

ほらな。

明久
「遺言はそれだけか？……待つんだ須川君。靴下はまだ早い。それは押さえつけた後で口に押し込むものだ」

雄二
「そういえば、片雲はＡクラスの奴と婚約しているらしいぞ」

『なにぃぃぃぃっ！』

片雲
「何で知ってる！？雄二！」

雄二
「今知った」

片雲
「なっ！！」

こいつカマかけたな!?

瑞希
「あの、吉井君」

姫路が動いたぞ。何が起きる?

明久
「ん?なに、姫路さん」

瑞希
「吉井君は霧島さんが好みなんですか?」

明久
「そりゃ、まぁ。美人だし」

瑞希
「……」

明久
「え?なんで姫路さんは僕に向かって攻撃態勢を取るの!?それと美波、どうして君は教卓なんて危険なものを投げつけようとしているの!?」

はぁ、分かってないなぁ。

片雲
「島田。教卓はやめとけ」

美波

「でも！」

片雲
「代わりにこれを渡そう」

俺は風太から（勝手に）借りた折りたたみの槍を渡す。

美波
「気が利くわね」

明久
「片雲！何てことをするんだ！」

楽しそうだから。

秀吉
「まぁまぁ。落ち着くんじゃ皆の衆」

明久
「む。秀吉は雄二が憎くないの？」

秀吉
「冷静になって考えてみるが良い。相手はあの霧島翔子じゃぞ？男である雄二に興味があるとは思えんじゃろうが」

なに？なになになに？何の話？ってか皆姫路に視線が集中してる。

瑞希
「な、なんですか？もしかして私、何かしましたか？」

ごめん……俺には分からない。

雄二
「とにかく、俺と翔子は幼なじみで、小さな頃に間違えて嘘を教えていたんだ」

なにが？

雄二
「アイツは一度教えたことは忘れない。だから今、学年トップの座にいる」

あ～、それが仇になると。なんとなく分かる。

雄二
「俺はそれを利用してアイツに勝つ。そうしたら俺達の机は――」

『システムデスクだ！』

おもしれーことになってんな。

優子
「一騎打ち？」

雄二
「ああ。Ｆクラスは試召戦争として、Ａクラス代表に一騎打ちを申

し込む」

恒例の宣戦布告。今回は代表の雄二を筆頭に、俺、明久、姫路、秀吉に康太と首脳陣勢揃いでAクラスに来ていた。

優子
「うーん、何が狙いなの？」

交渉のテーブルについているのは秀吉の姉である木下優子だ。

雄二
「もちろん俺達Fクラスの勝利が狙いだ」

優子
「面倒な試召戦争を手軽に終わらせることができるのはありがたいけどね、だからと言ってわざわざリスクを犯す必要も無いかな」

雄二
「賢明だな」

ここまでは予想通り。交渉の本番に入る。

雄二
「ところで、Cクラスの連中との試召戦争はどうだった？」

優子
「時間は取られたけど、それだけだったよ？何の問題もなし」

CクラスはAクラスに攻め込み、半日で敗北。Cクラスは現在Dクラスと同等の設備で授業を受けている。

片雲
「はぁ……ダルい、帰るわ雄二」

雄二
「あぁ」

優子
「あ！ちょっと待って！」

片雲
「ん？どうした？木下姉」

木下姉が寄ってきて小声で聞いてきた。

優子
（風太は？）

片雲
「ああ、教室で寝てる」

優子
（そう、ありがと）

そう言って戻って行った。

さて、俺ももどるか。寝みー寝みー

～風太視点～

「ふぁ……あれ、皆？どこ行ったの？……あ～……Aクラスか」

と言ってポンッ、と手を打つ。

風太
「はぁ……誰もいないなら寝よ」

そう言ってまた寝た。

高橋
「では、両名共準備は良いですか？」

立会人はAクラス担任かつ学年主任の高橋先生が務める。

雄二
「ああ」

翔子
「……問題ない」

一騎打ち会場はAクラス。ボロいFクラスでは締まらないからな。

風太
「痛てて……」

明久
「大丈夫？」

風太
「なんとか……」

クソ……雄二め、人が寝ているところを……

高橋
「それでは一人目の方、どうぞ」

優子
「アタシから行くよっ」

向こうからは優子。対するこちらは、

秀吉
「ワシがやろう」

その弟の秀吉だ。実の姉が相手なんだ。俺の知らない苦手科目や集中力の乱し方を知っているはずだ。

優子
「ところでさ、秀吉」

秀吉
「なんじゃ？姉上」

優子
「Ｃクラスの小山さんって知ってる？」

秀吉
「はて、誰じゃ？」

あれ？なんか雲行きが……

優子
「じゃーいいや。その代わり、ちょっとこっちに来てくれる？」

秀吉
「うん？ワシを廊下に連れ出してどうするんじゃ姉上？」

そのまま優子は秀吉を連れて教室を出て行った。

秀吉
『姉上、勝負は――どうしてワシの腕を掴む？』

優子
『アンタ、Ｃクラスで何してくれたのかしら？どうしてアタシがＣクラスの人達を豚呼ばわりしていることになっているのかなぁ？』

秀吉
『はっはっは。それはじゃな、姉上の本性をワシなりに推測して――あ、姉上っ！ちがっ……！その関節はそっちには曲がらなっ……！』

秀吉……合掌……

ガラガラガラ

扉を開けて優子が戻ってくる。

優子
「秀吉は急用ができたから帰るってさっ。代わりの人を出してくれる？」

風太
「雄二ぃ～俺が行っていい？」

雄二
「ああ、殺ってこい」

やったー！さて、アイツのお手並み拝見だな。

優子
「え・・・風太？ちょっとキツイかな・・・？」

綾子
「じゃあ私が行くよ優子」

優子
「そう？じゃあよろしく」

綾子か・・・ギリだ。

風太
「お前かよ・・・優子なら簡単だったのによ」

綾子
「優子だとハンデにもならないじゃん」

風太
「もういいや、さっさとやろ」

高橋
「科目はどうしますか?」

風太
「譲るよ」

綾子
「う〜ん、どうしようかなー」

風太
「できれば物理がいい」

綾子
「じゃあ物理で」

高橋
「分かりました」

そう言ってカタカタとパソコンのキーを叩く。

綾子

「それじゃ・・・」

風太

「そろそろ・・・」

『試獣召喚（サモン）！！』

俺の召喚獣はＢクラス戦と同じヴェントゥスの格好だ。

対するアヤは黒い長いコートを着ている。心なしか？？機関のコートの様に見える。

武器は本の様だ。

遅れて点数が表示される。

物理

Ｆクラス

多重風太　２８４点

ＶＳ

Ａクラス

機関綾子　５７３点

・・・パねぇなおい・・・

『おい・・・どういうことだよ』

『アイツは４００点行くか行かないかだろ？』

『分からない。だけど、今言えることは――』

『――アイツは本気じゃないことだ』

周りが騒ぐ。

綾子
「ありゃ、てっきり良い点数かと思ったじゃん」

がっかりした、とでも言いたそうだな。

風太
「おいおい、誰が俺がやると行った？」

綾子
「え？」

呆気に取られるアヤ。フッ・・・それじゃ、

風太
「後は任せた、空海」

俺は誰かの名を呼び、替わった。

～空海視点～

空海

「初めてだな～この体♪」

綾子
「あなた誰？」

誰かが聞いてくる。え～と機関綾子？だっけ。

空海
「俺の名前は空海！この前に出来た人格だよ！」

『・・・・・』

空海
「それよりそろそろ変えるからちょっと待ってくれない？」

綾子
「いいよ♪」

お♪ノリがいいな～♪

空海
「それじゃ～フォームチェンジ！」

俺がそう言うと召喚獣は光に包まれ、服が変わる。

一言で言えば黄色。ほとんどが黄色で統一されている。ＫＢが二本に増えた。鍵と黒いものの二つだ。

綾子
「マスターフォーム？」

空海
「知らん。とにかくはじめよ？」

綾子
「だね」

その直後、二人の召喚獣は走り出し、

ガキンッ！

・・・え？ガキン？本だよね？紙だよね？

綾子
「私の能力だよ。名前は『硬化』その名の通り硬くするんだよ」

空海
「反則でしょ！」

『反則はお前だ！！』

皆に突っ込まれた。

点数は・・・

物理
Ｆクラス
空海　７１８点
ＶＳ
ＶＳ
Ａクラス

機関綾子　５７３点

お！調子がいいな～

綾子
「どうやったら取れるか・・なっ！」

言った同時に突き放す。

空海
「・・・ノリ？」

綾子
「・・・まぁ、いいや。じゃぁ、相手が悪いからこっちも替わるよ」

空海
「おお～本気出せよ～」

綾子
「言われなくてもそうするよ、ウェポンチェンジ！」

空海
「は？」

『え？』

その後、機関の髪の色が変わり、召喚獣の武器も変わった。その武器は・・・拳銃！？

？？？

「はぁ・・・あなたは何分で倒してあげようましょうか？」

風太
（時子だ。アイツは飛び道具を使う。だが、お前には好都合なことがあるからが　　んばれ！）

・・・。

相手の色は紫。ツインのとこだけ変わってる。

時子
「それでは、あなたは十五分で倒します。では！」

空海
「何！」

バンッ！バンッ！バンッ！

いきなり撃ってきやがった！一発目は避け、二発目は弾き、三発目は喰らってしまった

空海
「いきなりか・・・それならこっちも！」

俺は召喚獣を走らせ、相手を斬った。

はずだった。

目の前に相手は居なかった。

空海
「何処に!?」

時子
「此処です」

バンッ!バンッ!バンッ!バンッ!バンッ!

空海
「くっ・・・」

一旦退かせた。まさか空間を歩くとは・・・なら!

空海
「はぁぁぁぁあああ!」

雄たけびを上げながら突っ込んで行く。

時子
「ふ・・・馬鹿ですか?」

バンッ!バンッ!バンッ!

撃ってきた。だが、

空海
「かかった!」

時子

「なんですかその動き！？」

キキキンッ！

召喚獣は回転しながら二段ジャンプもとい、エアドッヂをした。飛んできた弾を弾いて。

空海
「でやっ！！」

ザシュッ！

空海
「まだまだあ！！」

ザザザザザンッッッ！！

連続で斬りつける。だが、全く減らせていない。

なぜ？

綾子
「こっちだよ！」

ドガッ！

鈍い音が鳴った。本で殴られた様だ。

空海
「何でそこに？」

綾子
「幻覚を使ったから」

幻覚・・・動きを止めたのか・・・

今の点数は、

物理
Ｆクラス
空海　４６５点
ＶＳ
Ａクラス
機関綾子　４７９点

何時の間にか抜かされている。

綾子
「もっとやるよ！」

空海
「まだまだ足りないよ！」

それからしばらくして十分・・・

綾子
「はぁはぁはぁ・・・」

空海
「はぁはぁはぁ・・・」

物理
Ｆクラス
空海　１３８点
ＶＳ
Ａクラス
機関綾子　１３９点

点数は同じくらいになっている。

空海
「これで終わりにしよう・・・」

綾子
「ええ・・・」

そしてふたりとも息を吸い、

空海・綾子
「「はぁぁぁぁぁぁあああああああ！！！！」」

一瞬空気が揺れるんじゃないかと思うぐらい叫んだ。
と同時に召喚獣を走らせる。

すれ違いざまに・・・斬る！

ザシュッ！ガゴッ！

ザッ！ザッ！

時間が止まる。

ガクリ・・・、機関の召喚獣が体制を崩した。

俺の召喚獣は・・・

ドサ・・・、倒れた。

物理
Ｆクラス
空海　０点
ＶＳ
Ａクラス
機関綾子　９点

俺は負けた。

綾子
「やったー！」

はぁ・・・

風太
（ドンマイ！空海！）

自由でいいね。

風太
（まぁな！）

まあいいや。

とにかく俺は皆もとに戻る。

空海
「ごめん・・・」

雄二
「気にするな。お前なりやったんだし、まだ最初だ」

空海
「サンキュ」

じゃぁ、戻るかな。

～風太視点～

風太
「よっしゃ！それじゃぁ次いくぞー！」

・・・シーン・・・

誰も反応しない。無視しているようだ。

風太
「って！皆酷くない！？無視するなんて！」

高橋
「では、次の方どうぞ」

風太
「先生も！？」

もう駄目だ・・・皆なんか嫌いだ・・・シクシクシク・・・

優子
「大丈夫？風太君」

この声は・・・優子か・・・

風太
「・・・どうしたの？」

優子
「いや・・・落ち込んでるから」

風太
「もういいよ・・・皆無視するなんて・・・うぅぅぅ・・・」

優子
「ほらほら泣かない泣かない。元気だして」

優子が慰める。ああ・・・天使だ・・・天使が居る・・・

風太
「ありがとう・・・優子。それじゃあ・・・」

優子
「うん」

風太
「一緒に見よ?」

・・・ボンッ!

優子が爆発した。顔真っ赤で。

風太
「いいの?見なくて」

優子
「あわあわあわ・・・／／／／／／／／／／」

駄目だなこれは。

風太
「無理ならいいから。じゃ」

そう言って俺は歩く。

優子
「え?あれ?風太君?行っちゃた・・・」

そんな優子のことは知らずに俺は皆の元に戻る。

風太
「雄二ぃ～。状況は？」

雄二
「姫路の番だ」

瑞希のとこを見ると瑞希と相手の久保利光がいた。

風太
「キツくない？」

雄二
「ああ。相手は学年次席。姫路がどこまでいけるか、だな」

雄二は心配している。勝てることを信じる必要があるな。

風太
「う～～～～～～ん・・・」

雄二
「・・・何してるんだ風太」

風太
「ん？ああ、念を送ってる」

雄二
「そんなことしてる間に決着は着いたぞ」

風太

「え？」

見ると本当に終わっている。点数は・・・

総合科目

Ａクラス
久保利光　３９９７点
ＶＳ　ＶＳ
Ｆクラス
姫路瑞希　４４０９点

Ａ生徒
「マ、マジか！？」

Ａ生徒
「いつの間にこんな実力を！？」

Ａ生徒
「この点数、霧島翔子に匹敵するぞ……！」

４００点・・・最強だね。

久保
「ぐっ……！姫路さん、どうやってそんなに強くなったんだ……？」

悔しそうな久保君。つい最近まで拮抗していた実力がここまで離されたんだもんね。

瑞希

「……私、このクラスの皆が好きなんです。人の為に一生懸命な皆のいるＦクラスが」

久保
「Ｆクラスが好き？」

瑞希
「はい。だから、頑張れるんです」

嬉しいな・・・さすが瑞希だね。

高橋
「これで二対二です」

いつもクールな高橋先生の表情にも変化が見られた。瑞希の急成長に驚いたのか、あるいは、ＦクラスがＡクラスと渡り合っていることに戸惑っているのか……その両方かも知れないね。

高橋
「最後の一人、どうぞ」

翔子
「……はい」

Ａクラスからは最強の敵、霧島翔子。

そしてウチのクラスからは当然、

雄二
「俺の出番だな」

坂本雄二。コイツしかいないだろ。

高橋
「教科はどうしますか？」

Aクラス側は静かだ。霧島が負けるわけないとか思ってるんだろう。

雄二
「教科は日本史、内容は小学生レベルで方式は百点満点の上限ありだ！」

ざわ……！

雄二の発言にAクラスがざわめき始める。

A生徒
「上限ありだって？」

A生徒
「しかも小学生レベル。満点確実じゃないか」

A生徒
「注意力と集中力の勝負になるぞ……」

こちらに勝利の可能性があることがわかったからこそAクラス連中がざわついている。

高橋
「わかりました。そうなると問題を用意しなくてはいけませんね。

少しこのまま待っていてください」

ノートパソコンを閉じた高橋先生が教室を出て行く。

それを見送り、俺と明久は雄二に近づく。

明久
「雄二、あとは任せたよ」

風太
「雄二。勝ってよな」

雄二
「ああ任された」

康太
「……（ビッ）」

雄二
「お前の力には随時助けられた。感謝している」

康太
「……（フッ）」

瑞希
「坂本君、あのこと、教えてくれてありがとうございました」

雄二
「ああ。明久のことか。気にするな。あとは頑張れよ」

瑞希「はいっ」

明久。お前は幸せ者だな。

高橋

「では、最後の勝負、日本史を行います。参加者の霧島さんと坂本君は視聴覚室に向かって下さい」

翔子

「……はい」

短く返事をした霧島が教室を出て行った。

雄二

「じゃ、行ってくるか」

瑞希

「はい。行ってらっしゃい。坂本君」

雄二

「ああ」

瑞希に送り出され、雄二が戦場に向かう。

これで決着がつくけど・・・

高橋

「皆さんはここでモニターを見ていて下さい」

高橋先生が機械を操作すると、壁のディスプレイに視聴覚室の様子が映し出された。

飯田
『では、問題を配ります。制限時間は五十分。満点は１００点です》

日本史担当の飯田先生が問題用紙を裏返しのまま二人の机に置いた。

飯田
『不正行為等は即失格になります。いいですね?』

翔子
『……はい』

雄二
『わかっているさ』

飯田
『では、始めてください』

二人の手によって問題用紙が表にされる。

いよいよだなあ。

・・・どうやったら勝てるの?

ディスプレイに問題が映し出される。

《次の（　）に正しい年号を書きなさい》

（　）年　平城京に遷都
（　）年　平安京に遷都

（　）年　鎌倉幕府設立

（　）年　大化の改新

明久
「あ……！」

風太
「え？」

瑞希
「よ、吉井君っ」

明久
うん」

瑞希
「これで私たちっ……！」

明久
「うん！これで僕らの卓袱台が」

『システムデスクに！』

揃ったＦクラス皆の言葉。
この瞬間をどれ程待ち望んでいたことか！

明久
「最下層に位置した僕らの、歴史的な勝利だ！」

『うぉぉぉっ！』

教室を揺るがすような歓喜の声。

日本史勝負
限定テスト１００点満点

Ａクラス
霧島翔子　９７点
ＶＳ
Ｆクラス
坂本雄二　５３点

Fクラスの卓袱台がみかん箱になった瞬間だった。

続く

最終問題（前書き）

亀更新になるかもしれません……すいません。

最終問題

高橋
「三対二でＡクラスの勝利です」

視聴覚室になだれこんだ俺らにに対する高橋先生の締めの台詞。

翔子
「……雄二、私の勝ち」

雄二
「……殺せ」

明久
「良い覚悟だ、殺してやる！歯を食い縛れ！」

風太
「ゆぅ～じぃ～（黒笑）」

瑞希
「吉井君、落ち着いてください！」

綾子
「風太も落ち着いて」

風太

「痛い痛い痛い！腕が！腕がー！」

明久は瑞希は後から抱きついて、俺はアヤに関節技を決められている。

明久
「だいたい、５３点ってなんだよ！０点なら名前の書き忘れとかも考えられるのに、この点数だと――」

雄二
「いかにも俺の全力だ」

風太・明久
「「この阿呆がぁーっ！」」

美波
「アキ、落ち着きなさい！風太はともかくアンタだったら３０点も取れないでしょうが！」

明久
「それについて否定はしない！」

瑞希
「それなら、坂本君を責めちゃダメですっ！」

明久
「くっ！なぜ止めるんだ姫路さんに美波！この馬鹿には喉笛を引き裂くという体罰が必要なのに！」

瑞希

「それって体罰じゃなくて処刑です！」

風太
「なら嵐士のサンドバックになってもらう」

綾子
「やめようか」

ドゴッ！

風太
「ぐはっ」

俺はアヤに殴られた。くそ痛い。

翔子
「……でも危なかった。雄二が所詮小学生の問題だと油断していなければ負けてた」

雄二
「言い訳はしねぇ」

ってことは図星だなこの野郎。

翔子
「……ところで、約束」

……いそいそとカメラの準備をしていた康太は無視しよう。

雄二

「わかっている。何でも言え」

翔子
「……それじゃ――」

霧島は瑞希に一度視線を送り、再び雄二に戻す。

そして、小さく息を吸って、

翔子
「……雄二、私と付き合って」

言い放った。

……はい？

雄二
「やっぱりな。お前、まだ諦めてなかったのか」

翔子
「……私は諦めない。ずっと、雄二のことが好き」

何この状況？

雄二

「その話は何度も断っただろ？他の男と付き合う気はないのか？」

翔子
「……私には雄二しかいない。他のひとなんて、興味ない」

なんですか？意味が分からん。

雄二
「拒否権は？」

翔子
「……ない。約束だから。今からデートに行く」

雄二
「ぐぁっ！放せ！やっぱこの約束はなかったことに――」

ぐいっ　つかつかつか

霧島は雄二の首根っこを掴み、教室を出て行った。

「……」

「……」

「……」

しばし沈黙。

なにすればいいんだ？

綾子
「風太」

風太
「ん？」

綾子
「約束」

風太
「……あ」

忘れてた。仕方ない、諦めよう。

風太
「分かりました。なにをすればいい？」

綾子
「風太は好きな人いる？／／」

風太
「……は？」

なんでいきなり？

風太
「いるけど……なんで？」

綾子

「その子に告白して／／／」

風太
「はぁ・・・はぁぁぁぁあああああ！！！！！？？？？」

な、なな、なななな何で！？

落ち着け俺、深呼吸。

風太
「スーハー、スーハー」

よしＯＫ。あれ？でも……

風太
「なんで？しかも最低でも俺はこの場に居る奴だけど……」

綾子
「だけど？」

風太
「ごめん……俺は、お前の期待には応えられない……」

綾子
「え……？うそ……」

アヤは目に涙を溜めている。でも……俺は……俺は……

風太
「俺の好きな奴はお前の良く知っている、お前の親友なんだ」

優子
「え？」

綾子
「じゃあ」

優子
「え？え！？」

風太
「そう。優子だよ」

優子
「えぇぇ！？」

俺は優子の前まで歩き、

風太
「俺は木下優子、あなたが好きです」

優子
「あうあうあう……／／／／／／」

優子は顔が真っ赤だ。

風太
「返事は？」

優子

「いい…です…／／／／／／」

風太
「本当に？」

優子
「うん……／／／／／／／」

さらに赤くなった。でもそんなことより……

風太
「やったー！」

優子
「ふぇ！？／／／／／／／」

俺は無意識に抱きついた。

優子
「え？えっ！？え、え、えええ！！？」

俺と優子がしばらくそのままでいると、

明久
「あの～」

ん？

風太・優子
「「あ……」」

やっちゃった。Ａクラスとｆクラスのほとんどがいる……

「……」

「……」

「……」

やばい、視線が痛い。あ～あ、瑞希と美波は顔真っ赤で片雲はムカつくぐらいにこにこしてる。あとで殺す。

これをどうしようかと思っていると……

西村
「さて、Fクラスの皆。お遊びの時間は終わりだ」

救世主が来た！

風太
「先生、ありがとうございます。あなたは僕の救世主です」

西村
「……何を言ってるのかさっぱりわからん」

これで話が逸れるはずだ。

明久
「あれ？西村先生。僕らに何か用ですか？」

西村
「ああ。今から我がFクラスの補習についての説明をしようと思ってな」

……我がFクラス？

西村
「おめでとう。お前らは戦争に負けたおかげで、福原先生から俺に担任が変わるそうだ。これから一年、死に物狂いで勉強できるぞ」

なっ！？

『なにぃっ!?』

俺を含めたFクラス全員の絶叫が響き渡った。

西村先生が担任!?ふざけるなっ!これからは鉄人と呼ぶ!

鉄人

「いいか。確かにお前らはよくやった。Fクラスがここまでくるとは正直思わなかった。でもな、いくら『学力が全てではない』と言っても、人生を渡っていく上では強力な武器の一つなんだ。全てではないからといって、ないがしろにしていいものじゃない」

くそっ、妙に正論っぽいこと言って!

鉄人

「吉井と坂本は特に念入りに監視せてやる。なにせ、開校以来初の《観察処分者》とA級戦犯どもだからな」

明久

「そうはいきませんよ!なんとしても監視の目をかいくぐって、今まで通りの楽しい学園生活を過ごしてみせます!」

風太

「良く言ったよ明久!西村先生、俺はこれからあなたを鉄人と呼ぶ!」

鉄人

「……お前らには悔い改めるという発想はないのか」

は？なにそれ、食えんの？

鉄人
「とりあえず明日から授業とは別に補習の時間を二時間設けてやろう」

風太
「ちょっとまったあ！それだけは駄目だよ！優子と一緒にいられないじゃないか！」

鉄人
「……そんなことは知らん」

おのれこの悪魔め！

優子
「風太……／／／／／」

明久
「風太、何か木下さんと付き合うって決まった時から妙にオープンになったのは気のせいかな？」

片雲
「我慢してた分居たいんだろうな」

何か優子が赤くなったり、明久と片雲が呆れた顔をしているが、気にしない。

美波
「さぁ～て、アキ。補習は明日からみたいだし、今日は約束通りクレープでも食べに行きましょうか？」

美波が明久に歩み寄ってそう言った。

そんな約束をしてたんだ明久。

明久
「え？美波、それは週末って話じゃ……」

瑞希
「だ、ダメです！吉井君は私と映画を観に行くんです！」

明久
「ええっ！？姫路さん、それは話題にすら上がってないよ！？」

良かったね明久。モテモテじゃないか。

明久
「に、西村先生！明日からと言わず、補習は今日からやりましょう！思い立ったが仏滅です！」

鉄人
「『吉日』だ、バカ」

明久
「そんなことどうでもいいですから！」

鉄人
「うーん、お前にやる気が出たのは嬉しいが――」

言葉を区切って、明久と美波と瑞希を見る鉄人。

鉄人
「無理することはない。今日だけは存分に遊ぶといい」

ニヤニヤと嫌味な笑顔で言い放った。

明久
「おのれ鉄人！僕が苦境にいると知った上での狼藉だな！こうなったら卒業式には伝説の木の下で釘バットを持って貴様を待つ！」

風太
「明久！その時は俺も自前の武器で応援しよう！」

鉄人
「斬新な告白と応援だな、オイ」

美波
「アキ！こんな時だけやる気を見せて逃げようったって、そうはいかないからね！」

明久
「ち、違うよ！本当にやる気が出ているんだってば！」

瑞希
「吉井君！その前に私と映画ですっ！」

明久
「姫路さん、それは雄二じゃなくて僕となの！？」

瑞希
「？？　坂本君？なんのことですか？私はずっと前から吉井君のことを――」

美波
「アキ！いいから来なさい！」

明久
「あがぁっ！美波、首は致命傷になるから優しく――」

じゃあね明久、君のことは忘れない。

風太
「それじゃ、俺達も行こうか。優子」

優子
「え？」

風太
「俺達は補習が入った。つまり時間がない。だから今のうちに遊ぼう！」

優子
「それってデートのお誘い？」

風太
「そのつもりだけど？」

優子
「ふふ。喜んで♪」

こうして幕を閉じた試召戦争。目標は達成できなかったんだけど、俺は優子と気持ちが通じ合うことが出来たからそれで良しとしよう。

とりあえずデートが終わったあとで俺がすることは、どうやって補習中に鉄人の目を盗んで抜け出すか、だな。

続く

最終問題（後書き）

告白のとこグダグダですね。やっぱり最初っから気づいてはいたけどはっきり言います。これは駄文です！この小説をよんでくださる皆様本当にありがとうございます……

番外　「明久と暴徒とラブレター」

小説本文

風太
「ふぁ……あふ……」

結構大きなあくびが出る。昨日は寝てればよかった。

今日もいつもどおりに登校して、いつもどおりに教室に入る。
そしていつもと同じ時間に鉄人が来て出席を取り始める。

西村
「工藤」

「はい」

西村
「久保」

「はい」

そう言えば明久は……いるんだ。つまらいの。

西村
「近藤」

「はい」

西村
「斉藤」

「はい」

淡々とすすむ毎朝の恒例行事。

さて、今日も平穏な一日が――

西村
「坂本」

雄二
「……明久がラブレターを貰ったようだ」

『殺せぇぇっ！！』

……すごーい……

明久
「ゆ、雄二！いきなりなんてことを言いだすのさ！」

明らかに小声だったのにもかかわらずクラスの男子全員が反応した。
やっぱりどこかおかしいと思う。このクラス。

『どういうことだ！？吉井がそんな物を貰うなんて！』

『それなら俺たちだって貰っていてもおかしくないはずだ！自分の

席の近くを探してみろ！』

『ダメだ！腐りかけのパンと食いかけのパンしか出てこない！』

『もっとよく探せ！』

『……出てきたっ！未開封のパンだ！』

『お前は何を探しているんだ！？』

ホントに何を探してるんだろ。

西村
「お前らっ！静かにしろ！」

――シン

と、ここで鉄人の一喝。

これだけで、静寂が訪れる。

西村
「それでは出欠確認を続けるぞ」

出席簿が捲られる。

西村
「手塚」

「吉井コロス」

西村
「藤堂」

「吉井コロス」

西村
「戸沢」

「吉井コロス」

明久
「皆落ち着くんだ！何故だか返事が『吉井コロス』に変わってるよ！」

西村
「吉井、静かにしろ！」

明久
「先生、ここで注意するべき相手は僕じゃないでしょう！？このままだとクラスの皆は僕に殴る蹴るの暴行を加えてしまいますよ！」

西村
「新田」

「吉井コロス」

西村

「布田」

「吉井マジ殺す」

西村
「根岸」

「吉井ブチ殺す」

まさかの無視。明久は終わったね。人生が。

なら俺も♪

西村
「風太」

風太
「はい。片雲には婚約者がいます☆」

『なんだとぉぉおおお!!』

西村
「静かにしろ!!」

また一喝。

片雲が睨んでる。でもそんなのは知らないよ☆

……そういえば前にもこんな話しなかったっけ?いや、した。やっぱりこのクラスはバカばっかりだ。

西村
「よし。欠席はなしだな。今日も一日勉学に励むように」

教室を後にしようとする鉄人。ねぇねぇ、あなたにはこの殺気が感じられないのかな?

明久
「待って先生!行かないで!可愛い生徒を見殺しにしないで!」

保身の為に、明久は必死に鉄人を呼び止める。

西村
「吉井、間違えるな」

鉄人が扉に手をかけたまま告げる。間違い?何が?

西村
「お前は不細工だ」

あんたは最低だ。

明久
「不細工とまで言われるとは思わなかったよバカ!」

でも、否定はしない俺。

西村
「授業は真面目に受けるように」

明久
「先生待って！せんせーい！」

明久の叫びも空しく、鉄人は教室から出ていった。

これでもうクラスに満ちる殺意に歯止めをかけるものはない。一時間目担当の先生が来る前には確実に暴動が起こるだろう。……楽しみだなぁ……

美波
「アキ、ちょ～っと話を聞かせてもらえる？」

片雲
「風太。どういうつもりだ？」

美波は明久に、俺には片雲が来た。

風太
「どういうつもり？」

そんなこと、決まってるじゃないか。

風太
「たのし――ごはっ！？」

殴られた。話してる途中で殴られた。ちゃんと聞こうよ。ホントに。

その後の数十秒は殴られ続けた。

雄二

「皆、ちょっと落ち着け」

不意に雄二が手を叩く。皆の注意が雄二に向いてる。

雄二

「今問題なのは明久の手紙を見ることと、片雲の彼女のことじゃない……問題は、二人をどうグロテスクに殺すかだ」

片雲

「ふざけんなっ！？」

明久

「前提条件が間違ってんだよ畜生！」

明久と片雲はそれぞれの荷物を持って、教室からダッシュで逃走。

F生徒

『逃がすなぁっ！！追撃隊を組織しろ！』

F生徒

『手紙を奪え！ヤツらを殺せ！』

F生徒

『サーチ&ａｍｐ；デス！』

明久

『そこはせめてデストロイで！』

片雲

『いやそれでもだめだろ！？』

うん。俺もダメだと思う。
それにしてもこの編成の早さはなんなんだろうか。

『『『ぎゃぁぁぁっ！！！』』』

学校全体に響き渡るのかと錯覚してしまいそうな叫び声が聞こえてきた。

風太
「さて、さっきの叫びから察するに明久達は逃げ切れたね」

そんな声が聞こえても俺は動じずに分析する。

雄二
「なんだ、まだくたばってなかったのか」

俺と雄二で状況を確認する。

今は明久達が空き教室でB、C、F、G部隊を得意の悪知恵で撃退し、古本保管部屋に向かったようだった。

風太

「それじゃあDとE部隊が向かって。死角を潰しながら探して！」

『了解！』

雄二
「あとムッツリーニも向かってくれ。ただし、外でな。武器の所持を許可する」

康太
「……了解」

康太が立ち上がり、筆箱を持って向かっていく。

風太
「ではでは雄二。俺も行くよ？」

雄二
「そうか。だったら場所は分かるな？」

風太
「もちろん♪」

俺は雄二に許可をもらい、教室を出る。

俺はどうやって殺ろうかな？

風太
「やあ」

片雲
「……」

校庭の片隅で片雲と会う。もちろん、俺が待ち伏せしてだよ？

風太
「それじゃあ「さらばだっ！」いや、ちょっと待って！？」

片雲が逃げる。ものすごい速さで。さらには足元に火花が散ってるようにも見える。

と、そんなことを考えているともう点に見えるぐらいまで離れていた。

う～ん。やっぱり人外に近い人間って異常だね。

風太
「そんなことをされると――」

俺は……もう、ウズウズしてきた……

風太
「――追いかけたくなるよ！」

これは……止められない！

俺は片雲を追いかけた。

ここで気づいたけど俺も人外というよりは怪物に近いらしい。

〜???視点〜

(どこ行っちゃったのかな?片ちゃんは。私が行ってもいないなんて。ひどいなぁ、もう。帰ったら絶対に怒ってボロボロにしてあげるんだから!)

そんな風に思いながら私はAクラスに戻る。……これでも頭はいいんだよ?

私は傍から見たら外国人みたいな外見をしている。
金髪碧眼のツルぺったんなお団子少女だよ☆
名前は『椿(ツバキ)　神楽(カグラ)』名前は日本人みたいでしょ?

神楽
「とりあえず、ここで待ってみるかな」

もしかしたら通るかもしれないし。

〜片雲視点〜

片雲
「うわァァァァあああああああ！！！！！！！」

ひゅン、ひゅン、ひゅン！
ザン、ザン、ザン！

何かが飛ぶ音と切り裂かれる音が響く。

なんなんだよあれ！もう人じゃないだろ！俺もそうだけど！

風太は風太で真剣持ってるし！？

風太
「天斬流奥義風之式（テンザンリュウオウギカゼノシキ）――切り裂く風！」

ヒュウイン！
ブォォォオオオオ！！！！！

片雲
「のうわっ！？」

俺は風太が放っただろう風に吹き飛ばされ、

片雲
「！！」

着地したところで竜巻が起こり始めた。

それを俺は咄嗟に前転してよける。

風太
「まだまだ……天斬流派生義（テンザンリュウハセイギ）――束縛する風！」

ヒュウイン！
ゴォォォォオオオ！！！！

片雲
「んな！？動けない！？」

さきほど斬り付けた竜巻の攻撃はダミーのようだ。
現に斬り傷から突風が吹き出て俺の動きを封じている。

風太
「ラスト……天斬流最終派生奥義（テンザンリュウサイシュウハセイオウギ）――風斬り！」

ヒュイン！
スッ……ズバババババ！！

片雲
「がぁぁぁぁぁあああああ！！！！」

何かが通り抜けたと思ったら次に鎌鼬が俺を包み、俺の体を切り刻む。

なんとか死なずに済んだものの、俺はその場に倒れ込む。

～風太視点～

風太
「大丈夫かな？」

俺はツンツン、と片雲のことを突っつく。

実は斬った、というよりは通り過ぎるに近くて、その際に神経に攻撃して斬られたという感覚を与えているので、それがしばらく続くと流石に失神してしまう。

とりあえず最後に技を発動しとくことにした。

風太
「天斬流奥義風之式――守る風」

ズバッズバッズバッズバッ！！
ヒュゥゥゥゥウウウウ！！！！

片雲の周りの床に四角に斬り付けたところから風が出る。これでクラスのみんなに殺されることはないかな。

風太
「それでは次は明久のところに――その前に神楽呼ぶかな」

俺は携帯を取り出し、電話をかける。

数回のコール音のあと、でた。

神楽
『もしもし？』

風太
「もしもし神楽、廊下に片雲いるからじゃね」

神楽
『え？ちょっと待っ――』

ブツン、と俺は電話を切った。

風太
「さて、向かうかな」

俺はおそらく明久がいるであろう屋上に向かう。

～神楽視点～

私は今走っている。なぜなら風ちゃんに片ちゃんが廊下にいるという情報をもらったからである。

……なんだろう……この喋り方……？

それにしても……

神楽
「どこにいるんだろう？」

肝心の場所を聞いてないよ～（T▽T）

とにかく私は走って探しに行く。

～風太視点～

風太
「あれ？みんなどこに行くの？」

俺が階段に着くとFクラスのほとんどが集まって登ろうとしていた。

美波
「風太！？ほら、そんなところに立ってないで早く行くわよ！」

ガシッ、と俺の後ろの襟のところを掴み引っ張って行く。

風太
「わ～～～（棒読み）」

俺はだいたい予想できたので抵抗しなかった。

屋上に出ると雄二と瑞希と、首が１８０。回転した明久がいた。

美波
「ア～キ～～～！アンタよくもやってくれたわね～～～！」

『吉井っ！絶対殺すぅぅっ！』

『ガンホー！ガンホー！』

屋上に出て思ったこと。

明久、生きて帰って来て。

～その夜～

片雲宅

片雲
「……ごめん」

神楽
「これからは気を付けてよね☆」

片雲
「……ハイ」

俺は昔の拷問を受けていた。

……正直くそ痛かった。

続く

番外　「明久と暴徒とラブレター」（後書き）

え～まずは番外専用設定から。
風太は真剣を常備しています。なぜ、本編では使わないかと言いますと、単純に事態がややこしくなるから使っていません。さらに、本編からわかるとおり、風太は体のあちこちに武器を隠し持っています。

次に片雲ですが、こいつは本編の途中で全てが明かされます。
さらに綾子ですが、メインのはずなんですが出番が少ないですね…
…まぁ、こいつはある番外で増やそうと思います。

最後に神楽ですが、路線変更でほとんどの出番を番外にしたいと思います。

この駄文作者の私ですが、これからも応援していただけると嬉しいです。

第一問

プロローグ

翔子
「……雄二」

雄二
「なんだ？」

翔子
「……『如月ハイランド』って知ってる？」

雄二
「ああ。今建設中の巨大テーマパークだろ？もうすぐプレオープンっていう話の」

翔子
「……とても怖い幽霊屋敷があるらしい」

雄二
「廃病院を改造したっていうアレか？面白そうだよな」

翔子
「……日本一の観覧車とか」

雄二

「おお、相当デカいみたいだな。聞いた話だけでも凄そうだ」

優子
「……世界で三番目に速いジェットコースターも」

雄二
「速い上に色々な方向を向いたり、ぐるぐる回るってヤツか。どんなモンなのかわからんが、考えるだけでワクワクしてくるな」

翔子
「……他にも面白いものが沢山ある」

雄二
「それは凄いな。きっと楽しいぞ」

翔子
「……それで、今度そこがオープンしたら、私と」

雄二
「ああ、お前の言いたいことはよくわかった。そこまで行きたいなら――」

翔子
「……うん」

雄二
「――今度友達と行ってこいよ」

翔子
「……握力には自信がある」

雄二
「ぐあぁぁっ！アイアンクローはよせっ！」

翔子
「……私と雄二、二人で一緒に行く」

雄二
「オープン直後は混み合ってるから嫌ぐぎゃぁっ！」

翔子
「……それなら、プレオープンのチケットがあったら行ってくれる？」

雄二
「プ、プレオープンチケット？ケホッ、あれは相当入手が困難らしいぞ？」

翔子
「……行ってくれる？」

雄二
「んー、そうだなー、手に入ったらなー」

翔子
「……本当？」

雄二
「あーあー。本当本当」

翔子
「……それなら、約束。もし破ったら――」

雄二
「大丈夫だっての。この俺が約束を破るようなヤツに見えるか？」

翔子
「――この婚姻届けに判を押してもらう」

雄二
「命に代えても約束を守ろう」

一方風太は……

風太
「やばい、遅刻遅刻」

走っている。遅刻しそうだからだ。

風太
「でもまだ間に合うかな」

この時はあんなことになるとは思ってなかった。

桜色の花びらが坂道から徐々に姿を消し、代わりに新緑が芽吹き始めたこの季節。

俺の通う文月学園では、新学年最初の行事である『清涼祭』の準備が始まった。

お化け屋敷の為に教室の改造を始めるクラス。焼そばの為に調理器具を手配するクラス。『試験召喚システム』について提示を行うクラス。学園祭準備の為のＬＨＲの時間は、どの教室を見ても活気が溢れている。

そして、我らがＦクラスはというと――

須川
「吉井！こいっ！」

明久
「勝負だ、須川君！」

須川
「お前の球なんか、場外まで飛ばしてやる！」

明久
「言ったな！？こうなれば意地でも打たせるもんか！」

準備もせずに、校庭で野球をして遊んでいた。

風太
「バカだなぁ……」

俺は教室で清涼際の出し物について話合いをしていた。

秀吉
「……何をやっとるんじゃあやつらは」

風太
「ほっといたら？そろそろ鉄人来るよ？」

秀吉が呆れてる。だけど鉄人が来るのも事実だ。

鉄人
「貴様ら、学園祭の準備をサボって何をしているか！」

風太
「ほらね？」

秀吉
「……」

数分後、身体中に痣や打撲を作った人間を鉄人が次々に教室内に放り込んで来るのを見ていた。

雄二
「さて。そろそろ春の学園祭、『清涼祭』の出し物を決めなくちゃいけない時期が来たんだが――」

今の雄二からは、全然やる気を感じない。

雄二
「とりあえず、議事進行並びに実行委員として誰かを任命する。そいつに全権を委ねるので、後は任せた。ふぁ……」

本当、心の底からどうでもよさそうだ。そのあとあくびしてるし。

秀吉
「やはり雄二は興味ないことはとことん無関心じゃのう」

風太
「だろうなぁ。雄二のことだから自分は寝てよう、って考えかな」

秀吉
「あの様子を見てると何も言えんのう……」

風太
「ははは……。そういえば秀吉は？なにかある？」

秀吉
「やはり、演劇部の舞台発表かのう」

秀吉らしい。

秀吉
「お主はどうなんじゃ？やはり姉上と周るのかの？」

風太
「そうだね。あぁ……でも、優子は召喚大会出るしなぁ……」

秀吉
「そう言えばそうじゃったの」

雄二
「んじゃ、学園祭実行委員は島田ということでいいか？」

不意に雄二の台詞が耳に飛び込んできた。

美波
「え？ウチがやるの？う～ん……、ウチは召喚大会に出るから、ちょっと困るかな」

明久
「雄二。実行委員なら、美波よりも姫路さんの方が適任なんじゃないの？」

瑞希
「え？私ですか？」

雄二
「姫路には無理だな。多分全員の意見を丁寧に聞いているうちにタイムアップになる」

確かに、瑞希は少数意見をバッサリ切り捨てることはできないだろ

うね。

美波
「それにね、アキ。瑞希も召喚大会に出るのよ」

明久
「え？そうなの？」

瑞希
「はい。美波ちゃんと組んで出場するつもりなんです」

小さな手をぎゅっと握りしめる瑞希。

明久
「学校の宣伝みたいな行事なのに。二人とも物好きだなぁ」

召喚大会とは清涼祭の期間中に催される企画のことだ。試験召喚システムを宣伝することとかが目的だろう。

美波
「ウチは瑞希に誘われてなんだけどね。瑞希ってば、お父さんを見返したいって言って聞かないんだから」

明久
「お父さんを見返す？」

美波
「うん。家で色々言われたんだって。『Ｆクラスのことをバカにされたんです！許せません』って怒ってるの」

明久
「あらら。姫路さんが怒るなんて珍しいね」

確かに……頬を膨らませてプンプン言ってる姿しか想像できない。

瑞希
「だって、皆のことを何もわかっていないくせに、Fクラスっていう理由だけでバカにするんですよ？許せませんっ」

……ごめん。いくら俺でもそれは違うと言えると思う。

美波
「だからFクラスのウチと組んで召喚大会で優勝してお父さんの鼻をあかそうってワケ」

明久
「でもさ、だったら美波より風太と組んだ方が優勝しやすいんじゃないかな？」

美波
「あ、それもそうよね？」

う～ん……

風太
「ごめん、そういうの興味無くてさ」

明久
「あ、そうなんだ」

雄二
「四人とも、こっちの話を続けていいか？」

明久
「あ、ゴメン雄二。美波が実行委員になる話だったよね？」

美波
「だからウチは召喚大会に出るって言ってるのに」

雄二
「なら、サポートとして副実行委員を選出しよう。それならいいだろ？」

美波
「ん～……。そうね、その副実行委員次第でやってもいいけど……」

雄二
「そうか。では、まず皆に副実行委員の候補を挙げてもらう。その中から島田が二人を選んで決選投票をしたらいいだろう」

教室内からちらほらと推薦の声が聞こえてきた。

F生徒
「吉井が適任だと思う」

F生徒
「やはり坂本がやるべきじゃないか？」

F生徒
「ここは風太に任せようぜ」

F生徒
「姫路さんと結婚したい」

F生徒
「ここは須川にやってもらった方が」

よーし、瑞希にラブコール送ってる奴、いますぐ表に出ろ。蜂の巣か、串刺しか、こんがり焼くのどれかにしてやる。

秀吉
「ワシは明久が適任じゃと思うがの」

風太
「それがいいんじゃない？年中頭に祭しかない奴がやったほうがいいよ」

明久
「風太、それ明らかにバカにしてるよね？それに僕もそういう面倒な役は、できればパスしたいな～なんて」

秀吉
「それは他の皆とて同意見じゃ。ならば適任の者にやってもらった方が良いじゃろう？」

明久
「むぅ……。それはそうだけど……」

風太
「ならさぁ美波、今挙がった候補の中から二人選ぶのは？」

雄二
「そうだな。なら島田、それで頼む」

美波
「そうね～。それじゃ……」

美波は少し考えた後にボロ黒板に候補を書いた。

『候補？……吉井』

お、明久だ。

『候補？……明久』

これも明久だ。

雄二
「さて。この二人のどちらが良いか、選んでくれ」

明久
「ねぇ雄二。明らかに美波の候補の挙げ方はおかしいと思わない？」

F生徒
「どうする？どっちが良いと思う？」

F生徒
「そうだなぁ……。どちらもクズには変わりないんだが……」

風太

「でも結局動物以下だしなぁ……」

明久
「こらぁっ！真面目に悩んでるフリをするんじゃない！あと、平然とクラスメイトをクズ呼ばわりするなんて、君らは人間のクズだ！それに風太、みんなに交じって悪口を言わない！」

あ、バレた。

美波
「ほらほら、アキってば。そんなことより、ウチとアンタでやることに決まったんだから前に出て議事をやらないと」

明久
「なんか僕はいつもこんな貧乏くじを引かされてる気がするよ……」

うん。そう仕向けてるから」

明久
「酷いよ！風太！」

風太
「読心術！？」

秀吉
「思いっきり声に出てたぞい」

風太
「え、そうなの？ごめんごめん、事実だからさ」

明久
「はぁ……」

雄二
「早く行け。んじゃ、あとは任せたぞ。ふあ～……」

ホントにやらない気か。

美波
「ウチは議事進行をやるから、アキは板書をお願いね」

明久
「ん。了解」

美波
「それじゃ、ちゃっちゃと決めるわよ。クラスの出し物でやりたいものがあれば挙手してもらえる？」

美波が言うと数名の手が上がった。その中に俺も含まれてる。

美波
「はい、土屋」

康太
「……（スクッ）」

美波が指名すると、ムッツリーニこと土屋康太が立ち上がった。

康太
「……写真館」

美波
「……土屋の言う写真館って、かなり危険な予感がするんだけど」

確かに。

美波
「アキ、一応意見だから黒板に書いてもらえる？」

明久
「あいよー」

【候補？　写真館『秘密の覗き部屋』】

康太ならありえるけど……

美波
「次。はい、風太」

美波に呼ばれたから俺は立つ。

風太
「俺は武器屋だよ」

美波
「却下」

風太
「何故に！？」

即答って何！？

美波
「……不良が来たらどうするの？」

フッ…愚問だよ。

風太
「大丈夫だよ。嘘発見機置いとくから」

美波
「……却下」

風太
「……（シクシクシク）」

酷いや……結局か……

美波
「はい次、横溝」

もういいや、寝よう……

俺はそのまま寝た。

後に聞いた話だけど、Ｆクラスは中華喫茶になったみたい。

続く

第二話（前書き）

※今回から人格が替わった時に視点変更はしません。

第二話

美波
「アキ、風太、ちょっといい？」

帰りのＨＲが終わったので今は放課後。優子と帰ろうと思って暇つぶし用の本を取り出したところで美波に呼ばれた。

風太
「どったの？」

明久
「何か用？」

美波
「用って言うか、相談なんだけど」

とにかく真剣な話の様なので本を机という名のダンボール箱の上に置く。

明久
「相談？僕らで良ければ聞かせてもらうけど」

明久の言葉に俺も頷く。

美波
「うん。ありがと。多分、アキ達に言うのが一番だと思うんだけど

――その、やっぱり坂本をなんとか学園祭に引っ張り出せないかな？」

確かに雄二なら纏められるけど……

明久
「う～ん、それは難しいなぁ……」

風太
「だね。雄二は興味がないことには全く行動を起こさないから」

さっき決まった出し物も知らないだろうからね。てか俺も知らないや。

美波
「でも、アキが頼めばきっと動いてくれるよね？」

美波は期待の眼差しで明久を見る。

明久
「え？別に僕が頼んだからって、アイツの返事は変わらないと思うけど」

美波
「ううん、そんなことない。きっとアキの頼みなら引き受けてくれるはず。だって――」

明久
「そりゃ確かに、よくつるんではいるけど、だからと言って別に」

美波
「だってアンタ達、愛し合っているんでしょう？」

明久
「もう僕お婿にいけないっ！」

美波、いくら明久でもそれは無い。……はず……。

風太
「否定しずらいなぁ……」

明久
「してよっ！」

キツイって。

明久
「誰が雄二なんかと！だったら僕は、断然秀吉の方がいいよ！」

秀吉
「……あ、明久？」

片雲
「……アキ、お前はそういう趣味があったのか……」

偶然その場にいた秀吉と片雲の動きが止まった。

秀吉
「そ、その、お主の気持ちは嬉しいが、そんなこと言われても、ワシらには色々と障害があると思うのじゃ。その、ホラ。歳の差とか

……」

明久
「ひ、秀吉！違うんだ！もの凄い誤解だよ！さっきのは言葉のアヤで！」

片雲
「ヨッシー。その障害は決して歳の差じゃないぞ」

秀吉、君は顔を赤らめながら俯くと男じゃないよ。あと片雲、そのあだ名どうかと思うよ？

風太
「珍しいね。片雲が俺意外の人仲良くなるなんてな」

片雲
「以外に仲良くなったからな」

美波
「それじゃ、坂本は動いてくれないってこと？」

明久
「え？あ、うん」

風太
「まぁ、そういうことだね」

今動かないだろうし。

美波

「なんとかできないの？このままじゃ喫茶店が失敗に終わるような……」

風太
「美波はそこまで設備に不満があったの？」

美波
「え？……いや、それは……」

今日は妙に歯切れが悪いなぁ。

風太
「何か他にあるんでしょ？美波」

美波
「……分かったわ。本人には言わないで欲しいって言われたけど……」

風太
「まさかとは思うけど……瑞希のこと？」

美波
「！！……うん……」

驚きを隠せないけれど頷く美波。

美波
「あの子、転校するかもしれないの」

明久

「ほぇ？」

風太
「あぁ……そこまで酷いんだ」

これは予想通り、というわけには行かないようだね。

ふと明久を見ると、マヌケな顔でボケーっとしていた。

秀吉
「む。マズい。明久が処理落ちしかけとるぞ」

風太
「ほぅ…ならば、フンッ」

ドゴッ！！バキッ！

明久
「がっ！」

明久の腹を殴ってみた。

風太
「片雲、お前が決めろ」

片雲
「いいぜ♪…オラッ！」

ドゴッ！

明久
「がはっ！」

片雲が明久を殴った。

風太
「明久～大丈夫？」

明久
「う～ん……僕は何をしてたの？」

明久
「美波！姫路さんが転校って、どういうことさ！」

美波
「どうもこうも、そのままの意味。このままだと瑞希は転校しちゃうかもしれないの」

風太
「まだ決まってないんだね」

転校は決まったら変えられないからね。

秀吉
「島田よ。その姫路の転校と、さっきの話が全然つながらんのじゃが」

秀吉が小首を傾げる。

美波
「そうでもないのよ。瑞希の転校の理由が『Ｆクラスの環境』なんだから」

片雲
「ってことは、設備が悪いだけか」

納得はできるね。

美波
「それに瑞希は、身体も弱いから……」

明久
「そうだね。それが一番マズいよね……」

そういえば苦しそうに咳をしてるのを何回か見た気がする。

秀吉
「なるほどのう。じゃから喫茶店を成功させ、設備を向上させたいのじゃな」

美波
「うん。瑞希も抵抗して『召喚大会で優勝して両親にＦクラスを見直してもらおう』とか考えてるみたいなんだけど」

風太
「霧幻なら分かるかな」

そう言って俺は眼鏡をかけた。

霧幻
「話は大体聞いてました。おそらく、理由は三つあります。だけど雄二君が来てからにしましょう」

明久
「そうだね！よし、そうと決まれば雄二に連絡を取らないとね」

明久は携帯を取り出し、電話をかける。

明久
「あ、雄二。ちょっと話が――え？雄二。今何してるの？――雄二！？もしもし！もしもーし！」

雄二君、まさかとは思いますが……

美波
「坂本はなんて言ってた？」

明久
「えっと、『見つかっちまった』とか『鞄を頼む』とか言ってた」

美波
「……なにそれ？」

秀吉
「大方、霧島翔子から逃げ回っているのじゃろう。アレはああ見え

て異性には滅法弱いからの」

美波
「そうすると、坂本と連絡を取るのは難しいわね」

霧幻
「いいえ、これは逆にチャンスです」

美波
「え？どういうこと？」

霧幻
「簡単に言うと雄二君を説得するには丁度いいということです」

明久
「だから、ちょっと三人とも協力してくれるかな？」

美波
「それはいいけど……坂本の居場所はわかってるの？」

霧幻
「当然です」

秀吉
「何か考えがあるようじゃな」

霧幻・明久
「「まぁね」」

ニヤリと笑って、僕と明久は三人を連れて教室を出た。

霧幻
「そういえば僕もですか？」

明久
「うん」

霧幻
「……」

ダッ！↑僕が走る。
ガッ！↑明久君が足をかける。
ガシャンッ！↑首輪を付けられる。

霧幻
「やめてください！僕はまだ死にたくない！」

明久
「……君に何があったの？」

明久
「やぁ雄二、奇遇だね」

霧幻
「……グス…えぐっ…」

部屋の物陰で大きな身体を小さくしている雄二に話しかける。

雄二
「……どういう偶然があれば女子更衣室で鉢合わせするか教えてくれ、霧幻が泣いている理由も込みでな」

雄二君の考えは大体分かります。
彼が素直に女子禁制の場所には行かないはずです。むしろ男子禁制の場所に隠れる可能性で行ってみました。

……ちなみに僕は雄二君のいるところとは逆の場所にいます。体育座りで。

明久
「やだな。ただの偶然だよ」

雄二
「嘘をつけ。こんな場所で偶然会うワケが」

ガチャッ

音を立ててドアが開くと、そこにいたのは体操服姿の女子でした。

優子
「えーっと……あれ？風太にFクラスの問題児コンビ？ここ、女子更衣室だよね？」

霧幻
「えっ……優子さん……？……さらばっ！」

ガラッ！↑窓を開ける。
グイッ！↑首輪に付いてる鎖を引っ張られる。
ゴンッ！↑倒れて頭を打つ。

霧幻
「……（ガクッ）」

ヤバイかも……

明久
「やぁ木下優子さん。奇遇だね」

あぁ、意識が……

雄二
「秀吉の姉さんか。奇遇だな」

優子
「あ、うん。奇遇だね」

そして何事も無かったかのように会話を始める三人。

優子
「先生！覗きです！変態です！」

あぁそうか……僕は死ぬんだ……

雄二
「逃げるぞ明久！」

明久
「了解っ！」

そしてそこで僕の意識は切れました。

そのあとは、僕が一向に目を覚まさないので片雲におぶって帰らされました。

続く

第三問

美波
「いつもはただのバカに見えるけど、坂本の統率力は凄いわね」

明久
「ホント、いつもはただのバカなのにね」

風太
「君はそれが言える立場なのかい？」

清涼祭初日の朝

俺達の教室はいつもの小汚い様子を一新し、中華風の喫茶店に姿を変えていた。

風太
「テーブルもいいね。……クロスを捲らなければの話だけど」

明久
「確かに、パッと見は本物と区別がつかないよ」

教室に設置されているテーブル。実は俺たちが最近使っているみかん箱をうまく重ねて、綺麗なクロスをかけている。見た目は綺麗なテーブルの完成だ。

瑞希

「あ、それは木下君が作ってくれたんですよ。どこからか綺麗なクロスを持ってきてこう手際よくテキパキと」

瑞希が秀吉に尊敬の眼差しを送る。

秀吉
「ま、見かけはそれなりのものになったがの。その分、クロスを捲るとこの通りじゃ」

秀吉がクロスを捲ると、そこには見慣れた汚い箱が姿を現す。

美波
「これを見られたら店の評判はガタ落ちね」

美波の言うとおり、こんな汚いみかん箱なんか見たら客がいなくなるなぁ……。ハァ…。

風太
「でも大丈夫でしょ。ここまで見たら営業妨害としか言えないし。というよりしてたら誰であろうと絞めるけど」

美波
「……さらっと酷いことを言うわね……」

明久
「でも、室内の装飾も綺麗だし、これならうまくいくよね？」

確かに学園祭のレベルとしては充分すぎるほどだ。

康太

「……飲茶も完璧」

明久
「おわっ」

風太
「康太、何回言ったら分かる？」

いきなり康太が後から現れた。
怖いからやめてって言ってるのに。

明久
「ムッツリーニ、厨房の方もオーケー？」

康太
「……味見用」

そう言って康太が差し出したのは木のお盆。上には陶器のティーセットと胡麻団子が乗っている。

瑞希
「わぁ……。美味しそう……」

美波
「土屋、これウチらが食べちゃっていいの？」

康太
「……（コクリ）」

秀吉

「では、遠慮なくいただこうかの」

瑞希、美波、秀吉が作り立ての胡麻団子を食べる。

瑞希
「お、美味しいです！」

美波
「本当！表面はカリカリで中はモチモチで食感もいいし！」

秀吉
「甘すぎないところもいいのう」

と大絶賛。

女子には甘いものって思ってたけど秀吉、君はどっちなんだ？」

秀吉
「ワシは男じゃっ！」

風太
「君はテレパシーを使えるのか！？」

秀吉
「思いっきり言っておったぞ」

風太
「……マジか」

明久
「ふむふむ。表面はゴリゴリでありながら中はネバネバ。甘すぎず、辛すぎる味わいがとっても――んゴパっ」

風太
「明久!?どうしたの!?」

なにかを食べていた明久の口から突然ありえない声がでた。

なんだ!?本当に一体どうしたんだ!?

秀吉
「あ、それはさっき姫路が作ったものじゃな」

秀吉、それを先に言ってやってよ。

康太
「……!!（グイグイ!）」

明久
「む、ムッツリーニ!どうしてそんな脅えた様子で胡麻団子を僕の口に押し込もうとするの!?無理だよ!食べられないよ!」

明久だからこの程度で済んだけど、常人なら即死レベルだろうね。

雄二
「うーっす。戻ってきたぞー」

明久
「あ、雄二。お帰り」

おっ。生け贄雄二が帰って来た。

雄二
「ん？なんだ、美味そうじゃないか。どれどれ？」

そして、何もせずに自ら地獄へと行った雄二。

秀吉
「……たいした男じゃ」

明久
「雄二。君は今、最高に輝いているよ」

風太
「……ご臨終……」

雄二……君のことは忘れない。

雄二
「？お前らが何を言ってるのか分からんが……。ふむふむ。表面はゴリゴリでありながら中はネバネバ。甘すぎず、辛すぎる味わいがとっても――んゴパっ」

おお、デジャヴ☆

明久
「あー、雄二。とっても美味しかったよね？」

明久が雄二に目で合図を送っている。

雄二
「ふっ。何の問題も無い」

雄二は床に突っ伏したまま言う。

雄二
「あの川を渡ればいいんだろう？」

それは三途の川なんだよ。ってか死んじゃうよ？

瑞希
「え？あれ？坂本君はどうかしたんですか？」

美波
「あ、ほんとだ。坂本、大丈夫？」

トリップしていた二人が今の惨劇に気づかない様子で聞いてくる。
食いもんはいいとしても今は雄二が死にかけだよ？

明久
「大丈夫だよ、ちょっと足が攣っただけみたいだから」

風太
「そうだよ、二人とも気にしないで」

二人には心配するなとは言ったものの、雄二はものすごい危ない状態だ。その証拠に明久は今雄二に心臓マッサージを必死に行って居て、俺は今雄二の頬をつねっているが、実はもの凄い力でやっている。……ほら痕がついちゃった。

雄二
「六万だと？バカ言え。普通渡し賃は六文と相場が決まって――はっ！？」

よしっ、蘇生成功だ。これで一つの命が救われた。

明久
「雄二、足が攣ったんだよね？」

すかさず明久が畳み掛ける。

雄二
「足が攣った？バカを言うな！あれは明らかにあの団子の――」

風太
「雄二……いっぺん……死んでみる……？」

雄二
「足が攣ったんだ運動不足だからな」

雄二は物分りがよくて助かる。（というより俺が団子とグローブを見せたからだけど）

流石に俺も明久も友人を殺すのは忍びない。

雄二
（……明久、風太、いつかキサマらを殺す）

明久

（……上等だ。殺られる前に殺ってやる）

風太
（……二人とも殺っていいか？）

笑顔で小声の会話。こんな俺達は仲良し三人組です。

美波
「ふーん。坂本って足を攣りやすいのね」

ヤバイ、美波が怪しんでる。

明久
「ほら、雄二って余計な脂肪がついてないでしょう？そういうからだって、筋が攣りやすいんだよ。島田さんも胸がよく攣るからわかるとぐべぁっ！」

雄二
「……俺が手を下すまでも無かったな」

風太
「明久、美波の呼び方はどうしたの？」

秀吉
「ところで、雄二はどこに行っておったのじゃ？」

そういや気になるね。

雄二
「ああ、ちょっと話し合いにな」

……もの凄く怪しい……。
雄二がここまで歯切れが悪い返事を基本的にはしない。絶対になにか隠している。

瑞希
「そうですか～。それはお疲れ様でした」

瑞希は全く疑わずに雄二に笑みを送る。いい子だなホント。

雄二
「いやいや、気にするな。それより、喫茶店はいつでもいけるな？」

秀吉
「バッチリじゃ」

康太
「……お茶と飲茶も大丈夫」

瑞希の料理が混ざってなかったら大丈夫だろう。……多分。

雄二
「よし。少しの間喫茶店は風太と秀吉とムッツリーニに任せる。俺は明久と召喚大会の一回戦を済ませてくるからな」

そう言って二人の肩に手を置く雄二。

風太
「ってか雄二たちも出るんだ」

美波
「あれ？あんた達も召喚大会に出るの？」
美波とほぼ同じタイミングで聞く。
明久
「え？あ、うん。色々あってね」
明久は適当に言葉を濁す。
あれは確実になにか隠しているね……。帰りに聞くとするかな。
美波
「もしかして、賞品が目的とか……？」
美波の探るような視線が明久に刺さる。
明久
「う～ん。一応そういうことになるかな」
意外だな。
美波
「……誰と行くつもり？」
明久
「ほぇ？」
美波から殺気が出る。危険な状態だ。
瑞希

「吉井君。私も知りたいです。誰と行こうと思っていたんですか？」

まさかの瑞希も戦闘モード。

明久
「だ、誰と行くって言われても……」

たぶん明久じゃなくて、雄二が霧島と行くんじゃないか？

しかし、次に聞いた答えは意外だった。

雄二
「明久は俺と行くつもりなんだ」

……本当に意外だよ。二人の妄想が始まっちゃうよ。てか始めてるし。

片雲
「まさか、雄二とペアチケットで『幸せになりに』行くのか……？」

片雲までいたか。

雄二
「俺は何度も断っているんだがな」

美波
「アキ。アンタやっぱり、木下よりも坂本の方が……」

明久
「ちょっと待って！その『やっぱり』って言葉は凄く引っかかる！」

諦めが肝心だよ、明久。

瑞希
「吉井君。男の子なんですから、できれば女の子に興味を持った方が……」

雄二
「それができれば明久だって苦労してないさ」

明久
「雄二、もっともらしくそんなことを言わないで！全然フォローになってないから！」

明久の同性愛説は、こうして広まっていくんだな。

雄二
「っと、そろそろ時間だ。行くぞ明久」

明久
「……くっ！と、とにかく、誤解たがらね！」

ちょっとみじめになった明久は負け犬の如くさっさと逃げた。

風太
「俺も行くかな」

秀吉
「ん？お主も行くのか」

風太
「うん。大丈夫。始まって三分で戻るから」

秀吉
「それはそれで酷い思うのじゃが……」

秀吉は『さすがにやめておいたら？』という視線を送ってくる。

風太
「それじゃあ行くから」

秀吉
「うむ」

康太
「……（コクコク）」

俺は二人に言ってからステージに向かう。

風太
「くだらないことしてたなぁ……」

俺は一人で見に行ったけど、

風太
「喧嘩腰だったから見る気失せるじゃん」

そう、上の理由ですぐ戻ることにしたのだ。

そうして戻っていると向こうから秀吉が走ってくる。

風太
「どったの？」

秀吉
「風太、早く戻ってきて欲しいのじゃ」

風太
「……急ぎの用事みたいだね。分かった、すぐに戻るよ」

秀吉
「お願いじゃぞ」

風太
「分かったから」

そう念を押されながら俺は急いでＦクラスに戻る。

？

「マジできったねぇ机だな！これで食い物扱っていいのかよ！」

店に入ると、絵に描いたようなチンピラがテーブルのクロスを剥が

していた。
おそらく三年だろうなぁ。

客
『うわ……確かにひどいな……』

客
『クロスで誤魔化してたみたいね』

客
『学園祭と入っても、一応食べ物のお店なのに……』

営業妨害するんだ……

風太
「とりあえずメールっと」

俺はまず、雄二にメールを送る。

風太
「あとは……暴れろよ？嵐士」

俺は眼帯を付けた。

嵐士
「おうよ！」

さてと、あれか?妨害してる奴は。

坊主
「まったく、責任者はいないのか!このクラスの代表ゴペッ!」

嵐士
「失礼しやした。只今ウチの代表は席を外してますんで、ワイが代理の多重です。何や、何かご不満な点でもありやしたか?」

とりあえず殴り飛ばして敬語気味で対応しておくか。

モヒカン
「不満も何も、今連れが殴り飛ばされたんだが……」

もう一人のモヒカン頭が驚いている。そりゃそうか。俺でもいきなり連れが殴り飛ばされたら驚く。まぁ、絞めにかかるが。

嵐士
「それはワイのモットー『パンチから始まる交渉術』に対する冒涜ですか?」

モヒカン
「ふ、ふざけんなよこの野郎……!なにが交渉術ふぎゃあっ!」

嵐士
「それから『キックでつなぐ交渉術』や。ラストに『プロレス技で絞める交渉術』が待っていやすでい?」

モヒカン
「わ、わかった!こちらはこの夏川を交渉に出そう!俺は何もして

ないから交渉は不必要だぞ！」

夏川
「ちょ、ちょっと待てや常村！お前、俺を売ろうと言うのか！？」

慌て始める常夏コンビ。

嵐士
「それでどうするんだ？常夏コンビ、最後のをやるか？」

敬語なんてどうでもいい。俺は暴れ足りない。

常村
「い、いや、もう充分だ。退散させてもらう」

ふむ。賢明な判断だ。

嵐士
「そうかよ。それなら――」

大きく頷き、夏川（坊主）の腰を抱え込む。

夏川
「おいっ！俺もう何もしてないよな！？どうしてそんな大技をげぶるぁっ！」

嵐士
「――これで交渉は終わりだ」

そこからバックドロップを決めてやったぜ。

常川
「お、覚えてろよ！」
倒れた相棒を抱えて、走り去る常村（モヒカン）。これで問題は解決――
客
『流石にこれじゃ、食っていく気はしないな』
客
『せっかく美味しそうだったんだけどね』
客
『食ったら腹壊しそうだからなぁ』
――させろよ（怒）
クロスの中を目の当たりにして、ガタリと音を立て、一人目が席を立つ。
あれは、教頭の竹原先生か。
まさかこのタイミングで立つとは。
客
『店、変えるか』
客
『そうしようか』

F生徒
「あ、お客さん！」

一人立つと他も立つ。集団心理でいなくなるようにする気か？それにしても、それでは悪評が風の如くどんどん広がる。

残念ながらそうはさせない。

すると秀吉と数名の男子がテーブルを運んできた。

嵐士
「失礼しました。こちらの手違いでテーブルの到着が遅れていたので、暫定的にこのよう物を使ってしまいました。ですが、たった今本物のテーブルが届きましたのでご安心ください」

仕方がないが深々と頭を下げる。今、後で秀吉と他数名が演劇部のテーブルを持ってくる。ま、目の前で交換すれば衛生面は良くなった印象を与えることができる。これで悪評は流れずに済むはずだ。あとは雄二と明久がどっかから調達してくるテーブルを待つだけだ。

嵐士
「とりあえず風太に替わるか」

風太
「いや～お疲れ☆」

俺は見ていたがもう大爆笑していた。

美波
「あれ？テーブル入れ替えるの？」

そんな時、後ろから女子の声が聞こえた。

風太
「あ、美波に瑞希。おかえり。勝ったよね？」

瑞希
「はい。なんとか勝てました」

とVサインをする瑞希。いつもは勝ちにこだわらないが、事情があるからね。

美波
「そんなことより、テーブルを入れ替えちゃってもいいの？演劇部にあるテーブルなんて、そこまで多くはないはずでしょう？」

まぁそうだ。流石にこれ以上は無いかもしれない。
おっと、忘れ物～♪

風太
「それでは――」

雄二
「それでは、他のテーブルも届き次第順次入れ替えさせて頂きますので、ご利用中のお客様はひとまずこちらのテーブルにお移りの上、ごゆっくりおくつろぎ下さい」

俺が言おうとした瞬間に雄二が言った。

雄二
「よくやった風ｔ「どりゃあ！！」ぐはっ！？」

とりあえず雄二にドロップキックをかましてやった。

風太
「あ、皆勝った？」

そう聞くと皆頷く。

島田
「一応ね。それより、喫茶店は大丈夫なの？」

確かにそうだ。さっき騒ぎを起こしたから客は減るかも。そのオマケで悪評も流れる危険性がある。

雄二
「姫路に島田。お前らも喫茶店でウェイトレスをやってくれ。落ちた評判を取り戻す為に、笑顔で愛想よくな」

風太
「復活早くない？どんな体してんのさ」

瑞希
「はいっ！頑張りますっ！」

あスルーされた。けど、瑞希はやる気だなぁ。

雄二
「さぁみんな！損した分は絶対に取り返すぞ！」

『おおーー！』

俺はどっちだっけ？

雄二
「俺と明久は二回戦に行ってくる」

風太
「ＯＫ。すぐ終わらせて来てよ？」

明久
「当たり前だよ」

そう言って二人はステージへと向かった。

風太
「皆！じゃんじゃん稼ぐぞー！」

『おおー！』

※明久と雄二は勝ち、相手の根本・小山ペアは破局を迎えた。ザマァｗ

続く

第四問

明久
「ただいまー……って、あんまりお客さんいないなぁ……」

明久。帰ってそれは無いと思うよ。

片雲
「勝ったんだよな？明久」

明久
「無事勝ってきたよ」

秀吉
「それは何よりじゃ。ところで、雄二の姿が見えんが？」

そう言えば居ない。どっかに行ってるのかな？

明久
「うん。トイレに寄ってくるってさ」

納得。

明久
「それより秀吉、これはどういうこと？お客さんがいないじゃないか」

秀吉

「……むぅ。ワシはずっとここにおるが、妙な客はあれ以降来ておらんぞ？」

秀吉が首を傾げる。

風太
「妨害でもされてんのかな？」

秀吉
「かもしれんのう」

明久
「え？どういうこと？」

片雲
「それぐらい分かれ」

そして相談すること数分。

？？？
『お兄さん、すいませんです』

雄二
『いや。気にするなチビッコ』

？？？
『チビッコじゃなくて葉月ですっ』

雄二と小さな女の子の声が聞こえてきた。

秀吉
「雄二が戻ってきたようじゃな」

明久
「あ、うんそうみたいだね」

風太
「……雄二は犯罪でも犯したの？」

片雲
「それはないだろ……まさかとは思うが……」

雄二
『んで、探してるのはどんなヤツだ？』

ガラッと音を立てて扉が開き、雄二が入ってくる。話し相手は小柄なのか雄二の影になって見えない。

F生徒
『お、坂本。妹か？』

F生徒
『可愛い子だな～。ねぇ、五年後にお兄さんと付き合わない？』

F生徒
『俺はむしろ、今だからこそ付き合いたいなぁ』

二人はあっという間にクラスの野郎どもに囲まれてしまった。

あと、最後の。今手を出したら捕まるよ。

葉月
『あ、あの、葉月はお兄ちゃんを探しているんですっ』
どうやら女の子は人を探していて雄二に声をかけたみたいだった。
雄二はなんだかんだ言って面倒見がいいなぁ。
雄二
『お兄ちゃん？名前はなんていうんだ？』
葉月
『あぅ……。わからないです……』
雄二
『家族の兄じゃないのか？それなら、何か特徴は？』
葉月
『えっと……バカなお兄ちゃんでした！』
それはそれで凄いな……
雄二
『バカなお兄ちゃんなら……沢山いるんだが？』
否定できない。
葉月
『あ、あの、そうじゃなくて、その……』
雄二

『うん？ほかに何か特徴があるのか？』

葉月
『その……すっごくバカなお兄ちゃんだったんです！』

『『『吉井だな』』』

あ、泣いた。明久が泣いた。

明久
「まったく失礼な！僕に小さな女の子の知り合いなんていないよ！絶対に人違い――」

葉月
「あっ！バカなおにいちゃんだっ！」

葉月と名乗っていた小さな子がかけてきて、明久に抱きついた。

風太
「絶対人違いがどうしたの？」

明久
「……人違いだと、いいなぁ……」

と、明久はどこか遠くを見る。

残念ながら君に逃げるという選択肢はないようだよ？

明久
「って、君は誰？見たところ小学生だけど、僕にそんな歳の知り合

いはいないよ？」

葉月
「え？お兄ちゃん……。知らないって、ひどい……」

女の子の表情が歪んだ。

葉月
「バカなお兄ちゃんのバカァっ！バカなおにいちゃんに会いたくて、葉月、一生懸命バカなお兄ちゃんを知りませんか？って聞きながらきたのに！」

それはそれは明久も可哀想に。

雄二
「明久――じゃなくて、バカなおにいちゃんがバカでごめんな？」

秀吉
「そうじゃ。ま、バカなお兄ちゃんはバカなんじゃ。許してやってくれんかのう？」

片雲
「君は悪くない。悪いのはバカに生まれてきた可哀想なバカなお兄ちゃんだからな」

酷い言われようだ。

葉月
「でもでも、バカなお兄ちゃん、葉月と結婚の約束もしたのに――」

美波
「瑞希！」

瑞希
「美波ちゃん！」

美波・瑞希
「殺るわよ！」

明久
「ごぶぁっ！」

見事に明久の首筋に瑞希と美波のコンビネーションアタックが決まった。

風太
「ハハハ……。ん？外にいるのは……」

その時に俺が見たのは明らかにアヤだった。だが、ツインテールの色が緑だった。

風太
「まぁ、いっか」

明久
「お願いひまふっ！はなひを聞いてくらはいっ！」

そして、明久はいつの間にか絞められていた。

美波
「仕方ないわね。二本刺したら聞いてあげるからちょっと待ってなさい」

明久
「あのね、美波。包丁って一本でも刺さったら致命傷なんだよ？」

あ、明久がヤバイ。そろそろ止めるかな。

風太
「はい、二人ともストップ。明久死ぬよ？」

美波・瑞希
「「構わないわ！／構いません！」」

風太
「お前ら常識を学べっ！？」

とりあえずあの必殺技で止めておいた。
※Ｄクラス戦を確認してね。

雄二
「ところで、この客の少なさはどういうことだ？」

あれから話が進み、雄二が店内を見回しながら言う。

葉月
「そういえば葉月、ここに来る途中で色々な話を来たよ？」

雄二
「ん？どんな話だ？」

雄二が屈みこみ、葉月ちゃんに目線を合わせる。

葉月
「えっとね、中華喫茶は汚いから行かないほうがいい、って」

風太
「常夏処刑決定☆」

明久
「あの常夏コンビ？まさかそこまで暇じゃないでしょ」

さっきかなりシバイたからなぁ……。逆恨みしてるかも。

雄二
「どうだかな。ひとまず様子を見に行く必要があるな」

明久
「そうだね。少なくとも、噂がどこから流れてどこまで広がっているのかを確認しないと」

小さな葉月ちゃんが聞く程だ。かなりの勢いで広まっているかもしれないな。

葉月
「お兄ちゃん、葉月と一緒に遊びにいこっ」

葉月ちゃんが明久の手を握りながら言う。

明久
「ごめんね、葉月ちゃん。お兄ちゃんはどうしても喫茶店を成功させなきゃいけないから、あんまり一緒に遊べないんだ」

明久はそう言いながら葉月ちゃんの頭をなでる。

葉月
「むぅ～。せっかく会いに来たのに～」

葉月ちゃんの頬が不満げに膨れた。

風太
「だったら一緒に行けばいいじゃん。他の店の偵察兼ねて」

明久
「ん～、そっか。それじゃ、一緒にお昼ご飯でも食べに行く？」

葉月
「うんっ」

葉月ちゃんの膨れ顔が一転して満面の笑みに変わる。

美波
「じゃあ葉月、お姉ちゃんも一緒に行くね」

美波が優しい。やっぱ妹の前ではこういうもんなのかな？

秀吉

「ふむ。ならば姫路と雄二も一緒に行くとよいじゃろ。召喚大会もあるじゃろうし、早めに昼を済ませてくるといい」

雄二
「そうか。悪いな、秀吉」

瑞希
「いいんですか？ありがとうございます。木下君」

これで明久たちは全員で五人。さらに俺を含めて六人。学園祭を歩き回るには結構な人数になった。

ちなみに片雲は用事があると言ってさっきどこかに行ってしまった。

雄二
「それでチビッ子、さっきの話はどの辺で聞いたのか教えてくれるか？」

葉月
「えっとですね……短いスカートを穿いた綺麗なお姉さんが一杯いるお店――」

明久
「なんだって!?雄二、それはすぐに向かわないと！」

雄二
「そうだな明久！我がクラスの成功のために、（低いアングルから）綿密に調査しないな！」

今の（）の中聞こえたよ？あとでしばかれるのに。

美波
「アキ、最低」

瑞希
「吉井君、酷いです……」

葉月
「お兄ちゃんのバカ！」

風太
「ハハハ……」

罵倒が聞こえないくらいあの二人の心は躍っているようだ。

雄二
「明久、ここはやめよう」

明久
「ここまで来て何を言ってるのさ！早く中に入るよ！」

雄二
「頼む！ここだけは、Ａクラスだけは勘弁してくれ！」

俺達が追いつくと、Ａクラスの【メイド喫茶『ご主人様とお呼び！』】の前で雄二が入ることを抵抗していた。

明久
「雄二、これは敵情視察なんだ。決して趣味じゃないんだから――」

康太
「……！！（パシャパシャパシャパシャ）」

そこには指が擦り切れんばかりにシャッターを切っている男が一人。

風太
「……康太。君は何をしているか、分かってるのかい？」

康太
「……人違い」

厨房責任者のクラスメイトはカメラ片手に否定のポーズをとっている。

美波
「どこからどう見ても土屋でしょうが。アンタ何してるの？」

康太
「……敵情視察」

こいつの敵情視察はローアングルから女子を撮影することらしい。

明久
「ムッツリーニ、ダメじゃないか。盗撮とか、そんなことしたらとられている女の子が可哀想だと――」

康太

「……一枚百円」

明久
「2ダース貰おう――可哀想だと思わないのかい？」

美波
「アキ、普通に注文してるわよ」

明久がついうっかりといった顔で慌てている。

康太
「……そろそろ当番だから戻る」

そう言って明久に写真を渡し、教室の方に去っていった。

プリントアウトまで済ませてあるとは、流石というか、最低というか。

明久
「まったく、ムッツリーニにも困ったもんだね」

ならさりげなく写真をポケットに仕舞うな。

瑞希
「吉井君、その写真をどうするつもりなんですか？」

あ、バレてる。ってか当然だと思うな。

明久
「やだな～。もちろん処分するに決まってるじゃないか。それより

そろそろお店に入ろう？もうすごくおなかが減っちゃったよ」

明久が演技バレバレで腹をさする。

風太
「それより、入るよ？」

明久
「うんうん。早く敵情視察も済ませないと――写ってるのは男の足ばっかりじゃないか畜生！」

パシッ！シュボッ！

風太
「見てるじゃん」

明久
「ゴメンゴメンゴメン！！！」

とりあえず燃やしてから脅した。

風太
「んじゃ、入ろう」

翔子
「……おかえりなさいませ、ご主人様」

迎えてくれたのはメイド服姿の霧島翔子だった。

瑞希

「わぁ、綺麗……」

確かに霧島は綺麗だった。長い黒髪にエプロンドレスの白がよく映え、黒のストッキングが彼女の美脚を更に際立たせている。同姓が羨んでも仕方のない麗しさだ。

明久
「それじゃ僕らも」

瑞希
「はい。失礼します」

美波
「お邪魔しまーす」

葉月
「お姉さん達、きれ～！」

続いて明久達が中に入ってくる。そしたら霧島は俺の時と同じように

翔子
「……おかえりなさいませ、ご主人様にお嬢様」

と出迎えてくれた。

雄二
「……チッ」

翔子
「……おかえりなさいませ、今夜は寝かせません、ダーリン」

ちょっとアレンジされていた。

瑞希
「霧島さん、大胆です」

美波
「ウチも見習わないとね……」

葉月
「あのお姉さん、寝ないで一緒に遊ぶのかな？」

三者三様の反応。瑞希と美波は憧れのようだ。

風太
「あ、そうだ。霧島」

翔子
「……なに？」

風太
「アヤいる？」

翔子
「……優子に連絡」

霧島は素早く携帯を取り出した。
って――

風太

「待って!?俺はたださっき見かけたから!でも多分違うと思ったけど凄く似てるから!双子なのかと聞こうと思って!だから優子には連絡しないで!?」

翔子
「……分かった」

なんとか説得できた。

風太
「で?アヤは?」

翔子
「……今は休憩中」

風太
「ありがとう。あとで呼んでくれない?」

翔子
「……やっぱり連絡を」

風太
「だから違うから!?」

その後、何度か話して納得してくれた。さらに雄二たちは先に座っていたということに驚いてから俺は座った。そしてみんな先に注文していたという。このやろ。

常村

『それにしても、この喫茶店は綺麗で良いな！』

夏川
『そうだな。さっき言った二一Ｆの中華喫茶は酷かったからな！』

常村
『テーブルが腐った箱だったし、虫もわいてたもんな！』

風太
「！？ちょっとトイレ行って来る！」

明久
「え？風太！？」

ダッ！

俺はあのクズ二人を見た瞬間、トイレに行った。

雄二
「拒絶反応だな」

明久
「そこまで嫌なんだ……」

そんな声も聞こえずに。

風太
「うぅ～……。気持ち悪い……」

今俺は男子トイレに居る。

明久
「こ、この上ない屈辱だ……！」

雄二
「似合ってるから安心しろ」

秀吉
「明久、存外に似合っておるぞ」

そう言えば突然雄二達が来たと思ったら明久を女装させてなぁ……
と思いだしながら――

風太
「☆●◆▽「♪＊×　」

――吐いていた。

雄二
「風太。今出れるか？」

風太
「多分大丈夫……」

雄二
「あの常夏コンビをシバキに行くんだが」

風太

「よし行く！」

雄二
「うおっ！？」

俺でも驚くぐらいの速さで治った。

常村
『とにかく汚い教室だったよな』

夏川
『ま、教室のある旧校舎自体も汚いし、当然だよな』

常夏コンビはまだ同じような会話を続けている。そこに……

明久
「お客様」

常村
「なんだ？――へぇこんなコもいたんだな」

夏川
「さっきの子もそうだが、結構可愛いな」

明久に舐めるような視線がまとわりついている。

明久
「お客様、足元をお掃除しますので、少々よろしいでしょうか？」

常村
「掃除？さっさと済ませてくれよ？」

二人が席から立ち上がる。

風太
「何使えばいい？」

雄二
「派手なものじゃなければ何でもいい」

風太
「う～ん……」

今俺が使えるのはエアーガン、槍、グローブの三つだ。

風太
「じゃあ、グローブでいっか」

雄二
「決まったか。それならそろそろ行くぞ」

風太
「イエッサー」

俺たち三人は、坊主頭にバックドロップをお見舞いしている明久の元へ向かった。
ん？三人？

片雲
「俺も殺ってやる」

風太
「片雲!?」

隣に片雲がいた。いつの間に。

明久
「こ、この人、今私の胸を触りました!」

夏川
「ちょっと待て!バックドロップするために当ててきたのはそっちだし、だいたいお前は――ぐぶぁっ!」

雄二
「こんな公衆の面前で痴漢行為とはこのゲス野郎が!」

風太
「そんな人にはお仕置きを」

片雲
「更生するまで殺す」

痴漢退治という大儀名分を持った俺たち三人が登場。

常村
「何を見ていたんだ!?明らかに被害者はこっちだろ!」

倒れている坊主頭の代わりにモヒカン頭が俺たちに食って掛かって

くる。

風太
「うるさいなぁ。ならばこうしてあげよう」

常村
「熱い！？やめろ！これじゃ火傷に――」

まだ喋るか。

風太
「もっとさせてあげよう」

常村
「ぐぁぁああ！」

モヒカンが半分虚ろな目になっている。

雄二
「ウェイトレス！そっちで倒れている男は任せたぞ」

明久
「え？あ、はい。分かりました」

明久は頷き、坊主に何かし始めてる。

片雲
「それでは連行させてもらおうか」

片雲がバキバキと指を鳴らしながら近づく。

それよりバキバキって、もう人を超えてる音のような気がする。

常村
「くっ！行くぞ夏川！」

状況を不利と見て、逃げ出すモヒカン。

夏川
「こ、これ、外れねぇじゃねぇか！畜生！覚えてろ変態めっ！」

復活しやがった坊主は頭にブラをつけた変態と化した状態で走り去る。
こんなことするのは明久しか居ないな。接着剤持って笑ってるし。

雄二
「逃がすか！追うぞ風太、片雲、アキちゃん！」

風太
「イエッサー」

片雲
「殺す殺す殺す殺す……（ブツブツ）」

アキちゃん
「了解！でもその呼び方だけは勘弁して！」

二人を追い、俺たち三人も廊下に出る。
あと片雲怖い！

アキちゃん
「ところで、ここの会計は？」

雄二
「俺とお前は何も頼んでいないだろ！姫路たちに任せておけ！」

翔子
『……お会計は、夏目漱石を一枚か、坂本雄二を一名のどちらかとなります』

美波
『坂本雄二を一名でお願い』

翔子
「……ありがとうございます」

……雄二、千円で売り飛ばされたけど、大丈夫かな？

雄二
「明久！奴等は四階に逃げたぞ」

風太
「早く来てよ！明久！」

片雲
「殺す殺す……」

人のごった返す廊下で俺達が叫ぶ。

アキちゃん
「ごめん！やっぱりアキちゃんでお願い！なんだか周囲の視線が刺さるんだ！」

雄二・風太
「「わかった！吉井明久――もとい、メイドのアキちゃん！」」

アキちゃん
「キサマら絶対ワザとだな！」

今さら何を言う。これは今に始まったことではないよ？
それにしても四階だったら三年のとこかな。早く行かなきゃ。

……なんだろ？この違和感……。もしかしたらまた？

雄二
「三－Ａに入っていったのが見えた！こっちだ！」

雄二が近くにある教室へと突っ込んで行く。教室を暗幕で覆っている三－Ａは『迷路風お化け屋敷』という看板を立てていた。

係員
「いらっしゃいませ。四名様ですね？」

雄二
「いや、六名だ。金は後ろの連れが払う」

さすが雄二だ。何の躊躇いもなく後ろの人に会計を押し付けやがった。

係員
「では、恐怖の世界をお楽しみください」

係員は疑うことなく扉を開けた。俺達は嘘がバレる前にに急いで中に飛び込む。

中はダンボールやパーテンションで作られた道になっており、明かりは足元の小さなライトだけの部屋だった。

アキちゃん
「雄二、暗がりだから慎重に行動しないと」

雄二
「そうだな、連中がどんな罠を用意しているかわからん」

明かりの少ないこの部屋でヤツらを捕まえるのは難しいな。

雄二
「気をつけろよ、女装趣味の偽メイド」

アキちゃん
「う、うん。気をつけないと、気をつけないと、気をつけないと……」

周囲を警戒しながら慎重に歩く。

アキちゃん
「気をつけないと――」

バッ！

と、俺達の目の前に突然何かが現れた。そいつは今まで見たことが無いようなお化けだ。男子の制服を着ながら、坊主で、中肉中背で――頭にブラをつけていた。

アキ・夏川
「「へ、変態だ！」」

雄二・風太・片雲
「「「どっちもな」」」

二人の変態に冷静な俺たちのツッコミ。

夏川
「ここまで追ってくるなんて、しつこい連中だぜ！」

坊主頭が奥へと走り出す。どうやらただの鉢合わせだったらしい。

雄二
「逃がすか！必殺アキちゃん爆弾を食らえ！」

アキちゃん
「雄二、その技はやめよう！名前を聞く限り一番の被害者は僕のような気がする！」

明久は後頭部を思いっきりつかむ雄二に訴える。

風太
「しょうがない。撃つよ！」

俺は一瞬で構え、

風太
「コントロールショット！！」

バンッ！

俺はちゃんと頭を狙った。なのに――

夏川
「うおぉお！」

風太
「嘘！？」

あいつは見事に避けた。

常村
『今だ！壁を倒して閉じ込めろ！』

どこからかモヒカンの声が聞こえた。ヤバイかも。身動きが取れなくなる。

風太
「とりあえず早く脱出を！」

俺達は引き返した。

アキちゃん

「……あれ？壁が倒れてこないね」

片雲
「……ハッタリだな」

雄二
「くそっ！あのモヒカン野郎……！」

既にあの変態もいない。悪知恵だけは良くね？

片雲
「チッ……ん？雄二、三回戦は何時からだ？」

雄二
「何？もうそんな時間か？……仕方ない。悔しいがここは一旦戻るとしよう」

風太
「そだね」

俺達は一旦教室に戻ることにした。

続く

第五問

風太
「不戦勝？」

明久
「うん。相手が食中毒で棄権したんだ」

召喚大会三回戦。明久と雄二の試合は対戦相手が食中毒で棄権というなんとも拍子抜けの結果だった。

……まさかとは思うけど、うちの店でハズレを引いた客じゃないよね？

秀吉
「ならば、こっちの建て直しに協力してくれんか？」

秀吉が申し訳なさそうに表情を曇らせる。秀吉は悪くないよ。絶対に。

雄二
「そうだな。一度失った客を取り戻すためにも、何かインパクトのある物をやる必要がありそうだな」

店の中は相変わらず空席だらけ。悪評の元は断った。だけど一度流れた噂は止められないから、雄二の言うとおり、ここでインパクトのあることをしないとね。

秀吉
「ふむ。それで何をするか、じゃが……」
秀吉は教室を見渡すけど、出来そうなものが見つかる訳がない。
風太
「雄二。早くしてよ、もったいぶらずにさ」
雄二
「任せておけ。中華とこれでは安直過ぎる発想だが、効果は絶大のはずだ」
そう言って雄二が取り出したのは見事な水色と白のチャイナドレスだった。
秀吉
「ほう。若干裾が短いような気もするが、これならば確かにインパクトはあるじゃろうな。コレを宣伝用に――」
風太
「――明久が着ると」
雄二
「そしてお前も着る」
風太
「何故に！？」
それはインパクト大だ。

明久
「ちょ……！お願い、許して！風太はいいとしても、僕がメイド服の次にチャイナまで着たら、きっと僕はホンモノだって皆に認識されちゃう！」

風太
「何故俺はいいんだ！？」

確かに明久は無駄に人気だけど……なんで俺まで着る羽目になる！？

雄二
「冗談だ。これは秀吉と姫路と島田と風太に着てもらう」

明久
「あ。なんだよかった～」

秀吉
「ワシが着るのは冗談ではないのかのぅ……」

風太
「だ・か・ら！何で！」

雄二
「自分の容姿に考えろ」

秀吉と俺はチャイナドレスを持って溜め息をつく。

もう諦めよう、仕方のないことだ。

美波
「たっだいま～！って、なんだ。アキってばメイド服脱いじゃったんだ」

瑞希
「あ……残念です。可愛かったのに……」

葉月
「お兄ちゃん。葉月もう一回みたいな～」

三人が戻ってきた。それにしても三人とも、明久の悪評を広めてあげると言っているようなものだよ。

明久
「あはは。残念ながら、ただで人のコスプレを見られるほど世の中甘くないよ？」

明久がにこやかに笑いかけている。

……目は一切笑ってないけど……。

雄二
「そういうことだ。姫路に島田、クラスの売り上げのために協力してもらうぞ」

風太
「大丈夫。俺と秀吉も着るから。……でもどちらにせよ着る以外はないよ」

俺らと話している間に明久が入口を塞いで退路を断つ。

瑞希
「な、なんだか三人とも、目が怖いですよ……？」

美波
「凄く邪悪な気配を感じるんだけど……」

若干引き気味の二人。だけど、逃げ場はないよ。

雄二
「やれ、明久」

明久
「オーケー！へっへっへ、おとなしくこのチャイナ服に着替え痛ぁっ！マジすんませんでした！自分チョーシくれてましたっ！」

雄二・風太
「「弱いな、お前……」」

美波は相変わらず強いね。

美波
「どうしてまた、急にそんなことを言い出すのよ？前に須川はチャイナドレスを着たりすることは無い、って言ってたと思うけど」

あれ、須川そんなこと言ってたの？

雄二
「店の宣伝のためと、明久の趣味だ。明久はチャイナドレスが好きだよな？」

明久
「大好――愛してる」

風太
「君は嘘を知らないのかい？」

確実に言葉の選択を間違えたね。

美波
「し、仕方ないわね。店の売り上げの為に、仕方なく着てあげるわ」

瑞希
「そ、そうですね！お店の為ですしね！」

瑞希と美波がそれぞれの服を取る。

葉月
「お姉ちゃん、葉月の分は？」

風太
「んなっ！」

……小学生にまで女扱いをされるとは。

風太
「……葉月ちゃんも手伝ってくれるの？」

葉月
「お手伝い……？あ、うん！手伝うから、あの服葉月にもちょうだ

い！」

今の間はもしかして手伝いをする気は無かったんじゃないのかな？

明久
「けど、ごめんね。気持ちはうれしいんだけど、葉月ちゃんの分は数が――」

康太
「……！！（チョキチョキチョキチョキ、チクチクチクチク）」

風太
「こ、康太！？」

明久
「どうしてそんな凄い勢いで裁縫を！？っていうかさっきまでいなかったよね！？」

康太
「……俺の嗅覚を舐めるな」

かっこいい……のかな？

瑞希
「それじゃあ、三回戦が終わったら着替えますね」

そういやもうすぐ試合だ。

雄二
「いや、今着替えてもらいたい」

瑞希・美波
「「え？」」

雄二の言葉に二人はハモる。

雄二
「宣伝のためだ。そのまま召喚大会に出てくれ」

一般公開で集まった人たちに宣伝するのが目的だろう。雄二たちが試合したときより時間が経ってる。だから、さっきより一般客の数も増えてるだろうから、かなり有効な手段といえる。

美波
「こ、これを来て出場しろって言うの……？」

瑞希
「流石に恥ずかしいです……」

二人ともチャイナドレスを手に困った顔をしている。
メディアも含めて大勢の人がいる中、その格好で動き回るのは恥ずかしいだろうからね。

明久
「二人とも、お願いだ」

明久は二人に頭を下げる。なにか様子が違う気がする。

雄二
「明久……。お前は本当に――チャイナが好きなんだな」

あえて否定しないとか考えてそう。

瑞希
「もしかして吉井君、私の事情を知って――」

美波
「仕方ないわね。クラスの設備の為だし、協力してあげるわ。ね、瑞希？」

瑞希の声を遮って美波が色よい返事をくれた。

瑞希
「あ。は、はい！これくらいお安い御用です！」

瑞希も快諾してくれた。

風太
「じゃあ早く着替えてきて。そろそろ始まるよ」

雄二
「そうだな。大会では自分達の所属がＦクラスであることを強調するんだぞ」

瑞希と美波がＦクラスであることが人の口にあがれば、喫茶店の宣伝になる。

美波
「オッケー。任せておいて。行くわよ瑞希」

瑞希
「はいっ」

チャイナドレスを持って出て行く二人。あっちは任せて大丈夫かな。

康太
「……できた」

葉月
「わ、このお兄さん凄いです！」

……まさかもう？流石に下心が絡んでそこまでできるのなら勉強に廻そう。

秀吉
「ふむ。それでは着替えるとするかの」

明久
「ちょ、ちょっと秀吉！ここで着替えるの！？きちんと女子更衣室で着替えないとだめだよ！」

風太
「お願い、康太を殺さないで。それに、瑞希のためにも」

確実に康太の鼻血で店が汚れる。だからやめて欲しい。

風太
「しかも俺も行くじゃん」

秀吉

「……最近、明久がワシのことを女として見ておるような気がするんじゃが」

雄二
「気のせいだ。秀吉は秀吉だろう」

明久
「うん。二人の言うとおりだよ。秀吉は性別が秀吉で良いと思う。男とか女とかじゃないさ」

風太
「意味が違う」

一回頭割ってみたいな。明久の頭。

葉月
「んしょ、んしょ……」

康太
「……！！（ボタボタ）」

風太
「葉月ちゃん！ここで着替えたら駄目だよ！」

明久
「ムッツリーニが出血多量で死んじゃうから！」

大量に出血しているはずなのに、鼻を押さえている康太の顔は心から幸せそうだった。

それよりチャイナ服着るのか……最悪だ……

風太
「いらっしゃいませー！中華喫茶ヨーロピアンへようこそ！」

店に俺の声が響く。ちなみに俺は本当にチャイナ服を着ている。

美波
「たっだいまー」

瑞希
「ただいま戻りました～」

やっと来た。

風太
「二人とも、帰って来たとこ悪いけど、手伝って」

二人が試合に向かった後、俺達はチャイナ服に着替えた俺、秀吉、葉月ちゃんで校舎内を歩き回った。最初は余り効果はないように思ったんだけれど、徐々に客は増えてきて、二人の試合が終わったと思うあたりから席が埋まり始めた。

今のところは順調だ。

美波

「良かった。だんだん持ち直してきたのね」

瑞希
「良かったです」

明久
「女性客も増えてきてるんだよ。きっと味についての噂も流れ始めたんだろうね」

明久はハズレだから知らないでしょ。飲茶の味。さっき始まる前に食べてみたけどあのレベルは凄かった。

風太
「それじゃあ二人とも、よろしくね」

瑞希
「はいっ」

美波
「オッケー」

チャイナドレスの裾を翻し、二人は注文表とペンを取りに行った。
これで客も増えるでしょ。

???
「君。注文をしてもいいかな」

風太
「あ、はい。どうぞ」

仕事に戻ろうとすると、近くの席から声がかかったので注文票を構える。

???

「本格ウーロン茶と、胡麻団子を」

風太

「はい。本格ウーロン茶に胡麻団子ですね。かしこまりました」

メモを取り、注文の確認の為にお客様に顔を向ける。

って、教頭の竹原先生じゃん。また来たの？

風太

「それでは、少々お待ちください」

竹原

「それとききたいことがあるんだが、いいかね？」

風太

「何でしょうか？」

竹原

「このクラスに吉井明久と多重風太という生徒が居ると聞いたのだが、どの子かな？」

風太

「明久はあのウェイターで、多重風太は俺ですが」

いきなりどうしたんだろ？

竹原
「ああ、そうかい。彼が――吉井君（笑）で君が多重君か」

風太
「教頭先生。人の名前に（笑）はおかしいと思いますが」

竹原
「ああ。それはすまない。だが、私はどうしても教え子である彼のことを（馬）とは呼べなくてね」

風太
「……明久は職員室でなんて呼ばれてるんですか？」

（馬）だと一つしか単語が出てこない。間違いじゃないけど。

美波
「風太、厨房の土屋から伝言。茶葉が無くなったから持ってきて欲しい、だって」

話していると美波が戻って来た。

風太
「ハイよーっと。では教頭先生、失礼します」

竹原
「構わんよ。特に用があったわけではないのでね」

風太
「……そうですか」

だったら何で明久と俺のことを聞いてきたんだろ？

美波
「風太、土屋が急いで欲しいって言ってたわよ？」

風太
「あ、ゴメン。今から行く」

それより早く用事を済ませなきゃ。ストックは空き教室だったっけ？

旧校舎の廊下をなるべく早く歩いて目的地に到着。

……何個もってけば良いんだろ？聞いとけばよかった。

？？？
「おい」

風太
「はい？」

とりあえず多めに持って行こうとしたところで声をかけられる。振り向けば見るからに怪しい連中。さらには、この空き教室に入ってきていた。

風太
「すいません。ここは立ち入り禁止なので、退室をお願いします」

よく見れば知らない顔ばかり。他校の生徒なのかな。

男

「そうはいかねぇ。多重風太に用があるんでな」

そう言いながら一人が後ろ手でドアを閉める。

風太
「俺？」

男
「お前に恨みはねぇけど、ちょっとおとなしくしてくれや！」

そう言うと、殴りかかってきた。

風太
「ホイっと」

俺はスムーズに避ける。
どうするかな？このままいつもの武器で倒してもいいけど音がでかいからなぁ……

考えていると扉がガラッと音を立てて開いた。

雄二
「おい風太。ムッツリーニが茶葉の他に餡子も急いで持ってきてくれと」

風太
「あ、雄二、丁度よかった」

タイミング良く雄二登場。

雄二
「ん？なんだこいつらは」

三人を見て眉をひそめる雄二。

風太
「わかんないけど雄二と喧嘩したいらしい。思う存分にボコボコにしてやってよ」

雄二
「なんだそりゃ？」

風太
「あと、俺戻ってるから」

雄二
『おい、これは――ああ、そうか。そういうことか』

『コイツどうする？』

『面倒だから一緒にやっちまおうぜ。』

その言葉を最後に俺は店に戻った。

～一気に時が進み～（オイオイｗｗｗ）

四回戦が終わり、明久達が戻って来た。

明久
「もちろんだよ。絶対に優勝する。全部うまくやってみせるさ！」

雄二
「やれやれ。それなら明日の朝は気合いを入れて起きてこいよ――っと。ほぅ。なかなかに盛況じゃないか」

こんな会話をしながら。

風太
「でしょ？良い感じだよ」

俺が近づきながら話かける。

瑞希
「良かった。宣伝の効果があったみたいですね」

美波
「そうでなきゃ、こんな恥ずかしい格好で大会に出た意味がないものね」

Fクラスは今や大繁盛だ。さっきの明久たちの試合前の宣伝が効果を発揮したのかな。俺は最初しか見てないけど。

葉月
「あ！バカなお兄ちゃん！お客さんがいっぱい来てくれたんだよ！」

店の中から葉月ちゃんが駆け寄ってくる。

明久
「そうだね。葉月ちゃん、お手伝いどうもありがとうね」

葉月
「んにゃ～……」

明久が葉月ちゃんの頭を撫でると気持ちよさそうに目を細める。猫みたいだ。

『お、あの子たちだ！』

『近くで見ると一層可愛いな！』

『手伝いの小さな子も教室内にいる子も可愛いし、レベルが高いな！』

客の中からそんな声が聞こえた。やっぱりチャイナドレスの効果は絶大。

秀吉
「明久。戻ってきたようじゃな。どちらが勝ったのじゃ？」

秀吉がトレイ片手に寄ってきた。ヤバい。今の秀吉はそこらの女子より色っぽい。

明久
「雄二、かな？」

美波

「そうね。坂本の一人勝ちね」

瑞希
「ですね」

風太
「は？」

秀吉
「？明久は同じチームなのに負けじゃったのか？」

何をしたら雄二だけになるのか。

雄二
「そんなことよりも、数少ないウェイトレスが固まってたら客が落胆するぞ。今は喫茶店に専念してくれ」

お客さんの視線が先ほどからこちらに集中している。無理もない、綺麗どころ四人が固まってるからね。

瑞希
「そうですね。喫茶店のお手伝いをしないといけませんよね」

裾がない服だけど、気持ちの問題なのか腕まくりの仕草をする瑞希。

美波
「そうね。ちょっと視線が気になるけど、売り上げの為にも頑張りますか！」

葉月

「はいっ。葉月も頑張りますっ」

秀吉
「……ワシは一応男なのじゃが……」

風太
「秀吉？それは客の前で言っちゃ駄目だよ？」

お客の夢がなくなるから。

秀吉
「やれやれ、仕方ないのぅ……。あ、いらっしゃいませー！中華喫茶ヨーロピアンへようこそー！」

流石は秀吉。新しくお客さんが来た瞬間に口調を変えるなんて。
本人の意志と裏腹に演劇魂が反応してるみたいだ。

雄二
「さて、俺たちも突っ立ってないで手伝うか」

風太
「頼むよ」

明久
「ん、そうだね」

明久たちも手伝う為に用意されたエプロンを身につけた。

その後、明久の機転により何とか明久たちは翔子・優子ペアに勝利を収めた。

代わりに雄二の人生が尊い犠牲となったけど……

続き

第六問

何故こうなった？

俺は今カラオケボックスのパーティールームに閉じ込められている。

いや、正確には俺『達』のほうが正しいかも知れない。……秀吉だけ縛られてるけど。

「さてどうする？坂本と――吉井と多重だったか？そいつら、この人質を盾にして呼び出すか？」

「待て。吉井と多重ってのは知らないが、坂本は下手に手を出すとマズい。今はあまり聞かないが、中学時代は相当鳴らしていたらしいからな」

「坂本って、まさかあの坂本か？」

「ああ。できれば事を構えたくないんだが……」

「気持ちはわかるがそうもいかないだろ？依頼はその二人を動けなくすることなんだから」

この明らかにチンピラにしか見えない連中にだ。

それにしても依頼という言葉に違和感を覚える。この話からすると誰か絡んでるみたい。

それにしてもどうするかな。今は武器を持っている。

考えていたら幼い声が聞こえた。

葉月
「お、お姉ちゃん……」

幼い声とは葉月ちゃんのことである。

美波
「アンタたち！いい加減葉月を放しなさいよ！」

そう。美波は葉月ちゃんがいるから抵抗が出来なかったのだ。

チンピラ
「お姉ちゃん、だってさ！かっわいぃー！」

チンピラ
「ギャはははは！」

吐き気がする声で笑うクズども。人数は十人。

康太
「……灰皿をお取り替え致します」

とそこで店員に扮した康太が入って来た。やっぱり来てくれた。
となると雄二たちはこの外で待機してるかもしれない。

チンピラ

「だったら俺はコッチの巨乳チャンがいいなー！」

チンピラ
「あっ！ズリー！それなら俺二番ね！」

チンピラが虫酸が走る声で笑う。

瑞希
「あ、あのっ！葉月ちゃんを放して、私たちを帰らせて下さい！」

チンピラ
「だってさ～。どうする？」

チンピラ
「それはオネーチャンたちの頑張り次第だよな？」

瑞希
「やっ！さ、触らないで――」

美波
「ちょっと、やめなさいよ！」

チンピラ
「あーもう。うっせぇ女だな！」

美波
「きゃぁっ！」

ドン、と美波が突き飛ばされ、ガシャァァンと色々巻き込んで倒れた音が響く。

風太
「美波！大じょうーー」

明久
「おじゃましまーす！」

俺の言葉をかき消して明久が入って来た。

瑞希
「よ、吉井君？」

美波
「アキ……」

瑞希と美波は突然の出来事に驚いていた。

チンピラ
「ハァ？お前誰よ？」

明久
「それでは、失礼して……死にくされやぁぁっ！」

チンピラ
「ほごあぁぁぁっ！」

明久は近くのチンピラの股間を蹴りあげて一人倒した。

チンピラ
「てっ、てめぇ！ヤスオに何しやがる！」

明久
「イィッシャァァーー！」

チンピラ
「ごぶぁぁっ！」

明久は殴られてもハイキックでお返ししていた。

明久
「テメェら、よくも美波に手をあげてくれたな！全員ブチ殺してやる！」

バカ久の奴……頭に血が上ってるじゃん。
あいつがあの状態だし、そろそろ動くかな。

雄二
「やれやれ……この阿呆が。少しは頭を使って行動しろって――のっ！」

チンピラ
「げぶっ！」

風太
「ホントにね」

チンピラ
「がああっ！」

雄二は壁に叩きつけ、俺は瞬時に別の男の後ろに回り込み蹴り飛ば

した。
それにしても下に短パン穿いてて良かった。

片雲
「お前は昔からそうだよ――なっ！と」

チンピラ
「ぐふぅっ！」

殴り飛ばす片雲。

明久
「雄二っ！みんな！」

雄二
「貸しイチ、だからな？」

そう言いながら他のチンピラどもに拳を叩き込む雄二。

俺も武器を使わずに倒していく。

チンピラ
「で、出たぞ！坂本だ！」

チンピラ
「坂本まで来ていたのか！」

チンピラ
「他の奴も強いぞ！」

雄二を見て浮き足立つチンピラども。これならば……

チンピラ
「坂本よぉ。このお嬢ちゃんがどうなってもいいのかァ？」

向こうの一人が葉月ちゃんを羽交い締めにした。
……もう俺が無くなってもいいかもしれない。

チンピラ
「いいか？おとなしくしていろよ？さもないと、ヒデェ傷を――」

康太・風太
「「……負うのはお前［だ］」」

ゴインッ、ドゴォッ！

チンピラ
「あがぁっ！」

鼻血を噴き、白目を剥いて倒れる外道。

その後ろにはクリスタルの灰皿を振りきった姿で立っている一人の小柄な男。

そしてその前には顔面に強烈な殴りをかました俺。

バイトのフリをして先に侵入してた康太と、素早い動きでチンピラの前に移動した俺。

葉月

「お、お姉ちゃん！お姉ちゃーん！」

美波
「葉月っ！良かった……。怖かったよね……？」

解放された葉月ちゃんを見ないが抱き締める。感動の再会だなぁ。

瑞希
「吉井君っ！」

瑞希が腕を広げて明久に駆け寄る。

明久
「姫路さんっ！」

明久も腕を広げて構える。そして、

チンピラ
「吉井ぃ！ヤスオをよくも！」

明久
「ぐぶぁっ！」

ドンっと来たチンピラの拳。

明久
「……！！」

チンピラ
「な、なんだコイツ？血の涙流してるぞ……？」

そろそろやるか。

風太
「……全ての天気を集めた人格――」

俺は静かに唱える。

風太
「――その名も全天（ゼンテン）」

俺は軽く跳び、

風太
「化合」

着地と同時に俺は替わる。

全天
「……お前ら……覚悟はできてるんだろうな？（ニヤっ）」

チンピラ
「なんだこいつ!?髪の色が変わったぞ!?」

俺の髪の色は黒。
まずはこいつからか。

全天

「……フッ！！」

ドゴゴゴゴゴゴッッッ！

チンピラ
「あっがっ……」

バタリと倒れる。
俺は今の一息で七発拳を打ち込んだ。

雄二
「くはははは！それにしても丁度良いストレス発散の相手ができたな！生まれてきたことを後悔させてやるぜぇぇっ！」

チンピラ
「こ、これが坂本か……！」

チンピラ
「悪鬼羅刹の噂は本当だったか……」

何があったかは知らんが今の雄二とやるとはバカな奴らだ。

全天
「とにかく――全員死にやがれ」

俺はこいつらをぶっ殺した。（ホントは十分の七殺し）

誘拐騒ぎが解決して、喫茶店の一日目も終了したFクラスの教室。
そこでは俺と明久と雄二と片雲の貸しきり状態となっていた。

風太
「片雲。今日は送ってくれない？」

片雲
「はぁ……お前はなんであそこで使うんだ」

風太
「俺が俺でなくてもいいと思ったから」

片雲
「……」

片雲はそれ以上聞いてこなかった。

雄二
「明久、風太、片雲。そろそろ来る時間だぞ」

雄二はテーブルでお茶を飲んでいる俺達に言う。

明久
「？来るって、誰が？」

雄二
「ババァだ」

風太・片雲
「「ババァ？」」

明久
「学園長がわざわざここに来るの？」

雄二
「俺が呼び出した。さっき廊下で会った時に『話を聞かせろ』ってな」

明久
「話ねぇ……。ダメだよ雄二。一応相手は目上の人なんだから、用事があるならこっちから行かないと」

雄二
「用事もクソもあるか……この一連の妨害はあのババァに原因があるはずだからな。事情を説明させねぇと気が済まねぇんだよ」

明久
「ババァに原因が――えぇぇっ！？」

風太
「……それ本当？」

雄二が頷く。

片雲
「とにかく話を聞かせてくれ」

俺達は雄二と明久に学園長室であったという話を聞いた。

風太

「なら、大体何でか分かるね」

片雲
「だな」

俺と片雲は納得した。

明久
「あ、あのババァ！僕らに何か隠してたのか！」

確かにそのせいで瑞希たちが危険な目に遭ったからね。文句を言いたい気持ちはわかるよ。

？？？
「……やれやれ。わざわざ来てやったのに、随分とご挨拶だねぇ、ガキどもが」

声と同時に扉が開いて、クソババァもとい、学園長が入って来た。

雄二
「来たかババァ」

風太
「以外に早かったですね」

明久
「出たな諸悪の根源め！」

片雲
「この妖怪が全ての元凶か」

学園長
「おやおや、いつの間にかアタシが黒幕扱いされてないかい？それに二人も増えていないかい？」

ババァは寧ろ私は被害者ですといった風に肩を竦める。

風太
「問題ないでしょう？俺らも被害者ですよ？」

雄二
「それに、黒幕ではないだろうが、俺たちに話すべきことを話していないのは充分な裏切りだと思うがな」

片雲
「例えば、本当に回収したいものとかな」

学園長
「ふむ……やれやれ。賢しいヤツだとは思っていたけど、まさかアタシの考えに気がつくとは思わなかったよ」

雄二
「最初に取引を持ちかけられた時からおかしいとは思っていたんだ。あの話だったら、何も俺たちに頼む必要はない。もっと高得点を叩き出すことのできる優勝候補を使えばいいからな」

明久
「あ、そういえばそうだよね。優勝者に後から事情を話して譲ってもらうとかの手段も取れたはずだし」

雄二
「そうだ。わざわざ俺たちを擁立するなんて、効率が悪すぎる」

確かに。FクラスよりもAクラスのほうがいいのに。

パキンッ、

突然俺の頭の中でそんな音が聞こえた。

風太
「……ぐっ……！」

片雲
「無理をするからだ」

倒れそうになる俺の体を片雲が受け止める。

明久
「風太！？大丈夫！？」

片雲
「大丈夫だ。今回はこいつが悪い」

雄二
「そうか。ならお前らは帰れ」

片雲
「サンキュ」

俺はそこで意識が途切れた。

風太
「……ん……ここ…は……？」

そこは真っ暗な世界だった。
そこに俺は一人で立っていた。

風太
「誰か居ないのか？」

とにかく問いかけてみる。

だけど、当たり前の如く「なにが当たり前だ？」……この声は……？

？？？
「よう」

目の前に誰かいた。全身くろづくめで。

風太
「お前は誰だ？」

？？？
「誰？う～んお前」

そいつが俺を指して言う。

風太
「……俺？」

？？？

「と言っても分かりにくいからな。そうだな……狂太（キョウタ）でどうだ？」

風太
「狂太か。で、何の用？」

狂太
「用？それなら手っ取り早く、お前の体をもらいに来た」

風太
「は？」

俺は一瞬言葉を失った。

俺の体をもらう？どうやって？

狂太
「そのまんまだよ」

風太
「……俺がああ言ったからなの？」

狂太
「そうだけど？」

風太

「ふ～ん。だけど、この体をやるわけにはいかないよ」

狂太
「ふざけるなよ？」

狂太がキレた。

風太
「あれは……俺の覚悟だ！」

狂太
「な……」

動きが止まった。

風太
「見たところ悪霊のようだね」

狂太
「……チッ」

舌打ちをしたあたり正解と受け取って問題ないのだろう。
それに体をもらうことは可能だし。

風太
「この体はあげないよ」

狂太
「……わかったよ。もうお前には手を出さない。これでいいだろ？」

風太
「うん。じゃあね」

狂太
「ハッ！」

狂太のこの言葉で周りが光り――

風太
「……ん……家か……」

いつもの家に俺はいた。

続く

第六問（後書き）

最後の部分なんでしょうかね……俺は文才が無いんですかね？下手くそにもほどがあると思います。ですが、僕は続けます！これからも僕の駄文を読んでください！

最終問題

風太
「動けない……」

片雲
「だから言っただろ」

今俺は昨日無理をしたせいで動けなくなっている。
なので、今は部屋で寝ている。

風太
「大会は何時から？」

片雲
「一時くらいじゃないか？」

今の時間は十二時。つまり昼。

風太
「片雲。学校に――」

片雲
「断る」

風太
「早くない！？もうちょっと話聞こうよ！？」

即答!?酷い!

片雲
「――と言ってもお前は行きたがるだろ?」

風太
「へ?」

意外だった。いつもだったら面倒くさがって言うこと聞かないのに。

片雲
「んじゃ、行くぞ」

片雲がしゃがむ。

風太
「おう!」

動かない体を無理やり動かし、片雲の背中に乗る。

俺が乗ったのを確認すると、

片雲
「飛ばすぞ!」

風太
「え?ちょっ……!やめてえええええぇぇぇぇ!!!!」

俺はもの凄く揺さぶられて吐き気が凄かった。

明久
『さてと。行こうか雄二』

雄二
『そうだな。島田、俺たちは抜けるが大丈夫か？』

美波
『大丈夫じゃなくても行かないとダメでしょうが。決勝戦なんだからね』

そんな会話が聞こえてきた。

瑞希
「後で私たちも応援に行きますね」

風太
「俺達も行くよ！」

バンッ！！と思いっきり、

片雲
「ハァ、ハァ、ハァ……」

片雲が扉をあける。

「「「……」」」

全員が静かになる。そんなに俺はいちゃだめなの？

明久
「風太！もういいの！？」

雄二
「もう来ないと思ったぞ」

明久と雄二が寄ってくる。昨日の出来事を知っている二人だからだろう。

風太
「うん。全然大丈夫」

明久
「……全然そうには見えないけど」

明久にツッコまれる。

風太
「とにかく。絶対勝ってよ？」

秀吉
「そうじゃぞ。ここまで来たんじゃ。抜かるでないぞ？」

康太
「……優勝」

明久
「わかってる。試召戦争の時みたいなヘマはしないよ」

俺たちが突き出した手に拳を軽くあて、明久と雄二は会場に向かって歩いて行った。

風太
「皆！明久たちが頑張ってるんだ！気合入れて働けよ！」

『おおーーーっ！』

俺の号令と同時に、全員それぞれの持ち場に戻った。

ちなみに言うと、俺は動けなかったので客寄せだけやっていた。

～一時間後～

風太
「わぁ……すごい」

俺は店の前で客寄せしていたけど、そろそろ決勝戦が終わった頃と思ったら段々客が増えてきた。

風太
「皆！ラストスパートだよ！これからも客は増える！だから気を抜

いちゃ駄目だよ！抜いてる奴は即座に絞めるから！」

『おおーーーーっ！』

『ただいまの時刻をもって、清涼際の一般公開を終了しました。各生徒は速やかに撤収作業を行ってください』

明久
「お、終わった……」

秀吉
「さすがに疲れたのう……」

康太
「……（コクコク）」

風太
「お疲れ」

片雲
「お前はもうちょっと働けや」

風太
「あて」

ベシッ！とチョップを喰らう。

放送を聞いた瞬間皆の足から力が抜けていったように見えた。外から見てたけどすごかった。客をさばきまくり、厨房では材料が足りなくなったりしていた。

ちなみに俺は歩くことは可能になった。

明久
「そう言えば、姫路さんのお父さんはどうしたんだろう？」

雄二
「ん？お義父さんが気になるのか？」

片雲
「探してきたらどうだ？未来のお義父さんを」

明久
「なっ！？べ、べつにそういうわけじゃなくて！」

珍しく片雲が明久を弄っていた。

秀吉
「後夜祭の後で話をしに行くと言っておったのう。結論はその時じゃな」

それならまだ分からないのか。

美波

「じゃ、ウチらは着替えてくるわ」

明久
「えぇっ!?どうして!?」

美波
「どうして、って言われても……恥ずかしいからに決まってるでしょ？」

瑞希
「すみません。すぐ戻りますので」

明久
「待って!二人とも考え直すんだ!カムバァーック!」

明久の必死の説得も虚しく、瑞希たちは着替えに行った。

ちなみに葉月ちゃんはそのままの格好で帰った。末恐ろしい子だ。

秀吉
「ふむ。ならばワシも――」

明久
「させるかっ!せめて秀吉だけは着替えさせない!」

秀吉
「なっ!?何をするのじゃ明久!」

康太
「……（フルフル）」

明久と康太が秀吉の足に抱きつく。そんなに着替えて欲しくないんだ。

雄二
「おい明久。遊んでないで学園長室に行くぞ」

疲れを感じさせない様子で雄二が言う。雄二は本当にデタラメな体力をしてるね。

秀吉
「学園長室じゃと？二人とも学園長に何か用でもあるのか？」

雄二
「ちょっとした取引の精算だ。喫茶店が忙しくて行けなかったからな。遅くなったが今から行こうと思う」

風太
「それじゃあ、行こう」

秀吉
「ならばその間にワシは着替えを」

明久
「そうはいかない！秀吉も一緒に連れて行く！」

康太
「……（クイクイ）」

明久

「あ、ムッツリーニも来る？」

康太
「……（コクコク）」

往生際が悪いなぁ……

秀吉
「困ったのう。雄二、風太、片雲、なんとか言ってやってくれんか？」

雄二
「ん～……。ま、いいだろ。秀吉とムッツリーニも行こうぜ」

風太
「無理だよ。ここまで来たら」

片雲
「諦めろ、ヨッシー」

秀吉
「やれやれ。三人まで……。仕方ないのう。着替えは後回しじゃ」

雄二
「よし。ほら明久にムッツリーニ、足を放してやれ」

明久
「うん」

康太

「……（コクリ）」

秀吉
「やれやれ。ワシのこんな姿を見てもなんの足しにもならんじゃろうに……」

全然なると思うよ。少なくとも俺はそう思う。

明久
「失礼しまーす」

雄二
「邪魔するぞ」

ノックと挨拶をして学園長室に足を踏み入れる。

秀吉
「お主ら、まったく敬意を払っておらん気がするのじゃが……」

明久
「そう？きちんとノックをして挨拶したけど？」

ちゃんと挨拶している分、明久の方がマシかな。

学園長
「アタシは前に返事を待つようにいったはずだがねぇ」

明久
「あ、学園長。優勝の報告に来ました」

学園長
「言われなくてもわかっているよ。アンタたちに賞状を渡したのは誰だと思っているんだい？」

相変わらずうるさいババァだなぁ。

学園長
「それにしても、随分と仲間を連れてきたもんだねぇ」

ババァは秀吉と康太を見て咎めるように言い捨てる。文句でもあるの？

雄二
「こいつらもババァのせいで迷惑を被ったからな」

片雲
「元凶の顔を見ても構わないだろう？」

学園長
「……ふん、そうかい。そいつは悪かったね」

つまらなさそうに鼻を鳴らす。ホントいちいち癇に障るなぁこのババァ。

明久
「それで、白金の腕輪は返却した方がいいですか？」

学園長
「いや、それは後でいいさね。どうせすぐに不具合は直せないんだ」

秀吉
「む？明久、不具合とはなんじゃ？」

明久
「あ、そっか。秀吉は知らなかったんだね。この白金の腕輪はちょっと欠陥品でね、得点の高い人が使うと暴走しちゃうんだよ」

秀吉
「そうじゃったのか。……む？どうしたのじゃ雄二」

ドアの外には人の気配。
……盗み聞きね。

明久
「だから、教室の改修と交換条件で僕と雄二がこれをゲットするっていう取引を学園長と――」

雄二
「待て明久！その話はマズい！」

明久
「え？」

雄二が怒鳴って明久を止める。

康太
「……盗聴の気配」

風太
「間に合え！」

バンッ！

康太の言葉の直後に俺は撃つ。しかし、既にそこには誰もいない。

片雲
「やっぱりか……行くぞ！」

雄二
「あいつらか……！追うぞ明久！」

明久
「ちょっ……雄二、片雲、どういうこと！？」

雄二
「盗聴だ！あの連中、この部屋に盗聴器を仕掛けてやがったんだ！」

明久
「なんだって！？」

風太
「皆先行って！俺は後から追う！」

雄二
「分かった！絶対来いよ！」

風太

「分かってる！」

皆行ってしまった。

学園長

「あんたは分かってるのかい？」

ババァが聞いてくる。

俺はポケットから『風紀』と書かれた腕章を取り出し左腕に付けた。

？？？

「……愚問だな」

俺の名は『孤雲（コグモ）』。

孤雲

「俺を誰だと思っている」

コツ……コツ……

俺は階段を上る。もちろん急いではいない。

孤雲

「……」

あらかた目星がついている。

俺はドアの前に立ち、

孤雲
「……！」

ドバンッ！！

ドアを蹴ってあける。

常村
「な！？だ、誰だ！」

孤雲
「……」

夏川
「おい、テメェ……なにしに来やがった！」

常夏コンビ発見。

常村
「ハっ！怖くて動けねぇのか！」

夏川
「だったら早く流しちまおうぜ！」

坊主が機械を操作しに行く。

孤雲
「……フッ！」

バキッ！

夏川
「なに！？」

孤雲
「……ハッ！」

ドゴゥ！

夏川
「がぁぁ！」

一息で坊主に近づいてから、そいつが持っていた録音機を破壊し、そしてそのまま殴り飛ばした。……トンファーで。

今の俺の格好は、いつもの制服に左腕には腕章、両手にはトンファーといった、俺の知り合いの元風紀委員長みたいになっている。

常村
「夏川！……テメェ……！」

モヒカンが睨みつけてくる。

孤雲
「……フッ！」

ボゴッ！

常村
「ぐはっ！」

とりあえず殴って黙らせておいた。

はずだったが、

夏川
「いててて……」

常村
「お前……ふざけるなよ？」

そんな簡単には気絶してくれないようだ。頑丈な奴らだ。

孤雲
「……面倒だな……」

俺はトンファーをしまう。

常村
「おい、どうした？」

夏川
「怖気着いたのか？」

案の定常夏コンビは挑発してきた。

孤雲
「……あんたらそこに居ると危険だぜ？」

常村・夏川
「「……はぁ？」」

俺は屋上から校舎に戻る。

四階に降りたところで、

ヒュ～……ドォン！ガラガラガラ……

何かが飛んできて爆発した音がする。
おおかた明久達の仕業だろう。

俺は腕章を外した。

風太
「打ち上げ行くかな」

俺に戻り、打ち上げの場所に行こうとして――やめた。

風太
「……やばい、アヤのこと忘れてた」

俺はすぐに携帯を取り出してアヤに電話をかけた。
数回のコール音のあとに、

綾子
『……今さら何の用？』

もの凄く不機嫌な声でアヤが出た。

風太
「ごめん。昨日、お前のとこに行けなくて」

綾子
『それだけ？』

風太
「いや、それだけじゃない。昨日お前に似た奴がいたんだ。そいつは『楓子（フウコ）よ』……誰？」

綾子
『私の人格』

風太
「あ、そうなんだ。ありがとう、それが聞きたかったんだ」

綾子
『……』

ブツッ
切られた。

風太
「あぁ～、やめた」
俺はやっぱり帰ることにした。
続く

最終問題（後書き）

楓子……出番ほとんど無しって……

番外　「雄二と霧島と如月ハイランド」

清涼際から数日後の休み。

ｐｒｒｒｒ！ｐｒｒｒｒ！

俺の携帯によって起こされる。

風太
「ん……誰だろ……？」

携帯を確認してみると電話だった。相手は――

風太
「雄二……か……ならいいや」

――雄二が相手なのでほっとくことにした。

ｐｒｒｒｒ！ｐｒｒｒｒ！ｐｒｒｒｒ！ｐｒｒｒｒ！ｐｒｒｒｒ！

未だに鳴り響く俺の携帯。

風太
「もしもし？なにさ雄――」

雄二
『お前今日暇だよな！？そうだよな！？よし、風太！十時に俺のう

ちに来い！絶対だからな！来なかったらどうなるかわかるよな！』

ブツッ、と切られる。

今の時間は９時２０分。

風太
「しょうがないなぁ……今日はもともと優子と俺の家で遊ぶ予定だったし。この際だから一緒に行くかな」

そろそろ優子がくる頃だし着替えて金を持って、少しだけキメてみる。

ピンポーン！

俺の家のインターホンが鳴る。優子が来たのかな。

風太
「ハイハーイ、今行きまーす」

ガチャッ、と開けて――

風太
「いらっしゃーい、来てもう帰れ」

――バタンッ、と閉める。

片雲

『なんだよ!?おい!?』

バンッバンッ!とドアが叩かれる。

そう、ドアの前にいたのは片雲で、優子じゃなかったのだ。

風太
「何しにきたの?」

片雲
『お前の邪魔を』

風太
「なんの」

片雲
『未来の幸せ』

風太
「帰れ」

なんで俺の周りには歪んだ奴しか居ないんだろ。

片雲
『ん?あぁ。よっ、お前も風太に用か?』

優子
『ええ、そうだけど……どうかしたの?』

片雲が優子に会ったようだ。

ガチャ

風太
「いらっしゃい、と言いたいけど、さっき雄二に呼ばれたんだ……一緒に来る？」

優子
「え？別にいいわよ、そのくらい」

これで優子からの承諾を得たし、そろそろ向かうかな。時間もちょうどいいし。

風太
「それじゃあ片雲も……ってどこに行ったの？」

周りを見ると片雲の姿が見当たらない。帰ったのだろうか。

隣にいる優子もわからなかったようだ。

風太
「う～ん、いいか。それじゃ雄二の家にって呼ばれてるから行こうか」

優子
「うん」

俺たちは特に気にしないで雄二の家に向かう。

片雲
「……まずいことになったな」

そんな声も聞こえないで。

～雄二宅に到着～

風太
「……」

優子
「……代表？」

俺たちが着いたら雄二が霧島に関節技かけられてた。

風太
「なんのプレイ？」

雄二
「お前はそこに行き着くのか！？」

だって俺だって健全な男子だし。

翔子
「……それよりも早く行こ？」

風太
「そうだよ雄二。霧島がここまで行きたがってるんだから」

雄二
「……仕方ねぇな」

珍しい。雄二がデレた。明日は槍が降るかな？

風太
「それじゃあ、レッツゴー！」

俺たちはダブルデートということで如月ハイランドに向かった。

このあと雄二に降りかかる地獄の一部に巻き込まれると知らないで。

～片雲視点～

片雲
「みんな。さっきも言った通り、風太が雄二と合流した。だが、作戦に狂いはない。このまま作戦は続ける！行くぞ！ミッション・スタート！」

『おおーー！』

片雲
「さて、そろそろ行くか」

俺は変装をした。もちろん、バレないようにだ。

服はここのスタッフの服。

髪はスプレーで黒染めした。もちろん、すぐに色が落ちるやつだ。

最後に俺に全く似合わないド派手なメガネをかける。これで俺の変装は終わり。

お、来た来た。

片雲
「いらっしゃいませー！如月ハイランドへようこそ！」

意外に緊張するんだな。このセリフ。

～風太視点～

？？？

「いらっしゃいませー！如月ハイランドへようこそ！」

……どこかで見たことがある気がする。この店員。

スタッフ？
「本日はプレオープンですが、チケッ――」

風太
「メガネを取り……ます！！」

シュバッ！

俺はスタッフ（仮）からメガネを取ると思った通り俺の良く知る隣人の顔があった。

雄二
「なっ！？お前いたのか！？」

翔子
「……バイト？」

優子
「……朝、会ったよね？」

風太
「どういうことかな？片雲君」

片雲
「……チッ」

片雲は部が悪そうに舌打ちした。

～片雲視点～

風太
「どういうことかな？片雲君」

片雲
「……チッ」

俺は舌打ちをした。風太が俺の変装を見破ったからだ。
俺は四人から背を向けて携帯で本部に連絡した。

片雲
「――俺だ。例の連中だ。ウェディングシフトの用意をしろ。残念だが、俺はバレた。なに、心配するな。確実に仕留めるんだ」

風太・雄二
「「おいコラ。なんだその不穏当な会話は」」

チッ……二人には聞こえたか。

片雲
「すいません。とりあえず、そのチケットは特別ｖｅｒ．ということでよろしいですね？」

雄二
「そうだが、そのウェディングシフトとやらは必要ないぞ。入場だけさせてくれたらあとは放っておいてくれていい」

やはりというべきか雄二は勘づいてやがった。

片雲
「そんなこと言わずにお世話をさせてください。とっても豪華なおもてなしをさせていただきます」

雄二
「不要だ」

片雲
「そこをなんとか」

雄二
「ダメだ」

片雲
「このとおりです」

雄二
「却下だ」

片雲
「……断ればテメェの実家に腐ったザリガニを送りつけるぞ」

雄二
「やめろっ！そんなことをされたら我が家は食中毒で大変なことになってしまう！」

俺の脅迫に雄二が焦る。事前に調べといて正解だったな。

……それにしてもなぜザリガニ？

片雲
「では、まず最初に記念写真を撮らせていただきます」

雄二
「……記念写真？」

片雲
「はい。最高にお似合いなお二人のラブラブな写真をお渡ししますよ」

翔子
「……雄二と、お似合い……（ポッ）」

お似合いという言葉に顔を赤らめる霧島。
というか本当にお似合いな気がする。

片雲
「では、カメラをご用意いたします」

俺がパチンッと指を鳴らすと、

明久
「お待たせしました。カメラです」

と、明久が来た。

……スタッフの服に帽子を被るだけとは、バレたら即死というのを

知らないのか？

雄二
「悪いがちょっと電話をさせてくれ」

と、雄二が電話を取り出してかけ始める。

Ｐｒｒｒｒ　Ｐｒｒｒ

明久
「ああ、すいません。僕の携帯ですね」

……あとで死んでもらおうか。明久君。

雄二
「……いよう明久。テメェ、面白いことしてるじゃねぇか……！」

明久
「人違いですっ」

ダッ！

雄二
「あっコラ！逃げるなテメェ！えぇいっ、放してくれ！」

片雲
「彼はここのスタッフで、エリザベート・ハナコ（三十五歳）通称スティーブです！吉井ナントカじゃありません！」

雄二

「黙れ！人種性別年齢氏名全てに堂々と嘘をつくな！しかもどう考えてもその名前で通称スティーブはないだろ！ついでに俺は吉井なんて苗字は一言も言っていない！」

なんとか雄二を引き留める、その間に明久は逃げ切った。

かと思いきや……

雄二
「まぁいい。風太が代わりに行ったからな」

片雲
「は？」

周りを見ると確かにあのバカップルがいない。

俺は再度携帯を取り出し連絡を取る。

綾子
『どうしたの？』

片雲
「風太が明久のほうに向かった。至急、風太を止めるんだ！」

綾子
『ラジャー！』

ブツッ、と携帯を切る。

片雲

「はぁ…ったく……それでは、写真を撮らさせていただきます」

とりあえず俺はこちらを進めることにした。

～風太視点～

風太
「明久～？早く捕まろうか？」

明久
「嫌だ！僕はまだ死にたくない！」

優子
「……」

俺たちは今いろいろなところを走っています。なぜかって？それはさっきのやり取りを見てください。

それにしても……

風太
「優子よくそんなに走れるよね」

優子
「ええ。最近は秀吉と走ってるから前よりはね」

優子も頑張ってるんだなぁ……

そんなことを話していても明久との差は縮まらない。

風太

「しょうがないなぁ……」

俺は懐から愛刀『天斬斬鉄（アマキリザンテツ）』を取り出すと同時に眼帯をして嵐士に替わった。

嵐士

「明久！逃げるんじゃねぇぞ！天斬流奥義嵐之式（テンザンリュウオウギアラシノシキ）――固める嵐！」

ヒュン……ゴォォォォオオオオ！！！！

明久

「え！？なにこの音！？風！？イタタタタ！！なにこれ動けないんだけど！？」

俺が斬鉄を振ると嵐が発生して、明久の動きを封じた。

嵐士

「で？明久。お前はなんでここに居るんだ？」

明久

「とりあえずその刀を下ろそうか。僕は逃げないから」

仕方がないので俺は斬鉄を下ろした。

嵐士
「で？なんでだ？」

明久
「それは雄二をその気にさせるためだよ」

……それはまた大変そうで。

優子
「はぁ、はぁ、はぁ……さ、坂本君を？」

流石に疲れるよな。

明久
「うん。雄二が素直にならないから僕たちが気を利かせて――」

嵐士
「明久。一つだけ言っておこう。お前は人のことが言えるのか？」

俺は我が愛銃を取り出し明久に向ける。

明久
「え！？な、なんでさ！僕はただ二人を思って……」

嵐士
「思ってやればいいのか。だったら俺はお前の好きな姫路じゃなく美波を応援させてもらう。もちろん、お前の悪いところ、嘘だろうとなんだろうと姫路に話すぞ。それでいいのか？俺は美波を思って

協力しているんだ。文句は言えないだろう？」

明久
「ぐっ……そんなのいいわけがないじゃないか」

嵐士
「だったら少しはほっとけ。あいつらに協力するならあまりやりすぎたことはするな」

これで分かるはずが無いのはわかってるが一応言っておく。

嵐士
「それじゃ、行きますか」

優子
「そうね」

明久
「ごめん……嵐士……」

明久が謝ってきた。

嵐士
「違うだろ明久。それは雄二に、だろ」

そう言って俺たちは雄二たちがいるだろう場所に戻った。

風太
「あ、いたいた。おーい！雄二！霧島！秀吉！」

俺たちはそろそろお昼ということもあったので大きな建物に向かった。
そしたら見事に雄二たち＋秀吉がいた。

だというのに

秀吉
「誠に申し訳ありません。こちらはプレオープンチケットがお持ちになられないとお入りになれない場所となっております。チケットはお持ちでしょうか？」

……あ

風太
「昼は別の場所で食べようか」

優子
「そうね。そうしましょ」

俺たちは背を向ける。

風太

「そういうわけだから雄二、ごゆっくり」

雄二
「あ、おい！風太！」

俺たちは雄二たちから離れていく。

風太
「優子、昼どうする？」

優子
「うん。だけどもういいんじゃない？アタシ疲れちゃったから」

確かに今日は疲れた。さすがの俺でも疲れた。

風太
「じゃあ俺の家に来る？」

優子
「元々そのつもりだけど？」

優子は俺の家に来るようだ。

まぁ、それもそうかな。もとは俺の家で遊ぶ予定だったし。

風太
「じゃあ、帰ろっか」

～片雲視点～

雄二と翔子が食事を終えたのを見計らって、俺はマイクを手にする。

片雲
《皆さま、本日は如月ハイランドのプレオープンイベントにご参加頂き、誠にありがとうございます！》

マイクで喋る俺の声が会場に響く。

片雲
《なんと、本日ですが、この会場に結婚を前提としてお付き合いを始めようとしている高校生のカップルがいらしているのです！》

あ、雄二の鼻から飲んだ水が逆流している。

片雲
《そこで、当如月グループとしてはお二人を応援するためのも催しを企画させていただきました！題して、【如月ハイランドウェディング体験】プレゼントクイズ～！》

俺が言い終わると同時に出入り口が封鎖される。雄二に逃げられる

と面倒だからな。

片雲

《本企画の内容は至ってシンプル。こちらの出題するクイズに答えて頂き、見事五問正解したら弊社が提供する最高級のウェディングプランを体験していただけるというものです！もちろんご本人様の希望によってはそのまま入籍ということでも問題ありませんが！》

何も問題はない。何もな……

片雲

《それでは、坂本雄二さん&翔子さん！前方のステージへとお進みください！》

俺は雄二たちを指名した。レストランにいる観客が皆二人に注目する。

そして耳を引っ張られながらステージに上がる雄二と霧島。そしてスタッフに誘導され回答者席へと座った。よし。

片雲

《それでは【如月ハイランドウェディング体験】プレゼントクイズを始めます！》

クイズと言っても答えはなんだっていいわけだが、とりあえずクイズなのだ。

片雲

《では第一問！》

雄二も霧島もやる気満々と言った感じだ。

片雲
《坂本雄二さんと翔子さんの結婚記念日はいつでしょうかっ？》

あれ？まだ結婚してなくない？というツッコミはこの際無視だ。雄二が呆気に取られている間に霧島が、

――ピンポーン！

片雲
《はいっ！答えをどうぞっ！》

翔子
「……毎日が記念日」

雄二
「やめてくれ翔子！恥ずかしさのあまり死んでしまいそうだ！」

片雲
《お見事！正解です！なんて羨ましい結婚生活なんでしょうっ！》

正解を出す俺。なんてラブラブな感じの答えなんだろう。

雄二は俺を睨みつけてきたが無視だ。

片雲
《第二問！お二人の結婚式はどちらで挙げられるのでしょうかっ？》

――ピンポーン

と、雄二が素早くボタンを押す。

雄二
「鯖の味噌煮！」

片雲
《正解です！》

雄二
「なにぃっ！？」

甘いな雄二。お前がわざと答えを間違えるなど予想済みだ。

片雲
《お二人の挙式は当園にある如月グランドホテル・鳳凰の間、別名【鯖の味噌煮】で行われる予定です！》

雄二
「待ていっ！絶対その別名はこの場で命名しただろ！強引にも程があるぞ！」

お前がわざと間違えると言うのなら、無理やりにも正解にしてやるまでだ。

片雲
《第三問！お二人の出会いはどこでしょうか？》

また雄二が素早くボタンを押そうとする。が、

翔子
「……させない」

ブスッ

雄二
「ふおぉぉぉっ!?目が、目がぁっ!」

それより早く雄二の目に突き刺さる霧島の指。そしてその間に霧島がボタンを押した。

――ピンポーン!

片雲
《はい、解答をどうぞ!》

翔子
「……小学校」

片雲
《正解です!お二人は小学校の頃からの長い付き合いで今日の結婚式にまで至るという、なんとも仲睦まじい幼なじみなのです!》

ようやく答えらしい答えが来た気がする。さて、あと二問だ。

片雲

《第四問参ります！》

――ピンポーン！

問題読む前に押しやがったな！？だが、それも予想済みだ！

雄二

「――わかり」

片雲

《正解です！それでは最終問題です！》

何か言う前に正解にしてやったぜ。

さて、最終問題は……

バカ女

「ちょっとおかしくな～い？アタシらも結婚する予定なのに、どうしてコーコーセーだけがトクベツ扱いなワケ～？」

めんどくさい連中だな。

片雲

（明久、風太を呼べ）

俺は裏にいる明久にアイコンタクトを送る。

明久

（風太を？分かった。すぐに呼ぶよ）

そう俺に送って明久は奥に行った。携帯で風太を呼びに行ったのだろう。

スタッフ
『あの、お客様。イベントの最中ですので、どうか――』

バカ男
『あぁっ!?グダグダうるせーんだよ!オレたちゃオキャクサマだぞコルァ!』

俺はとりあえずこのバカどもを止めなきゃいけないな。

～風太視点～

風太
「人使い悪いな!あいつ!」

俺はまた走っている。片雲に早く来いと呼ばれたのだ。

風太
「試作品だけど使ってみるかな?」

俺はグローブをはめて、普通の缶と同じ大きさのボトルを取り出す。

この中には水が入っていて、ボトルは熱が伝わりやすいという水蒸気発生装置である。

俺はそれを最高温度で熱する。

風太
「ここからだと一分かな。レッツ・オープン！」

俺はそれをうしろに向けて蓋を開ける。

カパッ、ドゴォォォオオオオン！！！！

風太
「わぁぁぁあああああああぁぁぁぁぁあああああ！！！！！！！！」

吹っ飛んだ。すごい飛んだ。ジャンプの跳ぶじゃないよ。ｆｌｙの飛ぶだよ。

その威力はコンクリを三メートルも抉るほどの威力だった。

～片雲視点～

片雲
「おめでとうございますっ。ウェディング体験が当たるなんて、お二人は頭が良いのですね！」

翔子

「……凄く嬉しい」

雄二
「お前が司会だったじゃねぇか…」

悪かったと思ってるが、反省はしていない。

ちなみにさっきのバカどもは俺たちに問題を出させろということで問題出させたところ、『ヨーロッパの首都はどこか』という問題を出してきた。これにより会場が固まってしまったので正解にして終わりにした。

雄二
「そういえば翔子。お前の持ってきた鞄は何が入っているんだ?随分と大きいが」

翔子
「……別に、何も……」

片雲
「坂本翔子様、ウェディング体験の準備がありますので、こちらのスタッフに案内をさせますのでよろしくお願いします」

スタッフ
「はじめまして。貴女のドレスのコーディネートを担当させて頂きます。一生の思い出になるようなイベントにする為、お手伝いをさせてください」

と、着つけ役のスタッフさんが挨拶する。

雄二
「ってことは、俺は長い時間待たされるのか？」

片雲
「ご安心ください。坂本雄二様についての対応は俺、いやワタシが直々にしますので」

雄二
「……嫌な予感しかしないんだが」

もうバレてる正体を隠すのも面倒になってきたな。

片雲
「とりあえず坂本雄二さんにはコレを使わせていただきます」

そしてオレは笑顔でスタンガン（二十万ボルト）を取り出す。

片雲
「坂本雄二様は逃亡を考えるだろうから、これで気絶させていただきます」

雄二
「片雲！キサマぁぁぁあっ！」

片雲
「痛みは一瞬だ」

スタンガンを押しあて雄二を気絶させる。

～風太視点～

雄二が気絶しているときに俺はというと――

風太
「わあああああああああ！！！！」

――飛んでいた。

そろそろ到着といったところで先ほどのものと同じものを取り出す。
さっきのは衝撃に耐えられずに壊れてしまった。

俺はそれを前に向けて開けた。

カパッ、ボンッ！

さっきよりは威力は小さくなっている。水を減らせば威力も減ると考えたからだ。

風太
「やった！止まったよ！」

だけど俺は気づいてなかった。

そこが空高い空中だと言うことに。

風太
「あれ？雲がものすごい速さで移動してる。しかも下から……上……に……って、俺落ちてる！？」

今頃気づいた。俺が落下中だということに。

風太
「ちくしょーーーーー！！！！」

俺はさらにもう一本ボトルを取り出す。結局あの威力でも壊れてしまった。

風太
「このスピードに対しての威力は……」

カパッ、と蓋を開ける。そしたら水が中から出てきた。

風太
「これぐらいかな。そろそろ開けなきゃ俺が死んじゃう」

そう言って俺は蓋を閉めてから真下に向け、熱してから蓋を開ける。

カパッ、ボンッ！

スタッ……

以外にも地面スレスレだったようですぐに着地した。

風太
「さてここはどこかな？」

俺は周りを見渡す。どうやらちゃんと着いたらしい。さっき走った場所が見える。

風太
「ん？」

俺がさっきの場所に向かおうとしたところで見覚えのある人が走るのが見えた。

風太
「霧島？どうしたのかな？」

とりあえず、声をかけようとしたところで――気づいた。

霧島が泣いていることに。

風太
「霧島！どうした？」

翔子
「……ほっといて！」

ドンッ！と押される。

風太
「霧島……」

俺はとりあえず会場に向かった。

風太
「ったく……世話がかかるなぁ……」

俺は結局あのあと片雲たちから事情を聞いて雄二を探すことにした。

どうやら、さっきからやたらと突っ掛ってくるチンピラカップルが居た。そいつらが霧島の夢、『雄二と結婚する』という夢を馬鹿にされて霧島がその場から居なくなったそうだ。

だけど俺は霧島に会っている。それはみんなにはまだ言っていない。それが霧島のためになると思ったから。

風太
「それにしても雄二ならあそこに居そうだなぁ」

俺は雄二の行動パターンが分からない。俺と雄二はこの学校で会った仲だから。

それなのに、俺には分かる気がする。理屈なんて無い、ただの俺の勘。

俺は走る。走って走って走った先に雄二を見つけた。他にも変なリーゼントと気持ち悪いギャルの見た目からしてバカなコンビがいた。

風太
「雄二！」

俺は力いっぱいに叫びながら雄二に走り寄る。

雄二
「風太？なんだいきなり、俺はこれから決着をつけるんだ」

雄二の今のご機嫌はナナメのようだ。

風太
「そんなの俺の力で終わりだよ」

雄二
「天斬流の力を使う気か？」

風太
「！なんで雄二が知ってるの！？」

ありえない。この力は俺が独自に作った。さらに、このことは他の

誰にも言ってない。
のに雄二は知っていた。

雄二
「そのことに関してはその内話す」

俺はショックで雄二が喧嘩をするところを見ることしかできなかった。

風太
「雄二」

雄二
「なんだ?」

俺たちは今二人で歩いている。

結局雄二はボロボロになってあのチンピラに勝った。

風太
「片雲から預かっているものがあります。これが君に分かるかな?」

そう言って俺は懐から霧島が持っていた鞄を取り出す。

雄二
「……分かった。それは俺が処理する。サンキューな」

雄二は鞄を受け取る。

――はずだったけど俺がさせなかった。

雄二
「……どういうつもりだ？」

風太
「雄二、もうちょっと素直になったらあげるよ」

雄二
「素直だと？」

風太
「別に？まぁいいや。雄二にもその内話してもらうから」

俺は雄二に鞄を渡す。

雄二
「風太。一つだけ教えてやる」

突然雄二がそんなことを言い始めた。

風太
「なに？」

雄二
「俺とお前は昔会っているぞ」

風太
「……え？」

俺と……雄二が……？

雄二
「じゃあな。俺にはまだすることがあるからな」

雄二がこの場を後にしようとする。

風太
「雄二！絶対に教えてよ！」

俺は雄二の背中に向けて叫ぶ。

それに対して雄二は手を上げるだけの返事をして歩いていった。

風太
「それじゃあ帰るかな」

俺は、雄二とは逆の方向に向かって歩き始めた。

～一方片雲は～

神楽
「なんで私の出番が少ないのかな？」

片雲
「知らねえよ。そんなの作者に聞け」

神楽
「う～ん……今度聞くよ」

片雲
「そうしてろ」

神楽の愚痴を聞いていた。

終わり

番外　「雄二と霧島と如月ハイランド」（後書き）

今回は展開が早いですね。
はい！ここでさらに設定がややこしくなりました。
雄二は昔、風太に会っています。だけど、キャラ設定のときに書きましたが、風太は記憶喪失しています。つまり、雄二とは記憶がなくなる前に会っていた、となります。これ以上はネタばらしの可能性があるので終わりにしたいと思います。
次あげるのは完全オリジナルの短編です！お楽しみに～ノシ

番外？「私とデートと秀吉君」

秀吉
「わ、ワシと一緒に今度の日曜日、映画をみ、見に行って欲しいのじゃ！／／／」

先週末に行われた『坂本君と代表の結婚大作戦』終わった次の週の昼休み。突然優子の弟君が来てそんなことを言った。

心なしか顔が赤いようにも見える。

綾子
「え？別にいいよ？」

とりあえず日曜日は何もなかったので了承する。

秀吉
「ほ、ホントかの！それでは、詳しいことはあとでお主のタイミングで電話をワシの家にかけて欲しいのじゃ／／／」

綾子
「うん。じゃあ、後でね」

秀吉
「う、うむ／／／」

返事をして、弟君は自分のクラスに戻っていった。

……なんか終始顔が赤いように見えたけど……熱でもあったのかな？？？？

「よかったね綾子ちゃん☆」

綾子

「？何が？神楽」

私が神楽と呼んだ少女は、ものすごいかわいそうなモノでも見るような目を私に向けて来た。

神楽

「なにって、今デートに誘われたんだよ？秀吉に」

一瞬、私の中で時が止まった。

綾子

「ええ！？そ、そうだったの！？／／／」

今頃になって顔が熱くなってきた。

神楽

「ねぇ、今まで告白されてきたことは？」

綾子

「え？う～ん、今のところゼロかな」

神楽

「校舎裏などに呼ばれたことは？」

綾子
「数え切れないほど」

神楽
「……」

何だろうこの視線は。ものすごく居た堪れないんだけど……

神楽
「やっぱり鈍感だなぁ……」

綾子
「ええ!?そうだったの!?」

神楽
「気づかない方がすごいよ!?」

とりあえずこんなことがあったけど……どうしよう……日曜日……

その日の放課後。

優子
「秀吉が?そうだったの……」

綾子
「今どうしようかなって」

私は今優子と相談中。なぜなら弟君にデートの誘いを受けたからどうしようかと思って、やっぱり彼氏（風太）持ちのほうがいいと思って話してみた。

ちなみに私の部屋で。優子の家だと弟君に聞かれる危険性があるもの。

優子
「断ることは？」

綾子
「無理。そういう雰囲気じゃなかったよ」

優子
「そうねぇ……」

綾子
「どうしようか……」

黙り込む私たち。

優子
「綾子はさぁ」

綾子
「なに？」

優子
「秀吉のことどう思ってるの？」

綾子
「え！？い、いや別に風太に振られて逆にスッキリしたなぁって思ってたところで弟君に会ったら胸がドキドキして――って私なに言ってるのーーー！？／／／」

優子
「ふ～ん？（ニヤニヤ）」

やばい！自爆したかも！もう優子がニヤニヤしてて嫌だ……

優子
「いつも通りでいいんじゃないんかしら？」

綾子
「へ？」

我ながらなんとも間抜けな声を出したんだろうか。

優子
「とりあえず、アタシに相談されてもここまでしかアドバイスはできないから」

優子が立ち上がる。

それにつられて私も立ち上がる。

綾子
「うん。ありがとう、優子。じゃあまた明日ね」

優子
「ええ、それじゃあね」

そう言って優子は帰っていった。

綾子
「いつも通りか……」

これが一番の問題だと思うな……

日曜日。

デートの場所は初めてということもあって近場になった。

待ち合わせは商店街の噴水、そのあと近くの映画館に行ってそこらへんでぶらぶらするというなんともアバウトなスケジュールだ。

綾子
「早く来ないかな～♪」

私は約束の十分前に来たので少し暇になった。

秀吉
「機関――じゃないのじゃ、アヤよ！」

綾子
「あ、秀吉君！」

やっと弟君が来た。

……。とりあえず『アヤ』って呼ばれたことはなるべくスルーの方向で。

綾子
「それじゃあ行こ？」

秀吉
「うむ」

私たちは最初の目的地、映画館へと向かった。

？？？
「第一段階は成功みたいだね。秀吉」

そんな怪しい視線にも気づかずに。

綾子
「どれ見たい？」

秀吉

「それはお主が決めて良いぞい」

綾子
「ホント？それじゃあ……これにしよ？」

私は一つのポスターを指さす。

秀吉
「恋愛ものかの……うむ。それにするかの」

綾子
「いいの？じゃあ決定だね。チケット買いに行こ」

秀吉
「待つのじゃ。ワシが払うからそこで待っていて欲しいのじゃ」

弟君が私の手を握って、止めてからそんなことを言うから驚いてしまった。

でも顔には出さずに……

綾子
「そうなの？ありがとう♪」

そのあとは映画を見て、お昼になっていたから喫茶店に向かうことになった。

綾子

「……なんでかな。風太がいる気がする」

秀吉
「気のせいじゃろ。姉上は出かけると……すまぬ、その可能性はあるのじゃな……」

駅前の『ラ・ペディス』という喫茶店に入ろうとしたところで弟君から衝撃の情報を伝えられた。……まさかこのタイミングで……？

秀吉
「とりあえず入るかの」

綾子
「そうだね……」

私たち（正確には私）はあの二人がいないことを祈っていた。

そうしてドアを開けてみると……

秀吉
「ん？いないようじゃな」

綾子
「あれ？ホントだ」

以外にも予想は外れていた。

中には前に代表たちと来た時と同じような景色だった。

秀吉

「ほれ、あそこに座るぞい」

綾子
「え？あ、うん」

なにもなかったようなので私たちは窓際に座ることにした。

綾子
「メニューは……これかな？」

私はテーブルの上に置かれているメニューらしきモノを手にとって開いてみると――

綾子
「なに……これ……／／／」

秀吉
「なにが書いておるのじゃ？」

綾子
「だめ！これは見ちゃだめ！店員さーん！メニューくださーい！／／／」

とりあえず見なかったことにしようと思い、店員を呼ぶ。

ウェイトレス
「申し訳ありませんでした、こちらがメニューとなります。どうぞごゆっくり」

そしたら近くにいたウェイトレスさんが持ってきてくれた。……あ

れはダメージがでかいよ……

？？？
「チッ」

綾子
「！？（バッ）」

秀吉
「どうしたのじゃ？」

綾子
「いや、なんでもないよ？」

秀吉
「？」

今一瞬だけど邪気を感じた気がする。

綾子
「それより早く選んで？私もう決めちゃったよ？」

秀吉
「そうじゃったのか、すまぬ。なら、ワシはこれにするかの」

弟君も決めたみたいなので注文するためにさっきのウェイトレスさんを呼ぶ。

ウェイトレス
「はい、ご注文はなんでございますか？」

綾子
「私は――で」

秀吉
「ワシは――で頼むのじゃ」

ウェイトレス
「かしこりました。少々お待ちください」

そうして奥へと歩いて行ってしまった。

綾子
「なんか今日は誰にも会わないね」

秀吉
「そうじゃな。普段なら遭遇してるはずなのじゃがな……」

普段からってすごくない？それはそれで。

綾子
「そうなの？まぁこのほうが――！？伏せて！」

秀吉
「なんじゃ！？」

綾子
「しっ！暴れないで！」

話をしてる時に外に見知った顔が。

あれは……片雲？なんでこんなところに？

秀吉

「うむ、あれは片雲じゃな」

綾子

「だよね。神楽もいないしどうしたんだろ？」

今日の片雲は一人でいる。いつも一緒にいるはずの神楽がいないのは叱られて追い出されたからかな？

そんなことを考えてたら他の顔も見えてきた。

綾子

「次は誰？って、姫路さんと……誰？」

秀吉

「あれは島田のようじゃな」

綾子

「この喫茶店に入ったよ？どうする？」

秀吉

「幸い気づいてないようじゃし、普通にしていれば大丈夫じゃろ」

ウェイトレス

「ご注文の品物です」

綾子
「あ、ありがとうございます」

そんなことを話してたら頼んだモノがきた。

秀吉
「食べるかの」

綾子
「うん。いただきます」

秀吉
「いただきますのじゃ」

食べてる間はほとんど話さなかった。だっておいしいんだもん。

綾子
「次はどこ行こうか？」

秀吉
「お主が決めて良いぞい」

お昼を食べて少し談笑したあと、お店を出て次に行く場所を決めることにした。

綾子

「いや秀吉君が決めていいよ」

秀吉
「そうかの？それでは……あそこにするのじゃ」

弟君が指を指す。その先にはゲームセンターがあった。

綾子
「意外。こういうのには興味なさそうなのに」

秀吉
「明久たちとよく来るからの」

綾子
「それじゃあおすすめを教えてよね」

秀吉
「明久ほどではないがの。任せておくのじゃ」

胸を張る弟君。

綾子
「頼もしいね～♪さぁさ早く行こう！」

秀吉
「うむ。楽しむぞい！」

ゲーセンでは色々なゲームがあってどれをやるか迷って、弟君が教えてくれて、楽しんでるときにまた知り合いが現れた。

綾子
「次はなにを――!?ちょっとこっちに来て!」

秀吉
「今度はなんじゃ!?」

私は弟君を引っ張ってゲーム機の影に隠れる。

秀吉
「また誰かいたのかの?」

綾子
「うん。あそこ」

私は指を指す。
その先にいたのは――

秀吉
「明久と雄二じゃな」

綾子
「一番厄介な気がする……」

秀吉
「そうじゃのう……しかしもうこんな時間じゃ、そろそろ帰るとせんかの?」

綾子
「え?あ、ホントだ。もうこんな時間」

携帯を開いて確認してみると時刻は午後６時４５分。早く帰らなければすぐに暗くなってしまう。

秀吉
「それでは、帰るとするかの」

綾子
「うん、行こう？」

秀吉
「送って行くのじゃ」

綾子
「そう？ありがとう」

こうしてデートは終わりに近づいていく。

帰り道。

今日のことについて私たちは話あっていた。

綾子
「今日は楽しいのか大変なのか分からない日だったね」

秀吉
「そうじゃな……」

どうしたのかな今の弟君は元気がない気がする。

綾子
「あ、もう家だからここまででいいよ。じゃあね、今日は楽しかったよ」

私の家はマンションなので入ろうとしたところで――

秀吉
「待って欲しいのじゃ！／／／／／」

弟君に呼び止められた。ものすごく顔を赤らめて。

綾子
「どうしたの？」

秀吉
「ワシは……そのじゃな……／／／／／」

綾子
「？」

妙に歯切れが悪い弟君。

それから意を決したのか息を大きく吸って

秀吉
「お、お主のことが好きなのじゃ！／／／／／／」

告白（？）をしてきた。

綾子
「？私も好きだけど？」

秀吉
「ホ、ホントかの？／／／／／」

綾子
「うん。今までは友達としてだけど」

秀吉
「ど、どういうことなのじゃ？」

どういうことって言われても。

綾子
「そのままの意味だよ。私も今は秀吉君が好きだよ。一人の女として」

秀吉
「そ、それでは……／／／」

綾子
「うん。これからお願いします」

私は弟君――じゃないや、秀吉君に手を出す。

秀吉
「う、うむ。これからよろしく頼むのじゃ／／／／／」

秀吉君はその手を掴む。

グイッ（私、引っ張られる）

綾子
「え!?ちょっと待っ――ん……」

秀吉
「ん……／／／／／／／」

目の前には秀吉君の顔が。そして口元いや、唇には柔らかい感触が。

これは俗に言うキスってヤツですか？

秀吉
「ぷはっ……これでお主はワシのものじゃ／／／／／／／」

顔を真っ赤にしてそんなことを言う秀吉君。

綾子
「そ、そんなことされなくても……私は秀吉君のものだよ……／／／」

秀吉
「お、お主はなにを言うのじゃ!?／／／／／／」

綾子
「先に言ったのはそっちのくせにー!!／／／／／／」

秀吉

「……クス」

綾子
「……フフ」

秀吉・綾子
「「あはははは!!」」

私たちは笑いあった。今の雰囲気を全部吹っ飛ばす位に。

綾子
「それじゃあ、また明日ね!」

秀吉
「うむ!最後にじゃ……」

綾子
「なに?ひでよ――ん……」

最後にもう一回私たちはキスをした。長く、お互いが引き寄せ合って……

翌日。

神楽
「おめでとー!」

朝、突然神楽がそんなことを言ってきた。

綾子
「なにが？」

当然私はなんのことか分からないので聞いてみる。

神楽
「はい、これ♪」

神楽がなにかを渡してきた。

私はそれを受け取って見ることにした。

綾子
「……えーーーーーーーー！！！！！？？？？」

神楽
「ちょっとうるさい」

なんで！？なんで……昨日の私と秀吉君のキ、キ、キスのシーンが！？

神楽
「これすごいでしょ？これはＦクラスのムッツリーニ君に撮ってもらった写真だよ？」

……ムッツリーニ……？……まさか！！

綾子
「あの人！？よし、今すぐ始末してくる！」

神楽
「え！？今から授業だよ！って行っちゃた」
私は神楽の忠告を無視してFクラスに向かった。

そして一時間後には二つの屍ができたとさ。（その内一つは神楽）

おしまい

番外？　「私とデートと秀吉君」（後書き）

はい、まずは――秀吉。お前は俺の手によって汚れてしまったな。
ごめん。

今回はアヤと秀吉が付き合うまでの話となります。というより主人公ｗｗｗお前今回名前だけでしか出てないじゃんｗｗｗ

ちなみにこの話の中で出てきた謎のメニュー……一体なにが書いてあったのでしょう？そこらへんは読者のご想像に任せます。

それよりも途中で少し出てきた謎の人物。それはみなさん大体分かりますよね？正解は『神楽』です！いやぁ、従弟を心配する従姉…まぁ、他にも理由はありますが。あと、学力強化合宿の話の間は予約掲載にしますので。

それでは今回はこれでノシ

第一問

新学期になって二ヶ月が経過し、日没の時間にはっきりとした変化を感じ始めるこの時期。俺はいつも通り登校した。

風太
「おはよう。って何事？」

俺が教室に入ると明久と美波と秀吉がいた。

明久
「あ、おはよう風太」

美波
「おはよう風太」

秀吉
「おはようじゃ」

風太
「おは～。んじゃ」

俺は三人にあいさつしたあと俺の席？につく。

風太
「寝足りない分……すぅ……」

座るなりすぐに寝る俺はどうかしてると思う。

鉄人
「遅くなってすまないな。強化合宿のしおりのおかげで手間取ってしまった。ＨＲを始めるから席についてくれ」

俺が起きると鉄人こと、西村先生が教卓にいた。

鉄人
「さて、明日から始まる『学力強化合宿』だが、だいたいのことは今配ってる強化合宿のしおりに書いてあるので確認しておくように。まぁ旅行に行くわけではないので、勉強道具と着替えをさえ用意しておけば特に問題はないはずだが」

前の席から冊子が回って来たので、受け取って後ろに回す。

鉄人
「集合の時間と場所だけはくれぐれも間違えないように」

鉄人のドスの利いた声が響く。

こんなイベントに行かない人はどうかしてるかもしれない。ま、とにかく目を通すだけでもやっとくかな。

今回俺たちが向かうのは卯月高原という洒落た避暑地。これだけ覚えれば十分だと思うからこれだけにして寝よ。

鉄人
「特に他のクラスの集合場所と間違えるなよ。クラスごとでそれぞれ違うからな」

寝る寸前のとこで鉄人の声が聞こえる。

鉄人
「いいか、他のクラスと違って我々Ｆクラスは――現地集合だからな」

『『『案内すらないのかよっ！？』』』

風太
「すぅ…すぅ…」

そんな声も聞こえずに俺は寝てしまった。

続く

第二問

風太
「ふぁ……。今どこらへんなの？」

俺は呟く。

俺は寝ていて気付かなかったけど、遠くまできたようだ。ん～、小一時間ってとこかな？

秀吉
「あと二時間くらいはこのままじゃの」

俺の席の前に座る秀吉が時計を見ながら言う。

風太
「そんなに長いんだ……」

何かを遅くまで調べていたらしく、康太は俺とほぼ同時に寝ていた。

明久
『雄二、何か面白いものはない？』

雄二
『鏡がトイレにあったぞ』

明久
『それは僕の顔が面白いと言いたいのかな？』

雄二
『いや、違う。お前の顔は割と――笑えない』

明久
『笑えないほど何!?笑えないほど酷い状態なの!?』

明久はいつもどうり雄二に弄られてる。

風太
「秀吉はなんかない？」

秀吉
「鏡を見てくるといいと思うのじゃ」

風太
「秀吉も!?なに!?そんなに酷いの!?明久より酷いのならいっそ死んでもいいよ!」

明久
「風太も十分酷いからね!?」

まさか秀吉まで言ってくるとは思わなかったよ……

当の本人は俺を見て笑っている。

風太
「まぁいいや。それより、俺が着いても起きなかったら起こして」

秀吉

「うむ。わかったぞい」

そこから俺は寝た。

秀吉
「……じゃ……風太…きるの……」

風太
「……ん……ふぁ……秀吉……？」

秀吉
「やっと起きたようじゃな」

俺が起きると駅に着く前だった。

風太
「もう降りるの？」

秀吉
「うむ」

秀吉が頷く。

その後は電車を降り、バスに乗り換えて合宿所に向かった。

……明久がぐったりしてたけどどうしたんだろう……？

そのまま明久は起きなかった。

明久
「うぅん……」

風太
「明久、起きたんだ。良かったね～（ガスッ！）」

明久
「あだぁあ！」

俺はひとまず雄二から借りた電気ショックマシンをしまい、殴った。
力の限り殴った。

明久
「いたたた……。ところで雄二、ここは合宿所？」

雄二
「ああ、そうだ。まったく贅沢な学校だよな。この旅館、文月学園が買い取って合宿所に作り変えたらしいぞ」

それなら召喚獣を召喚できるかな？

秀吉
「明久、無事じゃったか！良かったのう……。お主がうわ言で前世の罪を懺悔し始めた時には、正直もうダメじゃと……」

部屋に入ってきた秀吉が胸を撫で下ろしていた。本当にあの時は危

なかった。

それから康太が部屋に帰ってきて、明久と雄二の三人と話を始めた。

所々犯人やら火傷やら聞こえてきたけど……。

秀吉

「お主ら、さっきから何の話をしておるのじゃ？」

風太

「俺は興味がないから寝るね」

俺は明久達の話を聞かずに寝た。

――ドバン！

風太

「……（ビクンッ！）

誰かがドアを派手に開けた。その音で俺は跳び起きた。

美波

「全員手を頭の後ろに組んで伏せなさい！」

風太

「なにごと！？」

美波
「木下と風太はこっちへ！そっちのバカ四人は抵抗をやめなさい！」

先頭に立つ美波が、咄嗟に窓から脱出しようとした明久たちの機先を制した。

っていうか四人？えーと……明久、雄二、康太、片雲。

……いたんだ片雲……

雄二
「仰々しくぞろぞろと、一体何の真似だ？」

小山
「よくもまぁ、そんなシラが切れるものね。あなたたちが犯人だってことくらいすぐにわかるというのに」

Cクラス代表の小山が前に出てくる。

風太
「犯人って何のこと？」

小山
「コレのことよ」

小山が明久達の前に何かを突きつけた。あれは……何？

康太
「……ＣＣＤカメラと小型集音マイク」

康太が答える。

小山
「女子風呂の脱衣所に設置されていたの」
なるほど。つまりそれは――
風太
「盗撮ね。よし、犯人を絞める」
明久
「誰がそんなことを。あと風太、それ危ないから」
明久が冷静にツッコミをしてきた。
小山
「とぼけないで。あなたたち以外に誰がこんなことをするっていうの？」
……へぇ……
風太
「ねぇ。その証拠はどこにあるの？」
小山
「こんなバカなことをするのはコイツら以外いないもの」
風太
「それ違うから。証拠の意味と使い方を調べて来てよ」
小山

「っ！あなたも犯人ね！」

意味がわからない。それでもCクラス？

風太
「とにかく。証拠はない。だから、ひとまず様子見にしたら？」

俺は言った。なのにそれでも――

小山
「ちょっと、勝手に仕切らないでくれる！？こんなことをするのはこいつらしか――」

カチャ……

風太
「うるさいよ？まだなにか言うならこのまま撃つから」

小山
「っ……！」

俺はエアーガンで黙らせる。

風太
「はい、皆帰ってー！証拠不十分。これ以上はどうやっても犯人は分からないからね！」

俺がそう言うと皆帰っていった。小山も今回は聞いてくれた。

明久

「ありがとう。風「うるさいよ」……え？」

明久の声を遮るようにかぶせる俺の声。

風太

「みんな分かってるの？」

俺は四人に聞く。……静かに怒りを込めて。

風太

「なんで真っ先に疑われたのか。それは自分たちのせいじゃないの？」

明久・雄二・康太・片雲

「「「「……」」」」

四人は黙りこんでしまった。

それもそのはず。この四人は日ごろの行いが悪い。特に明久と雄二。

この二人は今までに色々な悪さを働いている。そのツケが今来たと言っても過言ではないはず。

風太

「自覚してるんだ。なら、俺は少し離れたところで寝るから」

そう言って俺は部屋を出て階段に向かう。

行先は……女子風呂。

風太
「……先生。来ましたよ」

西村
「そのようだな」

今俺は女子風呂、の前の廊下にいる。……鉄人と共に。

風太
「あ、そう言えば言い忘れてましたけど」

西村
「なんだ？」

風太
「俺召喚獣が召喚できないんですよ」

西村
「……あぁ……そんな話を学園長から聞いてはいたな」

鉄人が困ったという顔をした。

風太
「でも大丈夫ですよ。俺が召喚獣の役割になればいいだけですから」

西村
「……まぁ、いいだろう。それよりもあのバカどもを止めるぞ」

風太
「……（コク）」

俺は頷く。

明久
『まさか、点数操作とか……』

そんな声が聞こえてきた。おそらく、いや、明久だ。

西村
「俺たち教師がそんな卑怯な真似をするか。バカモノが」

鉄人が明久に呆れたように返す。

明久・片雲
「「出たな鉄人！」」

西村
「西村先生と呼べ！」

やはりというかなんというか……向こうから来たのは二人で、明久と片雲だった。

鉄人
「まったく、お前らは知らないだろうが、教師は教師で勉強しているんだぞ？より良い教育者になる為にな」

明久
「あ、そうなんですか。それは大変ですね～」

鉄人

「ああ。教育者というものは大変なんだ」

片雲
「まぁ、がんばってくだせぇ」

鉄人
「何様のつもりだ」

鉄人がキレ気味だ。

明久
「って風太？何してるの？」

片雲
「まさかお前も覗きを――」

風太
「するわけがないでしょ馬鹿野郎」

俺もキレ気味になる。

明久
「そういえば、西村先生はどのくらいの点数を？」

鉄人
「俺はこの前の担任入れ替わりのゴタゴタのせいで試験を受けそびれてな。今は点数がないんだ」

明久
「そうですか。ないに等しい点数ですか。さすが筋肉バカの西村先

生ですね」

片雲
「明久。そこは違うだろう？そういう時は……あ、ゴメン何も浮かばないわ。特長が筋肉バカ以外」

鉄人
「吉井、片雲。念の為血液型を聞いておこう」

あ、死刑宣告されたかもあの二人。

片雲
「それじゃあ、明久！お前は鉄人を頼む！」

明久
「了解！」

風太
「通させないよ」

カチャ……

片雲
「ははは……そんなもので俺を止められるのか？試獣召喚（サモン）！」

片雲の召喚獣が現れる。
片雲のは黒いＴ－シャツに黄色いベストを着ていて、ＦＦのクラウドとティーダを合わせた感じだ。武器は大剣と片手剣の双剣だ。

……こんなにものんびりと説明してるけど、今の俺は本来なら召喚

獣で相手をしなければならない。だけど、さっき言ったように俺は召喚獣が出せない。だから……

俺自身で戦うしかない。

風太
「やれるものならやってみな、ってね」

片雲
「なんだ。召喚しないのか」

風太
「お前が相手だともったいないからね」

片雲
「言ってくれるじゃねぇか……！」

とにかく片雲の気を逸らして挑発するかな。

片雲
「お前、召喚獣使えないんだろ？だったらお前は力を失ったに等しいじゃねぇか！」

風太
「……。哀れだなぁ……それを本気で言ってんだとしたら抱きしめたくなっちまうくらい哀れだわお前……」

俺は何となく意味分かんないセリフを言ってみる。……実際にこの言葉が言われるとは知らずに。

風太
「確かに俺は今は召喚できない……残念ながら今じゃ俺が苦痛を受けるしかないことにな……だがな、俺が弱くなったところで、別にオマエが強くなったわけじゃねェだろォがよ。あァ！？」

さらに続けて言った後……

ドガァ！バキバキバキッ！

床が割れる。俺が軽く足を振り下ろしただけなのに。

片雲
「！？」

驚く片雲。まぁ、当然と言えば当然の反応だろう。

そのまま片雲の召喚獣は壁側に跳んで避ける。

ドガァ！バキバキバキッ！！

壁も割れる。今度は軽く殴って。

片雲
「なに！？」

さらに召喚獣は壁を蹴って空中に出る。

ダンッ！

俺は召喚獣のところまで跳んで叫ぶ。

風太

「おとなしく尻尾巻いて、無様に元の居場所へ引き返しやがれェ！！！」

ドカァッ！！！ヒュンッ、ドガンッ！ドッ！ガンッ！ドゴッ！ドンッ！ズザザザッ

俺が殴ると召喚獣は吹っ飛び、床を転がっていく。

結果は……

『Ｆクラス　獅子神片雲
戦死　』

片雲

「なにぃぃぃぃぃ！？」

即死だ。まぁ、当然と言えば当然の結果である。

風太

「んじゃ、うしろの四人と勉強をがんばってね～♪」

片雲

「……は？」

俺はそう言った後、部屋に戻ることにした。

途中で捕まった四人とすれ違った。全員驚いた様子で俺を見ていた。

西村

『さて、まずは英語で反省文でも書いてもらおうか。文法や単語を間違えていたら何度でもやり直しだ！終わった者から部屋のシャワーを浴びて寝ても良し！』

そんな声を聞きながら俺は階段を登って部屋に戻って寝た。

夜遅くにみんなが帰ってきたのにはやはりというか気付かなかった。

続く

第二問（後書き）

たまにはこういう展開もいいと思いませんか？風太が明久たちと対立するという。……まぁ、そんなことよりもも風太が人間離れし初めてる気がするんだけど……みなさんどう思います？俺はこれを書いていてたまに「これおかしいだろ？」って思うときがあります。それでも一応チートという設定ではいますが。次は新しいキャラ（？）が登場します！それではみなさんノシ

第三問

翔子
「……雄二。一緒に勉強できて嬉しい」

雄二
「待て翔子、当然のように俺の膝に座ろうとするな。クラスの連中が靴を脱いで俺を狙っている」

強化合宿二日目。今日は合同学習という名の自習らしい。

ちなみに俺は雄二達の見張りとしてこうして、近くで勉強している。

優子
「風太、ここはどうすればいいの？」

言い忘れてたけど優子もここにいる。

風太
「ここ？ここはこうして――」

優子
「うん……うん……あぁ、なるほど。ここからは――」

風太

「そそ。流石はAクラスだね。すぐに分かってくれて助かるよ」

どっかのバカと違って。

風太
「そういえばさ、優子」

優子
「ん？なにかしら？」

優子が一旦手を止めてこっちを向く。

風太
「秀吉に変わったことない？」

優子
「どうして？」

優子が首を傾げる。ああもう可愛いなちくしょう！

風太
「いや、なんかあそこの二人やけに仲良いから」

俺は指を指す。

その先では秀吉とアヤが楽しそうに勉強している。

優子
「あぁ……そう言えば最近なんか機嫌が良かったわね」

風太
「へぇ……」

俺はとりあえず自習に戻ることにした。

そう言えば優子は学校では俺のことを風太って呼んでるけど、休日では風太君になって少しデレデレになる。まぁ、学校でもたまに風太君って呼ぶときもあるよ？誰もいない時とか、小声の時とか。

明久
「でも、なんで自習なんだろう？授業はやらないのかな？」

近くにいた明久からそんな疑問が生まれた。

確かに、こんな所まで来て自習なんて勿体無い気がするのは仕方ないけど、

風太・雄二
「「授業？そんなもんやるわけないだろ」」

明久の独り言を聞きつけてやって来た雄二と見事にかぶった。

明久
「やらない？どうして？」

雄二
「明久。お前はＡクラスと同じ授業を受けて内容が理解できるのか？」

明久

「むっ。失礼な。雄二にはそうかもしれないけど、僕にとってはFクラスもAクラスも大差はないよ」

風太
「どっちも理解できないからからでしょ？」

明久
「うっ……」

翔子
「……この合宿の趣旨は、モチベーションの向上だから」

雄二を追って霧島も俺らのいるテーブルにやってきた。ポジションは雄二の隣りだ。

雄二
「翔子、それだけじゃ明久にはわからんだろ。つまり、AクラスはFクラスを見て『ああはなるまい』と、FクラスはAクラスを見て『ああなりたい』と考える。そういったメンタル面の強化が目的だから、授業はさして問題ではないということだ」

雄二が霧島の説明不足の部分を補う。息も合ってるし、この二人はやっぱり似合いのカップルだと思うのにな。

？？？
「あ、代表に優子ここにいたんだ。それならボクもここにしようかな？」

俺のほぼ目の前に座って勉強を始める。え～と……工藤だったかな？

明久
「工藤さん、だっけ？」

愛子
「そうだよ。キミは吉井君だったよね？久しぶり」

ニッと歯を見せて笑う工藤。ボーイッシュな雰囲気を持つ工藤のその仕草は爽やかに見える。

愛子
「それじゃ、改めて自己紹介させてもらうね。Ａクラスの工藤愛子です。趣味は水泳と音楽鑑賞で、スリーサイズは上から７８・５６・７９、特技はパンチラで好きな食べ物はシュークリームだよ」

パンチラ……ゴクリ……

優子
「風太……？」

風太
「いたたたた！！ゴメン！今少しいやらしいこと考えました！すいません！」

その言葉を聞いて俺がいやらしいを考えたのがバレたらしく、優子に一瞬で腕に関節技をかけられた。

雄二
「……お前も考えることはあるんだな……」

目を押さえながら雄二が意外そうに俺のほうを向いて呟く。俺だっ

て考えることはあるんだよ？

康太
「……明久。工藤愛子に騙されないように」

康太が来ていた。何故か凄い冷静だ。カメラも構えてないし。

明久
「あれ？ムッツリーニ、随分と冷静だね。僕ですらこんなにドキドキしているんだから、てっきり鼻血の海に沈んでいると思ったのに」

康太
「……ヤツは、スパッツを穿いている……！」

明久
「そ、そんな！？工藤さん、僕を騙したね！？」

明久が落胆している。そんなに絶望することかな？しかも雄二が近くで「俺は目を突かれ損じゃないか……」って言ってるし。何が起きたの？

愛子
「あはは。バレちゃった。さすがはムッツリーニ君だね。まぁ、特技ってわけじゃないけど、最近凝っているのはコレかな？」

笑いながら工藤が取り出したのは小さな機械だった。あれは……

風太
「小型録音機？」

愛子
「うん。コレ、凄く面白いんだ。例えば――」

録音機をカチカチと弄る工藤。少し間を置いて、内臓されているスピーカーから声が流れる。

――ピッ《工藤さん》《僕》《こんなにドキドキしているんだ》《やらない？》

明久
「わあああああっ！僕はこんなこと言ってないよ！？変なものを再生しないでよ！」

愛子
「ね？面白いでしょ？」

工藤は悪戯っぽい笑みを明久の背後に立っている二人に向ける。明久の顔はみるみる青ざめていく。

美波
「……ええ。最っっ高に面白いわ」

瑞希
「……本当に、面白い台詞ですね」

明久の背後には氷の微笑をたたえた美波と瑞希がいた。

美波
「瑞希。ちょっとアレを取りに行くの手伝ってもらえる？」

瑞希
「わかりました。アレですね？喜んでお手伝いします」

机に勉強道具を置いて、学習室を出て行く二人。その入れ違いで秀吉が首を傾げながら入ってきた。

明久
「秀吉、どうしたの？」

秀吉
「いや。先ほど島田と姫路に石畳を運ぶのを手伝ってくれと言われたのじゃが、何かあったのかと思っての」

秀吉の台詞を聞いた明久は全身から冷や汗を噴出していた。

雄二
「工藤。今のは録音した会話を合成したのか？」

愛子
「うん。そうだよ」

雄二が真剣な顔で工藤に詰め寄っている。明久が雄二に小声で話しかけてる。

明久
「工藤さん。君が……」

明久が話しかける。が、途中で止まる。

愛子

「ん？なに、吉井君？」

明久
「あ～、え～と、その、君が――」

愛子
「ボクが？」

明久
「キミが――僕にお尻を見せてくれると嬉しいっ！」

アナタハヤッパリヘンタイデスカ？

愛子
「……ぷっ。あははっ。吉井君はお尻が好きなの？それともボクの胸が小さいから気をつかってお尻にしてくれたのかな？」

明久のセクハラ発言に動じない。器がでかいなぁ。

明久
「ご、誤解だよ！別に僕はお尻が好きってわけじゃなくて！」

雄二
「流石だな明久。録音機を目の前にそこまで言うとは」

明久
「へ？」

まだ気づかないんだ。

愛子
「ごめんね。折角だから録音させてもらったよ」

ピ、と電子音を上げて再生される明久の声。

《僕にお尻を見せてくれると嬉しいっ！》

明久
「ひあぁぁっ！これは合成すらしてない分ダメージが大きいよ！？お願い工藤さん！今のは消して下さい！」

愛子
「吉井君って、からかい甲斐があって面白いなぁ。ついつい苛めたくなっちゃうよ」

――ピッ《お願い工藤さん！》《僕にお尻を見せて》

明久
「うわぁぁんっ！どんどん僕が変態になってる気がするよ！」

直後、明久の背後から殺気を感じた。

美波
「……今の、何かしらね？瑞希」

瑞希
「なんでしょうね？美波ちゃん」

表情を変えず、二人は明久の後ろに石畳を設置し始める。

美波
「まさか、ただでさえ問題クラスとして注意されているのに、これ以上問題を起こすような発言をしたバカがいるのかしら？」

瑞希
「困りましたね。そんな人がいるなら、厳しいオシオキが必要ですよね？」

最近瑞希がどんどん良くない色に染まってきてる気がする。

明久
「二人ともこれは誤解なんだ！僕は問題を起こす気はなくて、ただ純粋に《お尻がすきって》だけなんだ――待って！今のは途中に音を重ねられたんだ！お願いだから僕を後ろ手に縛らないで！あとそっちの皆も笑ってないで助けてよ！特に雄二と風太！」

だって見てるだけで凄くおもしろいから。それに、何か企んでるようにも見えるから。

康太
「……工藤愛子。おふざけが過ぎる」

そんな明久のピンチを見て立ち上がったのは康太だった。

明久
「ムッツリーニ！助けてくれるの！？」

康太
「……うまくやってみせる」

そう言って康太は小型録音機を構える。

明久
「姫路さん。美波。よく聞いて。さっきのは誤解で、僕は《お尻が好き》って言いたかったんだ。《特に雄二》《と》《風太》《の》《が好き》ってムッツリィーニィィーッ！後半はキサマらの仕業だな！？うまくやるって工藤さんよりも上手に僕を追い込むってことなの！？」

康太
「……工藤愛子。お前はまだ甘い」

愛子
「くっ！さすがはムッツリーニ君……！」

二人がライバルに見える……何が基準で何が勝負の内容なの？

翔子
「……吉井。雄二は渡さない」

雄二の名前を聞いて霧島が反応する。明久、どんどん敵が増えていくね。

美波
「アキ……。そんなに坂本と風太のお尻がいいの……？ウチじゃダメなの……？」

瑞希
「前からわかってたことですけど、そうはっきり言われるとショックです……」

明久
「三人ともどうしてすぐに僕を同性愛者扱いするの!?僕にそんな趣味は――」

明久が言い切る前に学習室のドアが開き、見覚えのある女子が険しい顔で学習室に入ってきた。あれは確か……

美春
「同性愛者をバカにしないで下さいっ！」

清水美春、またやっかいなのが来たなぁ。

美波
「み、美春？なんでここに？」

美春
「お姉さまっ！美春はお姉さまに逢いたくて、Dクラスをこっそり抜け出してきちゃいましたっ！」

ドリルのようにロールした髪を左右に垂らしている女子が美波の姿を見るなり勢いよく飛びつく。熱烈抱擁の構えだ。

美波
「須川バリアー」

美春
「け、汚らわしいです！腐った豚にも劣る抱き心地ですっ！」

盾にされた挙句口汚く罵倒された須川は涙を堪えて上を向いていた。

美春
「お姉さまは酷いです……。美春はこんなにもお姉さまを愛しているというのに、こんな豚野郎を？ませるなんてあんまりです……」

そろそろ考えを変えたらいいのに……

美波
「ちょっと美春！こんなところで愛してるとか言わないでよ！アキに勘違いされちゃうでしょ！？」

いや、勘違いするのは明久だけじゃないと思う……。

？？？
「君たち、少し静かにしてくれないかな？」

そんな中、凛とした声が響き渡った。眼鏡を押し上げるクールな声の主は学年次席である久保利光だった。

明久
「あ、ごめん久保君」

久保
「吉井君か。とにかく気をつけてくれ。まったく、姫路さんといい島田さんといい、Ｆクラスには危険人物が多くて困る」

その危険人物の定義はもしかしなくても明久関連だろう。

久保
「それと、同性愛者を馬鹿にする発言はどうかと思う。彼らは別に

異常者ではなく、個人的思考が世間一般と少し食い違っているだけの普通の人たちなのだから」

明久
「え？あ、うん。そうだね」

さすが。当事者の発言は重みがあるね。

美波
「ほら美春。くだらないことで騒いでないで自分の学習室に戻りなさい」

美春
「くだらなくなんかありません！美春はお姉さまを愛しているんです！性別なんて関係ありません！お姉さま、美春はお姉さまのことが本当に――」

美波
「はいはい。ウチにその趣味はないからね？」

喧しい清水を美波が学習室の外に追いやる。これでやっと静かになった。

久保
「……性別なんか関係ない、か……」

久保が思いつめた顔で清水の捨て台詞を反芻していた。大丈夫だとは思うけど、襲ってはいけないよ？

瑞希

「性別なんか関係ない、ですか……」

明久
「あのね姫路さん。その台詞を呟きながら僕と雄二を交互に見るのはやめてもらえるかな？きっとキミは誤解してるよ？知っての通り、僕は《秀吉》《が好き》なんだってちょっと！」

流石にそれは否定できないでしょ？

明久
「け、けど、誤解しないでね？僕は秀吉の《特に》《お尻が好き》なんだ――ってこれだと余計に誤解を招くよね！？ムッツリーニと工藤さん、とにかくその機械をこっちに渡しなさい！僕を取り巻く環境が変わらないうちに！」

いや、もう遅い。

秀吉
「あ、明久……ワシはどんな返事をしたら良いのじゃ……？」

明久
「しまった！もう手遅れ！？こうなったら、《久保君》《雄二と》《交互に》《お尻を見せて》違う！どうしてこんな場面で久保君のお尻を見る必要があるのさ！」

久保
「吉井君。そういうのは少々困る。物事には順序がある」

明久
「わかってる！順序云々の前に人として間違っていることも！」

ポン……

俺は明久の肩に手を置き。

明久
「風太……？」

風太
「明久……男にしか興味がないなんて……」

明久
「だからどうして皆僕をソッチの人にしようとするの！？落ち着いて僕の話を聞いてよ！」

騒がしい教室内のざわめきに明久の声が打ち消される。

結局、この騒ぎは鉄人が怒鳴り込んでくるまで続いた。

そんなこんなで夕食時間が終わり、俺は女子風呂に向かう。もちろん、覗き阻止のためにだ。

風太
「先生方いますかー？」

西村
「ん？風太か。アイツらは何をしていた？」

鉄人が近くに来た。布施先生もいる。

風太
「俺は分かりませんけど……アイツらに舐めてかかると大変な目に遭いますよ？」

布施
「え？どういうことですか？」

布施先生が不思議そうな顔をする。しかし、俺はそんなことも気にせずに奥に進む。

布施
『西村先生、流石に今日は彼らも現れないのでは？昨日あれほど指導をしたことですし』

西村
『布施先生。風太も言っていた通り彼らを侮ってはいけません。彼らは生粋のバカです。あの程度で懲りるようであれば今頃は模範的な生徒になっているはずですから』

布施
『そうでしょうか？いくらなんでも、そこまでバカでは――あ、アレは！？』

――ドドドドド！

『おおおおっ！障害は排除だーっ！』

『邪魔するヤツは誰であれブチ殺せーっ！』

『サーチ&デェース！』

布施
『に、西村先生！大変です！変態が編隊を組んでやってきました！』

西村
『まさか、懲りるどころか数を増やしてくるとは。これだからあの連中は……！布施先生、警備部隊全員に連絡を！一人とて通してはいけません！私は定位置につきます！』

布施
『は、はい！』

そんな声や、やりとりをを聞きながら。

風太
「ん？誰だろ？あれ」

俺は向こうに人が居るのが見えた。俺はそこに向かい――

風太
「みんな協力してくれる？」

――そこにいる女子の軍団に協力を頼んだ。

明久
『清水さんお願いだ！そこをどいて欲しい！』

美春
『ダメです！そうやってお姉さまのペッタンコを堪能しようなんて、神が許しても私が許しません！』

明久
『違うよ！僕の目的は美波のペッタンコじゃないんだ！信じて！』

美春
『嘘です！お姉さまのペッタンコに興味がない男子なんているはずがありません！』

バカな会話が聞こえてきた。ちなみに俺は興味津々だ。

明久
『本当だよ！ペッタンコは所詮ペッタンコなんだ！今の僕には美波の地平線のようなペッタンコよりも大事なことが右肘がねじ切れるように痛いぃぃっ！』

……やはり、か。馬鹿な奴らだ。

美波
『黙って聞いてれば、人のことをペッタンコペッタンコと……！』

俺は好きだがな。

明久
『み、美波。今は入浴時間じゃ……？』

美波
『忘れたの？ウチと瑞希はＦクラスだから後半組なのよ。――もっとも、前半組のＡクラスからも参加している人がいるみたいだけどね』

俺もそろそろ行くか。

俺は女子の人ごみをかき分け明久達に見つからない様に前に出る。

……エアーガンのライフルを持って。

嵐士
「ここでいいか」

俺はその場で屈み込み、ライフルを構える。

愛子
「さて、おしゃべりはここまで。そろそろ始めようか、ムッツリーニ君？」

康太
「……わかっている」

結構前まで来たので良く見える。

嵐士
「おらよっと」

ガチャンッ！ギュルルルルルルッッ！！

俺がライフルの横に付いてるレバーを力いっぱいに引くともの凄い音が出た。

このライフルは俺の手作りで、レバーを引くと中にあるギアが回転して弾を回転させる。そして、引き金を引くとそのまま弾が撃たれるので、野球で言うジャイロボールになって真っ直ぐにかつ速く撃てるのだ。

明久
「ねぇ、なにこの音？」

片雲
「おそらく風太の仕業だな」

流石にバレるか。

……ん？

片雲
「明久！逃げろ！」

明久
「ええ！？なんで！」

片雲
「とにかく行け！！」

『そうだ！』

『吉井は俺達の希望だ！』

明久
「皆……」

Fクラスの全員が明久を逃がそうとする。

『この場の全員で血路を開く！お前たちは振り向かずに駆け抜けろ！』

『ここが男の見せ所ってやつだな！』

……ククク。面白いことになった。

明久
「……わかったよ。ここは皆に任せる！そして僕たちは必ず生き延びて……目的を果たす！行くぞ、試獣召喚（サモン）！」

嵐士
「そこだ！コントロールショット・改！！」

ドゴンッ！

明久の召喚獣が召喚されたところで俺は引き金を引いた。

明久
「え？なに――いったあああ！！！なにかで撃ち抜かれた痛みが足にあるよ！？」

そのまま俺が撃った弾は召喚獣を貫通して本人にも当たった。

『古典
吉井明久　１１点』
まだ生きてたか。
その後、明久は女子の大群を召喚獣でどかしながら逃げて行った。
嵐士
「これでいいか。先生、俺戻りますから」
西村
「ああ」
俺はそそくさと部屋へ戻った。
俺は一人呟く。
嵐士
「……明久。お前は逃げられないぞ」
《――放送連絡です。Ｆクラスの吉井明久君。至急臨時指導室に来るように》
面が割れてるからな。

続く

第三問（後書き）

もうなんでもありですね。これ。

第四問

翌朝

風太
「なんで覗きをするのかなぁ……」

俺は溜息混じりで呟く。

俺は今ベランダにいる。いつもより早く起きれたからだ。

風太
「他にも方法はあるはずなのになぁ……」

そう。他にもあるはず。例えば、瑞希達に協力してもらうとか。

風太
「はぁ……とにかく止めるかな。……ヘックチ！……寒いからそろそろ戻るか」

俺が部屋に戻ろうとしたところで――

明久
「殴る！コイツの耳からドス黒い血が出るまで殴り続ける！」

――明久がイカレてた。

ガチャッ

西村
「おいお前ら！起床時間だ――ぞ……？」

明久
「死ね雄二！死んで詫びるんだ！あるいは法廷に出頭するんだ！」

雄二
「なんだ!?朝からいきなり明久がキマっているぞ!?持病か!?」

秀吉
「ええい落ち着くのじゃ明久！西村先生、済まぬがこやつを取り押さえるのを手伝って頂きたい！」

康太
「……！（コクコク）」

鉄人
「……お前らは朝から何をやっているんだ?」

風太
「……はぁ……」

朝から大変なことになりそうだなぁ……

～片雲視点～

明久
「雄二。そういえば昨夜妙なことを言われたよ」

雄二
「ん？なんだ？」

寝起きのドタバタも終えて朝食中。明久が雄二に声をかける。

明久
「工藤さんに『脱衣所にまだ見つかってないカメラが一台残っている』って言われたよ」

雄二
「なんだと？」

忙しなく動いていた雄二の箸の動きが止まる。

明久
「怪しいよね。そんなことを知っているなんて、やっぱり彼女が犯人じゃないかな？」

秀吉
「いや、そうとは限らんじゃろ。それならわざわざ怪しまれるようなことを言うとは思えん」

雄二に代わって隣にいる秀吉が答える。確かに工藤が犯人だと断定するには証拠が少なすぎる。

康太
「……確認するしかない」

明久
「やっぱりそれしかないか……」

お前らは覗きしかないのか……

雄二
「だが、工藤の情報はありがたいぞ」

明久
「え？カメラが残っているってことが？」

雄二
「ああ。それを工藤しか知らないってことは、そのカメラに女子の着替えが撮影されている可能性が高い。それを手に入れたら入浴していない女子の確認もできるからな」

康太
「……隠し場所なら5秒で見つける自信がある」

流石康太だ。目には目を、変態には変態だな。

明久
「けど、本当にそんなカメラがあるのかも怪しいよ？」

片雲
「違う。まず最初にカメラが見つかったことの方がおかしいんだ」

雄二
「そうだ。あんなに盗撮や盗聴に長けている犯人のカメラが素人に見つけられるなんて考えにくい。そうなると――」

康太
「……二段構え」

片雲
「そういうことだ。だから、最初のはカモフラージュだ」

秀吉
「用意周到じゃな」

最初のカメラで油断させておいて本命のカメラで撮影する。なんとまぁ手の込んだことだ。

明久
「けど、それならお風呂の時間を避けてカメラを取りに行けば解決ってことだね」

康太
「……それは無理」

明久
「え？なんで？」

康太
「……時間外だと脱衣所は厳重に施錠されている」

初日のカメラか。なんでこんなことになるんだ……

明久
「諦めて今までどおりの方法を貫けってことか……」

秀吉
「そのようじゃな」

あの警備を突破しないと状況は変わらないからな。

雄二
「そこで昨日の反省だ。明久、昨日の敗因はなんだと思う？」

明久
「敗因？う～ん、向こうが女子の半分を防御に回してきたことじゃないかな？」

確かに教師陣だけなら俺たちの勝ちだった。少なくとも布施先生には競り勝ってたからな。

康太
「……敵側には工藤愛子もいた」

康太が悔しげに告げる。よっぽど邪魔されたのが悔しいんだな。

雄二
「そうだ。昨日の敗因はＡクラスを含め、敵の戦力が大幅に増強されていたことだ」

これでは正面突破は難しすぎる。だが、

片雲
「それなら俺らも増やせばいい」

雄二
「その通りだ。Fクラスだけではなく他のクラスも味方につけて対抗するんだ」

雄二が作戦を提案すると、明久が納得いっていない顔をする。

秀吉
「む？明久、どうしたのじゃ？」

明久
「う～ん。なんか、この作戦がいつものやり方と違う感じがしてなんだか……。ほら、向こうの戦力が大きいからってこっちの戦力を増やすっていうのが、イマイチ僕ららしくないというか……」

片雲
「やっと回るようになったな、明久」

雄二
「その通り。このやり方の目的は正面突破だけじゃない」

明久
「んで、他の目的って何？」

雄二
「俺たちの保身だ」

明久

「僕らの身を守る？誰から？」

片雲
「いいか明久？今のところは未遂で終わっているから大した問題になっていないが、本来覗きは立派な犯罪だ。作戦が成功して女子風呂にたどり着いたとしても、犯人が見つからなかったら俺たちは処分を受け、変態扱いされるだろう」

今の俺たちには無罪にする手立てはないからな。

雄二
「それを避ける為の戦力増強――つまり、メンバーの増員だ」

明久
「増員が処分を逃れる手段になるって？」

雄二
「ああ。人数を増やせば相手の特定は難しくなる。向こうだって戦いながらその場にいる全員の顔を覚えるのは厳しいだろうからな」

そんなことが出来るのはよっぽど記憶力のいいヤツぐらいだからな。

明久
「でも、既に僕らは面が割れてるよね？それなら無意味なんじゃないの？」

確かにそのせいで明久は昨夜に呼び出しを受けたからな。だが、

片雲
「文月学園は世界中から注目を浴びている試験校だからな。そんな

不祥事があったらひた隠しにするかキッチリと一人残らず処分をするかのどちらかしか選べない。中途半端に一部の生徒だけを罰すれば、ただでさえ叩かれている『クラス間の扱いの差』についてマイナス要因を増やすだけとなるわけだ」

つまり、ツラが割れてる俺たちFクラスだけを罰せれば、学園は世間から白い目で見られることになるわけだ。

明久
「なるほど。流石は雄二。汚いことを考えさせたら右に出る人はいないね」

雄二
「知略に富んでいると言え」

とまぁ、そういうわけで人物を特定させない為にも多くの協力者が必要になる。突破の為の戦力にもなるし、出来るだけ多く集めないとな。

秀吉
「ふむ。ならば今日は協力者の確保を主軸に行動するわけじゃな」

雄二
「ああ。幸い合同授業の上に殆ど自習みたいなものだからな。動きは取り易いはずだ」

明久
「そうだね。じゃ、まずはどこから行く？」

片雲

「Aクラスに決まってるだろ。同じ手間なら能力が高い方が得だ」

雄二も明久も同意見みたいだ。

秀吉
「Aクラスならば昨日の合同授業で交流もあるしのう。話もしやすいじゃろうて」

雄二
「決まりだな。合同授業の間に」

明久
「了解。ムッツリーニもそれでいいよね？」

康太
「……問題ない」

片雲
「それじゃ、話がまとまった事だし、さっさと食おうぜ」

俺が言うと同時に全員が朝食を再開した。
明久は久しぶりのしっかりした食事を幸せそうに食っていた。

片雲
「そういえば雄二」

雄二
「なんだ？」

勉強していると見せて雄二と話す。

片雲
「一つ言い忘れてたけどよ」

雄二
「ああ」

片雲
「風太の奴、召喚獣に物理干渉できてたぞ」

雄二
「……ハァ？」

俺が報告をすると雄二は信じられないような顔をした。

片雲
「そしたら、瞬殺だ」

雄二
「……かなり、いや……相当面倒だな……」

片雲
「そういうことだ。だから、あいつの相手は俺がするが、お前は何か浮かぶか？」

雄二
「今は何も浮かばねぇ」

雄二が悔しそうに呟く。

片雲
「そうか。それなら、とりあえず俺は何か作戦になるような情報でも探してくる」

雄二
「分かった。頼んだぞ」

片雲
「おう」

俺は返事をし、部屋をこっそり出た。もちろん、見つからない様にだ。

～風太視点～

風太
「ん？……はぁ……またあいつらなの？」

俺は溜息を吐く。

優子
「あいつら、って吉井君達のこと？」

今日も俺の近くに居た優子が聞いてくる。

風太

「うん。ほら、見てよ、あそこでまた何か企んでる」

俺は明久達の方を指さして優子に教える。

優子
「本当だ。どうするの？」

風太
「え？今回は特になにもしないけど」

優子
「……え？」

優子が驚いた。それも当然だよね。気づいてるのに見過ごすなんてね。

風太
「とにかく続けよ？」

優子
「う、うん……」

だけど、俺はそんなことも気にせずに俺達は勉強を続けた。

明久達が外に出ていることにも気付かず。

～片雲視点～

明久

「……やっぱりこっちにも監督の先生がいるね」

雄二
「当然だな」

廊下をこそこそと歩くこと数分。俺たちはDクラスとEクラスの合同学習室の前で様子を窺っていた。

秀吉
「して、どうするのじゃ？このままでは交渉を進められんが」

康太
「……侵入も難しい」

よりによってここの監督の先生は出入口の前に陣取ってやがるからな。これでは侵入は不可能だが……。

片雲
「誰かに囮になってもらえばいい」

明久
「断る」

ちっ。先手を打ってきやがったか。

雄二
「やれやれ。それなら、ゲームで決めないか？」

明久
「ゲームって何？」

雄二
「古今東西だ」

……結果が見える。

明久
「わかったよ。やってやろうじゃないか」

雄二
「よし。それならいくぞ」

俺たちは部屋の中に聞こえないように気を配りながらゲームを開始した。

雄二
「坂本雄二から始まるっ」（雄二のコール）

片雲・明久・秀吉・康太
「「「イェーッ！」」」（俺と明久と秀吉と康太の合いの手）

雄二
「古今東西っ」

片雲・明久・秀吉・康太
「「「イェーッ！」」」

雄二
「【A】から始まる英単語っ」

パンパン（手拍子）→雄二の番

雄二
「【Ａｐｐｌｅ】」

パンパン（手拍子）→明久の番

明久
「……僕の、負けだ……」

片雲・雄二
「一つも思いつかんのか!?」

まだまだ沢山あるだろ!?こいつはどこまでバカ何だ!?幼なじみでも分からんとはどういうことだ!?

明久
「で、でも、ムッツリーニもこんなのできないよね?」

この野郎……康太を巻き込む気か。

康太
「……そんなことない」

明久
「そ、そうなの?」

康太
「……やってみせる」

明久と入れ替わるように康太が雄二の前に出た。

雄二
「それじゃ……古今東西、【Ａ】から始まる英単語っ」

パンパン（手拍子）→雄二の番

雄二
「【Ａｍｏｎｄ】」

パンパン（手拍子）→康太の番

康太
「……【ＡＶ】」

それはエグい。

明久
「ちょっと待って二人とも」

雄二
「なんだ、明久」

明久
「今のムッツリーニの英単語はどうかと思うんだ」

雄二
「何を言っている。きちんとＡから始まっていただろうが」

明久

「ああ、うん。一応そうだけど……」

雄二
「それなら問題ないだろう。続きをやるぞ」

明久の苦情が切り捨てられる。

パンパン（手拍子）→雄二の番

雄二
「【Ａｇｅｎｔ】」

パンパン（手拍子）→康太の番

康太
「……【Ａｋｉｈｉｓａ】」

明久
「はい待って二人とも」

雄二
「今度はなんだ明久」

明久
「いつの間に僕の名前は英単語になったのかな？」

康太
「……【名詞】バカの意。またはそれ相応の人物の総称。【－ｆｕｌ】で形容詞」

明久
「何!?そうやってまるで本当に辞書にのってるような説明はやめてよ!」

雄二
「例文：Ｈｅ　ｉｓ　ｓｏ　Ａｋｉｈｉｓａｆｕｌ．（彼はこの上なく愚かな人物だ）」

皆明久を苛めるのは好きの様だ。もちろん、俺も含むが。

明久
「とにかく、固有名詞や略語は反則だからね」

雄二
「あー、わかったわかった。んじゃ、続きいくぞ」

そこから続きをやり、明久がキレ、先生登場、逃走劇が始まり、俺達は交渉して、任務完了。

明久
「はぁっ、はぁっ、はぁっ……なんとか、撒いた、かな……」

雄二
「明久、ご苦労だったな」

片雲
「よくやった」

明久
「苦労、したよ、途中から、大島先生が、出てきて……」

雄二
「そうか。おかげでD・Eクラスの協力を取り付けることができた」

片雲
「感謝してもしきれないくらい感謝してるぜ」

明久は呼吸を整える。

明久
「それは良かったよ。これで戦力は一気に増えたね」

雄二
「ああ。次はBクラスとCクラスだな。もう一度頼むぞ明久」

さも当然のように告げる雄二。だが明久は……。

明久
「そう簡単に引き受けるわけにはいかないよ。さっきの勝負も納得がいってないし、もう一度勝負だ！」

やれやれ、まだ懲りないのか？

片雲
「頼むよ明久。これはお前にしかできないことなんだ☆」

明久
「何でそんな少年漫画みたいな笑顔で言ってくるの！？」

お前がやってたから。

片雲
「それより、やるのか？時間がもったいないじゃねぇか」

明久
「ふふっ。そうかな？僕をさっきまでの僕だとは思わない方がいいよ」

いやに自信満々だな。まぁ別にいいが。

明久
「それじゃ……吉井明久から始まるっ」（明久のコール）

片雲・雄二・秀吉・康太
「「「イェーッ！」」」（俺と雄二と秀吉と康太の合いの手）

明久
「古今東西っ」

片雲・雄二・秀吉・康太
「「「イェーッ！」」」

明久
「【Ｏ】から始まる英単語っ」

パンパン（手拍子）→明久の番

明久
「オーガスト！（Ａｕｇｕｓｔ）」

五十嵐
「待ちなさい吉井君！どうしてキミは授業中に出歩いているのですか！」

明久
「すみません！色々事情があるんです！」

明久の話によると五十嵐先生は意外と足が速いかったらしい。

続く

第五問

風太
「……先生」

西村
「なんだ」

風太
「……暇ですね」

西村
「全くだ」

俺達は今、皆が戦闘を行っている階の一つ下の階で待機している。

風太
「それにしても、あの作戦上手くいくと思いますか？」

俺は聞く。だけど、鉄人は愚問だ。っと言い、

西村
「精神面には失敗だな」

言いきった。

風太
「やっぱりそう思いますか」

大体予想していた答えとほぼ同じだったからさほど驚きはしない。

風太
「そろそろ誰か来るかな？……って、ホントに来るってのもどうかと思うけど」

俺が先を見ると、階段のところに誰かが走って来るのが見えた。

その人間は片雲だった。

風太
「なんかまた当たった、って感じだなぁ……」

片雲
「よう。またお前か」

風太
「うるさいな。俺はお前専門なの。分かった？」

片雲
「そうなのか。大変だなぁ」

風太
「ホントだよ」

ハッハッハッと二人で笑う。

風太・片雲
「「死ねやゴラァァアアア！！！」」
俺達は殴りかかった。もちろん素手で。
風太
「召喚獣は？」
片雲
「あ、忘れてた。試獣召喚（サモン）！」
そこは忘れないと思う。
片雲の召喚獣が召喚されたところで片雲は右腕の袖をまくり、あるワードを口にする。
片雲
「ウェポンチェンジ！モード双雲（ソウウン）！」
片雲の召喚獣が持っている武器が変わり、服も変わった。
ベストが無くなり、武器は大剣。左肩には鎧が付いた、簡単に言えばディシディアｖｅｒ．のクラウドだ。
風太
「これで舞台はそろったね。俺もやってあげるよ」
俺はポケットからヘアピンを取り出し、左側の前髪に付けた。
？？？

――イッツ・ショータイム♪

???

「早くやろうよ、双君？」

双雲

「くっ……！」

私はフウ君と替わった。今の髪の色は水色になってるんだ。

???

「私の名前は雨音（アマネ）。よろしくね？」

双雲

「……ッ！」

双君が苦虫を噛み潰したような顔をする。

双雲

「こんなことしてられない……とにかく、そこを退いてもらう！行け！」

召喚獣が突っ込んでくる。だけど私は慌てない。

そのまま動きに合わせて腕を振り、

ズバァッ！

斬る。

双雲
「!?……お前、今何をした?」

怒ってる。当然だよね。

雨音
「もう終りにするからね?ごめんね、協力してあげたいけどフウ君の指示なんだ」

そこに私は双雲君の召喚獣に近づき、

ズバァッ!

斬り裂いた。

『双雲
戦死』

ちなみに、明久君達も瑞希ちゃん達に邪魔されてお仕置きを喰らったのでした。

続く

第六問

明久
「ふぁ……あふ……」

だらしないほど大きな欠伸が出る。

雄二
「流石に眠いぞこら……」

昨日なにがあったかは知らないけど、また徹夜したようだった。

秀吉
「お主ら、災難じゃったのう……」

秀吉が明久たちを見て申し訳なさそうに声をかけている。秀吉は巻き添えを食らったんじゃないの？

秀吉
「弱ったのぅ。お主らがそんな様子では、今夜はとても……」

明久
「別にまったく寝てないわけじゃないから、気合さえ入れば目が覚めると思うけど――ふわあ～～」

これは重症だ。何故なら明久が目の前にある栄養よりも睡眠を優先

しようとしているからだ。

雄二
「俺もダメだ……。全然気合が入ら――ふおぉぉおっ!?」

俺の隣でダルそうにしていた雄二が、何かを見た瞬間一気に覚醒した。何!?何を見たらそんなになるの!?

康太
「……効果は抜群」

何だろ?もうこれは見るしかない!

そう思い俺が雄二の持っているものを見ようとすると――

バサッ（何かを被せられたた音）

グッ（誰かが俺の頭を押さえつける音）

キュッ（何か紐のような物で縛られる音）

風太
「何これ!?ちょっ……やめて!」

康太
「……風太はダメ」

前から康太の声が聞こえる。どうやら康太の仕業らしい。

風太

「そうなんだ……見せてくれたら協力してあげるのに……」

シュッ（紐が解かれる音）

バサッ（何かが取られる音）

風太

「まぶしっ！」（俺が驚く声）

康太

「……これ」

康太が渡してきた。これは……

風太

「ありがとう……康太、君に感謝するよ……！」

浴衣姿の優子が写っていた。

とても良く似合ってる。もう言葉にできないぐらいに似合ってる。

なんで着てるかは置いてといて本当に似合ってる。

風太

「あれ？その写真は？」

俺は康太が他にも持っているのを見つけた。

秀吉

「うん？ムッツリーニ。お主、他にも写真を持っておったのか？」

秀吉も気付いたみたいだ。

秀吉
「どれどれ、何が写っておるのじゃ？」

明久
「あ、僕にも見せてよ」

それに釣られて明久も見ようとする。

風太
「俺も――……ごめん……」

明久
「？風太、僕に何かしたっけ？」

やってない……だけどごめん……

その写真に写っていたのは――セーラー服姿の明久（ＷＩＴＨパンチラ）。

康太
「……思わず撮ってしまった」

明久
「放して秀吉！コイツの脳髄を引きずり出してやるんだ！」

秀吉
「ワシも何も見ておらんから落ち着くのじゃ！」

色々あるけど明久達の気力はここにきて最高潮に達していた。

霧幻
「これでいいですかね」

僕は今二階にいます。何故ならもしもの時のための幻覚を張っておいたからです。

霧幻
「そろそろ向かいますか」

僕は階段を下りた。

雨音
「せ～んせ～い」

西村
「なんだ」

雨音
「先生はやっぱり明久君が相手ですか？」

西村
「あぁそうだ」

テッツー（鉄人の鉄からとった）はめんどくさそうに答える。

雨音
「八時に皆攻め込んできますよ？」

西村
「わかっている。あいつらは覗きのためにここまでやっているんだからな……そのやる

気を少しは勉強に廻さんのか……」

テッツーが頭に手をつく。

雨音
「八時ですよ。この十分から二十分後には来ます。明久君達が」

西村
「どんな手を使うのか気になるな……」

テッツーの溜息だけが廊下に響く。

～三十分後～

雨音

「やっと来た」

向こうから二人来た。

双雲
「……この時を待っていた」

一人は双君だった。

雨音
「へぇ～、随分と余裕だね～？」

双雲
「……昨日の俺とは違う」

それは分かるよ。ビリビリと殺気に近いものが感じられるよ。

雨音
「もういいよ前置きは。早くやろう？」

双雲
「……ああ、行くぞ！試験召喚獣召喚！試獣（サモン）召喚！」

床にいつもの魔方陣が現れ、その中から双君の召喚獣が現れる。

双雲
「これが最終決戦だ！」

今、覗きな為に全てをかけた変態達の最後の戦いが始まる！

風太
――いやバカでしょ皆（笑）

続く

第七問

雨音
「ほっ、ほっ、ほっ」

シュッ、シュッ、シュッ。

双雲
「なんで当たらない……！」

私は今双君と戦闘中だ。教科は保体。片君の得意科目だ。だけど今の点数は……

保健体育

Fクラス
双雲　２６３点

だいぶ減らしてるよ。元の点数は８００点近くだったけどね。

私の武器は木刀と小刀の木刀三本の変則四刀流だ。

雨音
「そろそろ本気でやるよ？」

双雲
「今までのは本気を出してないのか！」

雨音
「うん♪」

ブンッ！！

木刀を振る。

双雲
「！クソッ！」

ダッ！ガガガガガッッ！！

双君が気付き、召喚獣を避けさせる。さっきまで召喚獣が居た場所には、何かが刺さる音がした。

双雲
「……衝撃波か？」

雨音
「う～ん……ちょっと違うかな？」

双雲
「じゃあ何だと言うんだ」

ちょっとキレ気味で聞かれる。

雨音

「衝撃波、って言っても水の衝撃波なんだよね～」

双雲
「水？」

双君が不思議なものを見る目をする。

雨音
「そう、水。あの缶みたいの落ちてるでしょ？あれ、水蒸気を作ることができるんだよね～」

双雲
「……まさか！」

雨音
「その通り♪水蒸気をまとめて、振った時に飛ばしてたんだよね～♪」

双雲
「……」

双君が怪物を見るような顔をする。正直酷い。

雨音
「じゃあ、次は～」

双雲
「……チッ」

双君が舌打ちをする。ここまで聞こえるってどんだけ。

雨音
「ハッ！」

シュッ！

雨音
「せいっ！」

ブンッ！ビュンッ！

小刀を全部投げ、木刀を振り、さっきの技で一気に加速させる。

双雲
「なに！？はぁぁぁぁあああああ！！！」

それを双君は全力で避ける。

ガガガッ！

床に小刀が刺さり――

雨音
「隙あり♪」

双雲
「まずい！」

ズバッ！

そこから瞬時に近づき斬る。木刀なのに斬れるのはほっといて。

保健体育

Fクラス
双雲　１３１点

まだ生きてた。

雨音
「もう死んでね？双君♪」

最後にもう一回さっきの技を使い――

双雲
「そこだ！」

ドゴッ！

――技の直後のがら空きの背中を突かれた。

双雲
「まだまだぁぁぁぁあああ！！！」

ガガガガガガガガガガッッッッッッッッ！！！！！！！！！

その後も容赦ない怒涛の攻撃。

雨音
「ガッ……ハッ……」

双雲
「とどめだぁぁぁぁあああああ！！！」

ドゴゥッッ！！！

召喚獣が全ての力を込めて打ち込んできた。

雨音
「グッ……」

これは結構効いた。

やっぱりあの技はだめだったみたい。

あれ……技自体は強いけどその後の隙をどうしても隠せないのが一番の弱点なんだよね……

雨音
「強いね……双君」

フラフラの状態で双君に言う。

双雲
「……バカかお前は。わざとあんなの使われてたら誰だってそこを突く」

雨音
「あはは……」

バタンッ

私は倒れ、そこで意識を失った。

～片雲視点～

片雲
「よくやった。って言っても俺も何故か疲れてるし」

俺はその場で座る。

雄二
「大丈夫か、片雲」

階段の方から雄二達男子が来た。

片雲
「ごめん。俺は無理だ。しばらく一歩も動けないな」

雄二
「そうか。だったら、俺達は先に行ってるぞ」

片雲
「ああ。しっかりと目に焼き付けて来いよ」

雄二
「当たり前だ」
そう言って雄二達は女子風呂の方へと向かった。

……地獄が待ってるとは知らないで。
実は今、くそババァもとい学園長が風呂にいるからな。
片雲
「神楽から聞いておいてよかった……」
俺はそう思った。

『割にあわねぇーっっ！！』

……そんな声を聞きながら。

……ご愁傷様だ。
俺は静かに手を合わせた……

瑞希
「美波ちゃん、おはようございます」

美波
「あ、瑞希。おはよ……」

瑞希
「どうしたんですか？元気がないみたいですけど、何か悩みでも？」

美波
「う、ううん！そんなことないわ！ちょっと疲れてるだけ！」

瑞希
「そうですか。確かに先週の強化合宿は大変でしたからね。疲れが残っちゃっても仕方がないですよね」

美波
「あ、うん。確かに色々と大変だったわね」

瑞希
「最後は獅子神君以外の男子が皆真っ白になっていましたけど、何があったんでしょうか？」

美波
「ああ、それのこと？さぁね～。よっぽどショックなものでも見たんじゃない？」

瑞希
「ショックなもの、ですか……？」

美波
「様子を見に来た学園長もビックリしたでしょうね。学力強化合宿があんなことにな
っていて」

瑞希
「学年全員での覗きですからね……。最初は明久君たちだけだったのが気づいたら凄
いことになっていましたよね」

美波
「そうね……。ところで覗きと言えば、例の初日に脱衣所にカメラを設置した真犯人
なんだけど」

瑞希
「え？真犯人が見つかったんですか？」

美波
「うん。それが、美春が本当の犯人だったみたい」

瑞希
「美春って、清水美春さんですか？」

美波
「うん。最後の日に脱衣所からカメラを持って出てくるのを偶然見かけたの。村雨の言う通りお尻に火傷の痕があったから間違いないわ。それで問い詰めたら、『お姉さまの姿を残したかったんです』って盗撮を認めたわ」

瑞希
「そうだったんですか」

美波
「ま、最後にはあいつらも覗き魔になったから、今更謝るのもちょっと、て感じだけどね」

瑞希
「あ、あはは……」

美波
「ちなみに美春のカメラは全部没収しておいたから安心していいわ」

瑞希
「そうでうか～。それなら安心ですね」

美波
「ん。そろそろＨＲの時間ね。急ぎましょうか」

瑞希
「あ、はい。そうですね」

美波
「それじゃ、これから一週間、風太も入れて、ウチら三人だけで寂しいけど、仲良くやりましょ」

瑞希
「はい。こちらこそ宜しくお願いします」

風太
「おはよ～」

美波
「おはよう。風太」

瑞希
「おはようございます」

処分通知

文月学園第二学年

全男子生徒

総合１５０名

上記の者たち全員を

一週間の停学処分とする。

ついムラッときてやった。

今は心の底から後悔している。

～とある生徒の反省文より抜粋～

何か良いことがあったのだろうか。
やっぱり参加しなければ良かったと思う。

～とある多重人格者の生徒の文より抜粋～

続く

最終問題

～明久視点～

停学明け。
いつもより少しだけ早く起きた僕は学校を前にある種の感慨を抱いていた。

明久
「やれやれ。なんだか随分と久しぶりに学校に来た気がするよ」

強化合宿の期間も含めると二週間ぶりか。こうなると春休みよりも長い。こんな時期に長期の休みをもらえるなんて、ある意味ラッキー――なんて思えるわけがない。山ほど課題が出された上に自宅謹慎を義務付けられたのだから。

？
「あっ。明久君っ」

不意に後ろからタタタッと誰かが駆けてくる音が聞こえてきた。

瑞希
「お久しぶりですっ。元気でしたか？」

明久
「姫路さん。久しぶりだね」

一週間と言っても、最近はほぼ毎日顔を合わせていたのだから充分に久しぶりだ。

瑞希
「実は、その、明久君に謝らないといけないことがあるんです」

明久
「え？どうしたの急に？」

僕が謝るならともかく、姫路さんに謝れることなんて何かあっただろうか。

瑞希
「強化合宿の初日なんですけど――覗き魔扱いしてごめんなさいっ」

明久
「ほぇ？」

姫路さんが腰を折って深々と僕に頭を下げた。

明久
「いや、覗き魔扱いも何も、僕らは覗き魔そのものなんだけど……？」

瑞希
「あ、いえ。そうじゃなくて、一番最初は誤解だったじゃないですか。その時、明久君を疑っちゃったから、申し訳なくて……」

僕らの仲間にムッツリーニがいる以上、その考え方は決して間違いじゃないだろう。

明久
「あははっ。結局覗きをやったのに謝れるなんて、なんか変な感じだよ」

瑞希
「そ、そうですか？」

そもそも覗き魔の僕とこうやって普通に会話をしていることも変だと思う。って、そうなると二年生の男子全員と会話できなくなっちゃうけど。

瑞希
「でも、あの……」

明久
「ん？なに？」

瑞希
「そ、その……そこまでして、見てみたいものなんですか……？」

明久
「まぁね」

まぁねじゃないだろ僕。

明久

「あ！えーっと、その！今のは口が滑って――じゃなくて、心にもない言葉が咄嗟に僕の口から……！」

瑞希
「そうなんですか……ふふっ」

あれ？軽蔑されてないみたいだ。

瑞希
「良かったです。きちんと女の子に興味があるみたいで」

明久
「ぅぐ……」

なるほど。確かにソッチに比べたら助平の方がマシだろう。

思わず呻いた僕を見て姫路さんは楽しそうに笑った。むぅ。からかわれているみたいだ。これは仕返しをしてやらないと！

明久
「も、勿論興味津々だよ！特に……姫路さんにはね！」

瑞希
「え――えぇぇっ！」

姫路さんが耳まで真っ赤になった。仕返しの効果は覿面だ。

明久
「あはは。冗談だよ。姫路さんが僕をからかうから仕返しを――」

瑞希
「……いいですよ」

明久
「……はい？」

瑞希
「だから、その……覗いても、いいですよ……」

一瞬意識が飛びそうになった。

明久
「えぇぇっ!?何を言ってるの姫路さん!?大丈夫!?」

信じられない言葉に我が耳を疑ってしまう。そんなことがあっていいのか!?

瑞希
「覗いてもいいですけど、その代わり――」

明久
「そ、その代わり!?」

瑞希
「わ、私を明久君のお嫁さんにして下さいね？」

ちょっと待てなんだこの展開は!?一体どうなっているんだ!?とにかく落ち着こう。まず僕が考えるべきは新婚旅行の行き先だ。今時熱海は時代遅れだろうか。やっぱり海外旅行の方がいいだろうか。

でも、そうなると学校を休んで行く必要が――

瑞希
「……ふふっ」

明久
「ん？」

笑い声が聞こえたので顔を上げてみる。すると、姫路さんが楽しそうに笑っているのが見えた。

え？もしかして、今のは――冗談？

……やられた。更にこうやって仕返しをされるとは思わなかった。流石は姫路さんだ。

瑞希
「あははっ。明久君、顔が真っ赤ですよ？」

明久
「そ、そう言う姫路さんだって慣れないことを言うから真っ赤だよ！」

お互いに顔を見て笑い声をあげる。こういう会話はなんだか凄く新鮮な感じがした。

？？？

「アキっ！」

そうやって笑っていると、遠くの方から威勢の良い声がした。この

声は美波かな？

明久
「ん。久しぶりだね、美波」

声のした方を向く。すると、元気に走ってくる美波の姿が見えた。

明久
「え？あれ？どうしたの？」

なんだか妙に真剣な表情をしている。何かあったのだろうか？

瑞希
「美波ちゃん、どうしたんですか？」

その様子を見て姫路さんもキョトンとしている。

美波
「アキ、目を瞑りなさいっ！」

明久
「え？あ、はいっ！」

目の前にやってくると、美波はいきなりそんなことを言ってきた。

さてはこの前の覗きの落とし前をつける気だな？仕方ない。諦めて一発貰うとしよう。

言われた通り目を瞑り、来るべき衝撃に備える。

美波
「……瑞希、ゴメンね……」

瑞希
「え？なんですか美波ちゃん……？」

？なんだろう。殴られる雰囲気じゃないけど……。

恐る恐る目を開けてみる。

すると、すぐ目の前には頬を染めた美波の顔があって、

明久
「――っ！？」

気がつけば僕の唇には美波の唇が重ねられていた。

続く

第一問（前書き）

今回はとても短いです。すみません

第一問

優子
「風太」

風太
「何？って……何故目を閉じてるの？」

優子
「ちょっと……キスをしようと／／／」

風太
「へぇ～……あそこで明久達がしてるのを見たから？」

優子
「……うん／／／」

風太
「バカだなぁ……ＦＦＦ団に囲まれてるよ。もっと考えて行動してあげようよ、美波」

優子
「そこまで凄いの？ＦＦＦ団って」

風太
「うん。確か……手を繋いだら処刑だったかな？」

優子
「……」

風太
「どうしたの？いきなり黙っ――――！！？？」

俺はまさかここでされるとは思わなかった。だって会話と行動が別々なんだもん。

優子にキスをされて、いつの間にか俺がＦＦＦ団に連れて行かれ、思った。

風太
「ついに容赦しなくなったか……」

本当に心から思った。

風太
「これでよしっと」

ドサッ！

俺は動けなくさせたＦクラス男子を教室の隅に置く。

明久
「風太！助けてよ！雄二なんてほっといて！」

雄二
「明久てめぇ！なんてこと言いやがる！」

風太
「だが断る」

明久・雄二
「「なんで！？」」

二人の声がハモる。ちなみに縛られた状態でだ。

風太
「じゃあ寝るから」

明久
「風太！お願いだから！」

雄二
「バカ久はほっとけ！俺が先だ！」

明久
「雄二こそ一人だけ助かろうって言うんだろ！？」

ワーワーガヤガヤ

うるさいなぁ。

風太
「黙らないと助けないよ？」

明久・雄二
「「……」」

よし。成功。

風太
「んじゃ、おやすみ」

明久・雄二
「「助けろよ！」」

そんなこと知らん。

続く

第二問

さて、どうしたものかな……？

教室の空気がもの凄く暗い、というよりは静か過ぎるのかな？

とにかく、今のＦクラスは異常だ。

だけど、別に授業に集中してるんじゃなくて、どこかのカップルに怒っているということだけは静かな殺気から読み取れる。

その原因を見てみると……

明久
「……ん？」

美波
「……っ！」

あの二人である。

正直ムカつく。俺だって優子とああいうことしたいのに。

先生
『では須川君、この場合３ｍｏｌのアンモニアを得る為に必要な薬品はなんですか？』

須川
『塩酸を吉井の目に流し込みます』

先生
『違います、それでは、朝倉君』

朝倉
『塩酸を吉井の鼻に流します』

先生
『流し込む場所が違うという意味ではありません、それでは有働君』

有働
『濃硫酸を吉井の目と鼻に流し込みます』

『『それだ!!』』

『それだ、ではありません。それと答えるときは吉井君の方ではなく先生の方を見るように』

とりあえずこんな空気のまま一時間目が終了した。

いい加減にしないと皆キレるよ?明久。

美波が近づき、明久と話す。

もう今日はめんどくさいから寝よう。うん、そうしよう。

美春

『お姉さまっ！何をしているんですか！？そんな豚野郎に密着して！？』

厄病神が来たよ。もの凄く困る。

美波
『――だって、ウチはアキと付き合っているんだから』

明久
『畳返しっ！！』

シュカカカカッ

『『『――チッ』』』

何か衝撃的な告白と畳に大量のカッターが刺さる音と教室中からの舌打ちが聞こえた。先に空海に替わっておくかな。

俺は頭に例のバンダナを付けて寝る。

美春
『この豚野郎を始末します！そして美春が第二の吉井明久としてお姉さまと結ばれるのです！』

明久
『ちょ、ちょっと清水さん！？かなり錯乱してない！？僕を始末したところで入れ替わることは難しいと思うけど！？』

俺でも寝れない様なのでそろそろ止めることにした。

美春
「寒い！なんですかこれは！？」

とりあえず零地点突破を清水にかけた。

空海
「俺に寝かしてくれないかな？」

そう言った後、廊下に出そうとしたところで……

ガラッ

西村
「さぁ、授業を始めるぞ、今日は遠藤先生が別件で外しているので俺がビシビシ――ん？やれやれ……また清水か……授業が始まるから自分の教室に戻るように」

鉄人が登場。

美春
「きょ、今日は先週までとは違って特に大事な用なんです！西村先生、今だけは美春を見逃して下さい！」

西村
「特に大事な用？それはどんな用だ？まさか先週みたいに『邪魔者のいない教室でお姉さまと一緒に授業を受けたいんです』とかじゃないだろうな」

わかりやすい奴だな。

美春
「いいえっ！今日は『この教室の男子全員を殲滅する』という大事な――」

西村
「今後この教室への立ち入りを禁じる」

空海
「さよなら♪」

ズッ、ズッ、ズッ、ピシャン

俺は引きずって清水を廊下に追い出した。

やっと寝れる。邪魔ものはお前だからな。

そして、俺は自分の席に戻り寝た。

風太
「むにゃむにゃ……んー……？」

片雲
「起きろ」

ドゴッ！ガガガガガガガガガガガガガガガガッッッッッッ

！！！！！！

風太
「あだだだだだだだだだだだだだだだだだだだだ！！！！！！！？？？？？？」

俺は起きる直前に片雲に叩き起こされた。

風太
「いたたた……なに？何か用？って言っても緊急事態？」

片雲はただ頷くだけだった。

風太
「ふう……まずは雄二達に会わなきゃ。何処に居るか分かる？」

片雲
「屋上だお前と俺以外皆向かったとこだ」

風太
「それじゃ、行くかな」

片雲
「行かなきゃ駄目だ」

あの後、俺は片雲に何事かを聞き、修羅場に向かって行った雄二達のもとに向かう。

風太
「ゆう～じ～。居る？」

雄二
「風太か遅かったな」

俺は屋上の扉を開け、雄二を見つける。

風太
「話はどこまで？」

雄二
「ちょうど誤解を解いたとこだ」

ということは無駄足になるかな？

向こうで笑い合っている二人を見る。うん、大丈――

美波
「どうしてくれんのよー！？ウチのファーストキスーっ！？」

――夫じゃないみたい。美波が凄い勢いで明久の胸倉を掴んだ。

明久
「ごごごめんなさいっ！僕も悪気はなかったんですっ！」

美波

「ごめんで済む問題じゃないでしょ！？」

確かにそんな簡単な問題じゃないかな。

明久
「そ、その、美波」

美波
「なによ！？」

明久
「えっと――僕も初めてだったから、おあいこってことじゃ、ダメかな……？」

雄二・片雲
「「ダメに決まってんだろ」」

雄二と片雲の鋭いツッコミ。うん、全く同感だね。

美波
「え……？そ、そうなんだ……。それは、その……えっと……ご、ご馳走さま……？」

雄二・片雲
「「ぅおいっ！いいのか島田！？」」

美波はなんだか的外れな返事をした。ってかよくよく考えてみると美波は得してるよね。

明久

「あのさ美波。怒らないで答えて欲しいんだけど」

美波
「え？何？」

明久
「僕と美波が付き合っているって話なんだけど、あれってもしかして、美波が僕のことを……その、す、好き、とか……？」

美波
「あ……！そ、それは……っ！」

美波が慌てたように手をバタバタと振る。

美波
「あ、あれはね、ほらっ。美春があまりにもしつこいから、彼氏でもいたら諦めてくれるかと思って、それでタイミングよくアキが告白してきたもんだから……！」

せわしなく手と目を動かし続けながらも説明する美波。

明久
「ああ、なるほど。そういうことか」

それを聞いた明久は人知れず悔しそうな顔をする。

雄二
「やれやれ。苦しい言い訳だな。一人以外にはバレバレだぞ？」

秀吉

「そうじゃな。まぁ、告白が誤解などと言われたのじゃから、そうやって誤魔化したくなる気持ちもわからんでもないが」

康太
「……素直じゃない」

風太
「ホントだね」

片雲
「ツンデレか……」

美波
「べ、別に言い訳とかじゃなくてホントに……っ！だ、誰がこのバカと！」

酷いよ～？美波。自分の身を守るために明久の告白を利用したようになるからね？

明久
「まったく……、それならそうと先に言ってよ。美波が僕のことを好きなのかと思っちゃうじゃないか」

美波
「う……。そ、そんなワケないでしょ！」

明久
「だよね。僕もおかしいとは思っていたんだよ。美波が僕を好きになるとは思えないし、それに――」

美波
「そ、それに、何よ」

明久
「それに、美波があんなにしおらしいなんておかしいもんね」

よし、帰ろう。ここに居ると巻き込まれる気がする。

美波
『……そうね。全く、本当に、アンタの言う通りよね……っ！！』

明久
『み、美波！？なんか僕の肩関節が嫌な音を立てているような気がするんだけど！？』

そう思った瞬間だった。

明久からなにかが外れる音がしたのは……

続く

第三問

とりあえず、明久と美波の交際は誤解で一件落着。それがＤクラスにも伝わり、試召戦争は取り下げてくれた。

まぁ、別の人間が怒り始めたけど。

美波
「瑞希、お昼にしない？」

昼休みのチャイムが鳴るや否や、美波のそんな声がした。

明久
「あ、美波」

明久が立ち上がり、美波に声をかけた。

美波
「何よアキ。ウチに何か用？」

明久
「えっとさ、今朝言ってたお弁当なんだけど……」

無理に決まってるのに。

風太
「それじゃ、今日は優子のところに行くかな」

俺は立ちあがり、弁当を持ってＡクラスに向かう。

優子
「へぇ～。そういうことだったの」

俺はさっきのことを優子に話した。弁当を広げた状態でだ。

風太
「そう。全く……勘違いもほどほどにしてほしいけど、美波は帰国子女だからね……」

優子
「確かに……仕方ないわね……」

苦笑いする優子。俺も笑うしかなかった。

風太
「さて」

優子
「？」

俺は話を変えてから間をおく。

風太

「……朝のこと、俺が忘れたと思った？」

優子
「！？／／／」

そう、俺は朝優子にキスされた。凄い唐突に。

……まぁ、俺も満更でもないけど……

風太
「もうちょっと場所を考えてしてくれないかな？」

優子
「……べっ、別にいいじゃない。アタシがしたかっただけなんだから／／／」

優子は素直になれないらしい。それでも可愛いと思うのは重症かな？

風太
「反省してるならいいよ。でも、人の気持ちも考えてよ。こんなふうにされたらどう思う？」

優子
「え？ん……！」

俺は優子に朝のお返しも込めてキスをした。

……Aクラスのど真ん中で。視線が集まる。でももう俺は慣れたから関係ない。

その後仕掛けた俺が苦しくなり、俺から離れた。

風太
「ぷはっ……どう？これですこ…し……は……優子？」

優子
「……風太の……／／／／／／」

ヤバイ。これはやりすぎた気がする。

そう思ってももう手遅れ。優子は顔を真っ赤にして――

優子
「バカーーーーーーー！！！！！！／／／／／／／／／／／／／／／／／／」

学校全体に響くような優子の叫び声。

そして、バシーン！っという凄い音。俺が叩かれた音だ。

風太
「ごめん……」

とにかく俺は弁当を片付けてＡクラスを出た。

風太
「はぁ～～～

俺はとても長い溜息をつく。

秀吉
「どうしたのじゃ？先ほど姉上の声が聞こえたのじゃが……」

近くに居た秀吉が聞いてくる。

……説明したくないなぁ……

風太
「実はね……？……さっき優子にキスしたんだ……」

雄二
「すまない……話が既に見えてないんだが……」

そばで聞いていた雄二が頭に手をつく。

風太
「別にいいじゃん。秀吉も、もうアヤとしただろうし」

秀吉
「な、な、な、ななぜ知っておるのじゃ！？／／／／／／」

俺が秀吉にカマをかけると見事にはまって自爆した。

風太
「別に～？今知っただけだけど？」

秀吉

「お主は一度生まれ変わったらどうじゃ？」

酷いや。ただ誘導しただけなのに。

風太
「そう言えば今はどういう状況？」

雄二
「そうか、お前は居なかったんだったな」

そして、俺は秀吉と雄二から状況を教えてもらった。

風太
「ふむ……とにかく、Ｂクラスが俺達Ｆクラスに戦争を仕掛てくる」

雄二
「ああ」

風太
「それを止めるためにＤクラスを使う」

秀吉
「うむ」

風太
「そのためには、明久と美波が恋人の演技をして清水を焚きつけると」

康太
「……そういうこと」

康太も話に入って来た。

風太
「とりあえず、俺は今することないよね？」

雄二
「そうだな」

風太
「じゃあなにかあったら起こしてくれる？面白いことも含めて」

秀吉
「優先順位はそっちなのかの……？」

風太
「もちろん」

そう言って俺は寝た。

風太
「すぅ……すぅ……」

雄二
「起きろ」

ゆさゆさ。

風太
「ん……雄二……？なにかあった？」

俺は雄二に揺さぶられて起こされる。

……やっぱりこの起こされ方の方がいいなぁ……どっかのバカ親友と違って。

雄二
「そろそろ二回目の演技を始める」

風太
「ホント？じゃあ聞く」

しばらくすると、盗聴器から声が聞こえてきた。

美波
『ほら、アキ。こっちこっち』

明久
『もう、美波。そんなに腕をひっぱっちゃダメだよ』

美波
『ほら、こっちの方が涼しくていいでしょ？そんなに汗をかいているんだから』

明久
『そうだね。確かに涼しいよ。背中がゾクゾクするね』

明久……？それは恐怖じゃないのかな？

美波
『寒いの？それならもっとくっつかない？』

明久
『いやいや、もう充分だよ』

美波
『何言ってるの。照れることなんてないでしょ？』

瑞希
『ふ、二人とも何をしているんですかっ！今は授業中なんですよ！？』

おお、瑞希登場。

美波
『瑞希……』

瑞希
『そんなにくっついて、腕まで組んで……！そんなのまるで、その……つ、付き合っているみたいじゃないですかっ！』

明久
『えっと、姫路さん……』

美波
『そうよ瑞希。ウチとアキは付き合ってるの』

凄い。リアルに近づいてきた。

瑞希
『え……？つ、付き合っているって、本当ですか……？』

美波
『うん。黙っていてゴメンね、瑞希』

瑞希
『美波ちゃん……やっぱり明久君のこと、好きだったんですか……？』

美波
『それも……黙っていてゴメン。瑞希の気持ち、ウチは知っていたのに』

明久
『やめて二人ともっ！僕の為に争わないでっ！』

ゴキン！

……明久は大丈夫なの？

瑞希
『やっぱりそうでしたか……美波ちゃんも、明久君のことが……』

美波
『謝って済むことだとは思わないけど……ごめんなさい。ウチのこと、許せないでしょうね……』

瑞希

『いえ。美波ちゃんの気持ち、私もなんとなくわかっていましたから……むしろこうやってハッキリ言ってもらったことで気分が楽になったくらいです』

美波
『え？許してくれるの、瑞希？』

瑞希
『許すとか許さないとかじゃなくて……その、人を好きになることは自由だと思いますから。美波ちゃんのことを責めるなんて、私にはできません』

美波
『瑞希……ありがとう……』

瑞希
『でも、今朝のキスは許しません。アレは反則ですっ！しかも明久君の初めてだったみたいですし！』

ズレてきてるよ二人とも。

美波
『そ、それは、だって、あんなメールとか色々あったから、つい！』

瑞希
『つい、じゃないですっ！あんなズルは、神様が許しても私が』

――ドンッ

美波・瑞希
『『あ……』』

壁を叩く音でやっと我に戻る二人。

瑞希
『そ、そんな話をしているじゃありませんでした。え、えっと……こほんっ』

美波
『そ、そうだったわね。こほんっ』

冷静になったみたいだ。

それにしても明久の声が全く聞こえ無くなってんだけど……

瑞希
『とにかく、その……美波ちゃんのバカッ！』

美波
『あっ！瑞希っ！』

これで演技は終わり。さて、どうなるかな……

美波
『ちょ、ちょっとアキ！？何瑞希の後を追おうとしているのよ！？』

……あいつは生粋のバカなのかな？

でもゴキゴキと音が聞こえる。もしかしてなくても美波握りしめて

るんだよね？そうだよね？だったら明久が行こうとしてるのは保健室？

美波
『……ねぇ、アキ……ウチと一緒にいて？ウチはその……アキのことが、好き、なんだから……』

明久
『み、美波ゴメンっ！僕、行かなきゃいけないところがあるんだっ！』

美波
『あ……っ！！』

そう言って明久が走り去る音が聞こえる。

そして俺は明久が向かったであろう保健室に向かった。

風太
「明久」

明久
「あ！風太！腕が！腕が！」

うん。これはヤバイ。

とりあえず、俺はバンダナを付けて空海と替わる。

空海
「明久。ちょろーっと我慢してろよ？――『零地点突破』！！！」

明久
「え？」

カチン

俺は明久の腕を凍らした。そうすれば少しは時間が稼げるはず。

空海
「早く行って来い、明久。これは少ししか持たねぇからよ」

明久
「あ、ありがとう！空海！」

そう言って明久は保健室に向かった。

風太
――さてと、俺はどうするかな？優子とDクラス。

そういう風太の独り言を聞きながらFクラスに戻る。

続く

第三問（後書き）

これから更新が遅くなるかもしれません。時間ができたら更新します。すいません

m（＿＿）m

第四問（前書き）

最近は遅れ気味ですね。これからはもっと早く更新するんで勘弁してください！

第四問

雄二
「失敗もいいところだカス野郎」

まぁ当然である。

瑞希
「坂本君、失敗ってどういうことですか？」

Fクラスの教室に明久が戻ってくると、雄二の席に集まる俺たち。

雄二
「どうもこうもあるか。このバカが最後に逃げ出してくれたおかげで、やってきたこと全てが台無しだ。あんなモン見て島田と明久が付き合っていると思うヤツなんているわけがない」

雄二が丸めた台本で明久の頭をパカンと叩く。

風太
「とりあえず美波が明久に好意があることしかわからないし」

雄二
「オマケにもう一度トライしようにも、島田はあの調子な上にお前は姫路と一緒に仲良く戻ってくるときたもんだ」

なんてタイミングで合流したんだろうか明久と瑞希は。美波も不機嫌だし。

瑞希
「ご、ごめんなさい。私と明久君が一緒に戻ってくるなんて、美波ちゃんと明久君が付き合っているのならおかしいですよね……」

秀吉
「まぁ、それはクラスメイトなのじゃからそこまで不自然ではないのじゃが……。明久が美波を放置していった後で一緒に戻ってくるという状況がマズいのじゃ。周りにどう思われるか、じゃなくて島田に対してじゃがな」

怪我の為に行っちゃったとはいえ、自分を置いてかれたら流石に怒る。さらには他の女子と仲良く帰って来たなら尚更だ。

雄二
「とりあえず、明久は島田に詫びの一つでも入れておいた方がいいな」

雄二が顎で島田の方を示す。

明久
「そうだね。ちょっと行ってくるよ」

明久が立ち上がり、美波の席に向かう。

明久
『あのさ、美波』

美波
『……何？』

明久
『その、さっきはごめん』

美波
『もうアンタなんか知らない。瑞希と仲良くやっていればいいじゃない』

明久
『いや、姫路さんとは途中で会っただけで』

美波
『言い訳なんて聞きたくない』

明久
『あぅ……でも、このままだと姫路さんが――』

美波
『……瑞希、瑞希って、アンタはいつもいつも……！』

明久
『み、美波？』

美波
『どうして瑞希ばっかりいつもお姫様扱いなのよ！じゃあウチはなんなの！？男だとでも思ってるの！？どうしてウチにはいつもそんな態度なのよ！』

明久
『べ、別にそんなつもりは！』

美波
『瑞希が転校させられそうになったら、ウチが瑞希の両親に話をしに行くわ。だから、もう話しかけないで。アンタの顔なんて見たくない』

……そうかそうか。

風太
「雄二」

雄二
「なんだ」

風太
「俺ちょっと不良をぶっ殺してくる」

急にむしゃくしゃしてるから。

雄二
「はぁ……仕方ないな……行って来い」

事情を知ってる雄二だからこそ分かってくれる。

風太
「ありがとう。戦争になったら絶対に活躍するから」

雄二

「当たり前だ」

そうやって俺は雄二に許可をもらい、教室を出た。

不良
『ぐああ！』

ドサッ！

俺はとある溜まり場にいる。

風太
「こんなもんじゃ駄目だ。このままじゃ、またあいつらを……！」

もう……アレを繰り返したくないんだ……！

不良
『おらぁぁああ！』

また不良が来た。

風太
「くたばれーーー！！！」

ドゴゥッ！！

不良

『ぎゃぁあ！』

その日俺はここら一体の溜まり場を潰して回った。

続く

第五問（前書き）

今回はとても短いです。

第五問

風太
「ハァ……ハァ……ハァ……」

俺は今路地裏にいる。

風太
「とにかく……これで……終わりだ……」

俺はボロボロの足で自分の家へと向かった。

風太
「ただいま……」

家に入ってなんとなく言ってみる。

……

返事は無い。これが俺の日常。

風太
「さらに念のためにただいまー……」

ガチャ

優子
「おかえり。風太君」

……フリーズ中。

再起動。

よし、まずは状況を確認しよう。

1、家に帰ってリビングのドアを開けると優子がいる。

2、今日、優子と俺は喧嘩中。

3、その優子が何故か俺の家にいる。

結果。気まずい。

風太
「……」

優子
「……」

ヤバイ。話が見つからない。

風太
「あのさ、優子……」

優子
「な、なに……？風太君……？」

最後になるにつれ、言葉が段々小さくなる俺達の声。

風太
「なんで、家に居るの？」

優子
「え！？そ、それは……」

優子が目を逸らす。

風太
「そう、なんだ。とにかく、俺に用が無いんだったら帰ってよ」

優子
「う、うん……」

そう心細くなる返事をして優子は帰って行った。

風太
「もう……なんなのかな……優子はもう、俺のことなんてどうでもいいのかな……？」

俺はそう思いながら部屋に向かい、ベッドに倒れこんでから寝た。

雄二からメールが来ていたがそれは明日見るからほっといた。

ちなみにその内容は失敗だったということだった。

続く

第六問

『我々Ｄクラスは、Ｆクラスに対して宣戦布告を行う！』

翌日。朝のＨＲの終了直後にＤクラスの男子がやってきて、俺たちに高らかにそう告げていった。

秀吉
「？なんじゃと？」

近くで秀吉が怪訝そうな顔をする。

風太
「どういうこと？」

雄二
「昨日聞いた話だと清水の挑発は失敗のはずだが？」

俺と雄二も疑問に思う。確かに雄二から聞いた話だと失敗のはずなんだけど……

雄二
「ムッツリーニ。状況はわかるか？」

康太
「……昨日何があったかはわからない。ただ、今日は朝から清

水が興奮していた」

風太
「清水が？挑発は成功してたの？」

秀吉
「いや、そんなことはないはずなのじゃが……。明久。お主、あの後に何か話しておったのか？」

秀吉が明久に聞く。

明久
「い、いや。別に。それよりも試召戦争だよ！Ｂクラスじゃないとは言え、今の僕らには厳しい相手なんだから早く準備を始めないと！」

……明久か。あとで洗いざらい吐いてもらおうかな。

雄二
「……それもそうだな。真実はどうあれ、まずは目先の試召戦争だ。ここまでやってＤクラスに負けたら何の意味もない」

確かに、結局はＤクラスから宣戦布告をもらうことができたからね。そして、点数が低い状態で戦わなければならない。とにかく、今は目の前のことに集中した方がいい。

風太
「うん。今はまともに戦えたもんじゃないからね」

康太

「……防衛が優先」

明久
「それで雄二、作戦は？」

雄二
「考えてある。だが、その前に戦力の確認だ。今姫路と島田以外に戦えるヤツがどの程度いるのかを調べる」

そう言うと、雄二は立ち上がって教壇に上がった。

雄二
「野郎ども、よく聞け！さっき言われた通り、これより俺たちFクラスはDクラスとの試召戦争に突入する！まずは戦力の確認だ！各自、自分たちの持ち点を紙に書いて持ってくるように！」

Dクラスの宣戦布告でザワついていた教室が静まり返り、クラスの皆が紙とペンを取り出す。

先日の覗き騒ぎである程度使ったからといって、完全に点数を消費しているわけではない。点数の残り具合から補充するメンバーを選ぶのだろう。

秀吉
「そう言えば、ワシは1点も消費しておらんな」

明久
「あれ？そうだったっけ？」

秀吉

「うむ」

風太
「俺も消費してないよ」

片雲
「お前は自分で戦ってたからな」

風太
「片雲は保体だけでしょ？」

俺達は一教科だけで戦ってたからね。

明久
「そっか。それならフルで戦えるのは姫路さんと美波と秀吉と風太と片雲の五人に増えたってことだよね」

風太
「そういうこと。総合科目は俺達が率先して前に出る」

俺も紙を取り出して点数を書き込む。

風太
「雄二」

明久
「はい雄二」

雄二
「あいよ」

雄二に紙を渡して定位置に戻る。

全員分のメモを受け取ると、雄二はそれをパラパラと捲りながら皆に呼びかけた。

雄二

「最初に下位十名に点数の補充をしてもらう。補充組は教室に残ってくれ。尚、科目は数学を受けるのが七人、世界史と化学と保健体育を受けるのが一人ずつとする。各自の配点は点数確認を終えてから発表する」

メモを小脇に抱えて雄二が戻ってくる。

俺と明久はメモを広げて人員配置を考えている雄二に近づく。

明久

「ねぇ雄二」

雄二

「なんだ」

明久

「どうして点数補充をあんなに細かく分けるの？僕らは早く点数を補充しなくちゃいけないんだから、まずは採点の早い数学だけに揃えるべきなんじゃないの？」

確かに世界史は採点が甘い代わりに遅いことで有名だ。普通の状況なら明久の案が一番なんだけど……

風太
「今回は時間稼ぎが目的だからね。戦術よりも心理戦が必要だからだよ」

明久
「うん。それはなんとなくわかるけど」

風太
「そんなときに数学の教師だけを教室に入れて補充してたら相手はどう思う?こっちには備えが無いと教えてる様なものだよ」

明久
「それはそうだけど……。でも、僕らが点数補充をしていないのは皆にバレているんだよ?そんなことしても向こうは警戒なんてしてないんじゃない?」

雄二
「そこを警戒させるのが作戦ってもんだろうが。まぁいいから見ていろ」

雄二が点数の書かれたメモを見ながらノートに布陣を書いていく。
雄二の頭の中には既に作戦が出来上がっているんだろう。

ノートを覗き込むと、俺はやっぱりと言うか、前線に配置されていた。

そして明久は渡り廊下の防衛線に参加するようだ。

明久
「あれ?僕は点数補充じゃないの?」

雄二
「お前はまだ点数が残っていたからな。まずは戦死して0点になっている奴から補充していく」

明久は鉄人としか戦ってないし、おまけに勝利しているから点数は残っている。戦死しているヤツよりかはマシだ。

雄二
「それに、お前は特別な人材だしな」

明久
「特別って、いやぁ、そんな……」

確かに今回の戦争で鍵を握るのは明久だ。瑞希の転校は、明久に掛かっていると言っても過言じゃない。

雄二
「今回の作戦でもお前は重要な役どころになる。キツいだろうが耐えてくれ」

明久
「了解。そこまで言われたからには頑張るしかないね」

現在時刻は〇八五〇。開戦予定時刻は〇九〇〇だから、あと十分だ。

俺は緊張感に包まれながら試召戦争の開始を待っていた。

雄二
「いいかお前ら！前回勝ったからと言って相手を舐めるなよ！この

状況の上に相手は俺たちよりも二つもクラスが上だ！下手に欲をかくと逆に手痛い目を見るハメになるからな！」

出陣前ブリーフィングとして、雄二が教壇に立って皆に説明を始める。

雄二
「どんなに有利な状況でも決して深追いはするな！決められた場所でひたすら防衛に徹しろ！」

下手に深追いすると一瞬で蹴散らされるだろう。なんせ、俺と瑞希と美波と秀吉と片雲を除いたＦクラス全員の総合点数は１００００点にも満たない。まともな勝負は望むべくもない。

雄二
「向こうは圧倒的に有利な女子の総合科目をメインに攻めてくる！片雲と島田と秀吉を主軸にうまく立ち回れ！限界まで粘ったら状況によっては教室前まで退いてもいい！以上だ！健闘を祈る！」

雄二の説明が終わると同時に時計の針がカチッと音をたてた。開戦時刻の午前九時丁度だ。

『いよっしゃぁぁあー！！』

渡り廊下や階段を確保するのが目的だから、先攻部隊が開幕ダッシュで現場を目指す。向こうは恐らく何かされる前に決着をつけようと電撃作戦でくるはずだから、最初はスピード勝負だ。

俺は雄二の命令で待機してから向かうらしい。おまけに、他の奴に替わることも今回は禁じられたし。

明久
『美波、おはよう』

あ、明久が美波に話しかけてる。

美波
『……』

明久
『Dクラスが宣戦布告をしてくれて良かったよね』

原因は君だろう？

美波
『……』

明久
『あとはこの戦いを乗り切るだけだね』

まぁ、そうだね。

美波
『……』

明久
『あのさ。こうしてると、前の試召戦争を思い出さない？』

美波
『……そうね。ウチがアンタに見捨てられたこととかね』

あ、墓穴掘った。

明久
『美波。もしかして……まだ怒ってる？』

美波
『……それって、どういう意味よ？』

明久
『え？どういう意味って』

美波
『どうせウチのことなんて『男らしいから一晩経ったら忘れてくれるだろう』とか思っていたんでしょ！バカ！』

明久
『う……』

美波
『もう話かけないでって言ったでしょ！いいからこっちに来ないで！ウチのことは放っておいてよ！』

そう言って美波は走って教室を出て行った。

俺は明久に近づく。

風太
「明久。美波のことはしばらく放っておいてあげて？それに今は作戦の途中だし、目の前のことに集中して」

明久
「……うん。わかってる。僕も行って来るよ！」

明久が教室を出て行った。

俺も待機してるかな。

それからしばらくしてから明久が戻って来た。

瑞希
「あ。明久君。おかえりなさい」

明久
「あ、うん。ただいま」

それに瑞希が駆け寄る。

明久
「あのさ、姫路さんと風太はどんな指示が出ているの？」

瑞希
「はい……。それが、よくわからないんですけど、坂本君には『Fクラスの教室から出ないように』って言われているんです」

風太
「右に同じ」

明久
「え？それだけ？」

風太
「そりだけ」

まぁ、明久には分からないだろうけどね。

雄二
「おう、戻ったか明久」

明久と話してると雄二が来た。

雄二
「首尾はどうだ？」

明久
「ああ、うん。一応言われた通りにしてきたけど……それより、そろそろ作戦を説明してよ」

瑞希
「あの、坂本君。私も教えてもらいたいんですけど」

雄二
「なんだ、姫路？」

瑞希

「私と風太君は何もしなくていいんですか？」

不思議そうに首を傾げる瑞希。

確かに瑞希や俺達はＦクラスの主戦力。点数は十分にある。

風太

「あ、そろそろ行くわ。前線が押され始めてる」

雄二

「ホントだな。よし、行って来い」

風太

「おう！」

そう返事をして俺は戦場に向かった。

～明久視点～

風太が行ったあと僕は隣の空き教室で待機していた。しばらく、って言っても本当はそんなに時間が経ってないのかもしれない。その状態で清水さんが来て、今は召喚獣を召喚したところだ。

明久

「……」

美春

「……」

召喚獣にも動きがなく、無言の状態が続く。

睨み合いというわけじゃない。清水さんは俯いて召喚獣から目を離している。

そうしていたのは、ほんの数秒程度だっただろうか。

不意に、清水さんが震える声で呟いた。

美春

「……泣いて、ました」

怒りを伴う、静かな口調。

美春

「……お姉さま、昨日走り去る時に……泣いて、ました」

言われて、僕も昨日のことを思い返す。

清水さんの言う通り、美波は涙を浮かべて駆け出していた。

美春

「きっかけは、美春の言葉です。……でも、原因は、原因は……っっ！！」

清水さんが俯いていた顔を上げる。僕を睨みつけるその瞳には、烈火の如き怒りが見て取れた。

美春
「オマエが……！オマエのような男がいるから……っ！お姉さまが泣く羽目になるんです！」

その言葉を合図に清水さんの召喚獣が突っ込んでくる。

正面からの真っ直ぐな攻撃に、僕は力を受け流すように動いた。

明久
「ぐ……っ！」

それなのに、僕の僕の身体に鈍い痛みが訪れる。正面から受けたわけじゃないのにこの威力。余程点数の差があるんだろう。

化学

Dクラス
清水美春　１１２点
ＶＳ
Ｆクラス
吉井明久　２２点

横目で確認した彼我の差は約五倍。こちらが圧倒的に不利だ。

美春
「どうしてオマエのような下郎がお姉さまの傍にいるのです！どうして気持ちを弄ぶ下衆がお姉さまと言葉を交わしているのです！」

駄々っ子のように振り回される相手の剣。その一撃一撃全てが、僕の腕を痺れさせるほどに重かった。

美波が泣く羽目になったのは事実。

僕らが美波を利用していたのも事実。

美春

「どうして、お姉さまを利用する為に平然と嘘をつく外道が友人面をして近くにいられるのです！」

ガッ

相手の剣を木刀で受け止める音が響く。

でも、それでも僕は……！

明久

「……嘘は……ついて、いない……っ！」

そのまま力任せに相手の剣を押し返す。

美春

「な、にを、言って……！」

色々あって、酷いことをした。

傷つけたし、泣かせてしまった。

僕の言うことなんて薄っぺらく思えるかもしれない。

けど、それでも――

明久
「僕が言ったことは、嘘じゃないんだ……っ！」

鈍い音をたてながらも、僕の召喚獣は木刀で相手の剣を弾いた。

美春
「な……！？」

そう。嘘じゃない。

付き合っているという話が演技でも、キスをしたということの原因が誤解でも、僕が清水さんに言ったことに嘘はない。

そもそも……僕は、あんな場面で嘘をつけるほど器用じゃない！

明久
「僕みたいなバカにだって、言っていい嘘と悪い嘘くらいわかる！昨日のあれは、紛れもない僕の本心だ！」

剣を正面から受け止めたせいで木刀が折れかかっている。

五倍という力の差がある相手と押し合ったせいで消耗している。

こんな状態で勝ち目なんてあるわけがない。

明久
「けど、逃げるもんか……！」

元はと言えば全ての原因は僕が作ってしまったこの騒ぎ。迷惑をかけてしまったひとの為にも、僕が責任を取らないでどうする！

これはある意味ありがたい機会だ。この一騎打ちを姫路さんや雄二や風太に任せていたら、僕は騒ぎを起こすだけ起こして逃げ出したロクデナシだ。こうして責任を取る機会をもらえたことを、雄二に感謝――

『『『試獣召喚っ（サモン）！』』』

明久・美春
「「えっ！？」」

不意に教室の中に響く召喚の声。目をやるとそこには点数補充をしていたＦクラスの人たちを従えた雄二と風太の姿があった。姫路さんの突破力で一時的に混戦状態のＦクラス教室前を抜けてここまで来たんだろうか。

いや、そんなことはどうでもいい。それよりも問題は、どうして僕と清水さんが戦うフィールドに他の召喚獣がはいってきているのか、ということだ。

美春
「伏兵、ですか……！卑怯な真似を……！」

清水さんが僕を憎々しげに睨みつけている。伏兵ってことは、まさか――！

明久
「雄二！風太！いくら大事な勝負だからって、そんなやり方は間違っているよ！」

まさか、一騎打ちに来たはずの清水さんを大勢で騙し討ちにするつもりなのか！？この勝負がいかに大事なものかはわかるけど、それはあまりに卑怯すぎる……！

風太
「ごめん……明久。俺だってこんなことしたくないけどさ……」

雄二
「悪いが、これは勝負じゃなくて戦争なんだ。俺にはクラスを守る義務がある」

風太
「だから俺がやるんだ……！」

冷たく言い放ち、風太は召喚獣にＫＢを構えさせる。

風太
「行くよ！」

明久
「や、やめ――」

風太
「はぁぁああ！！」

僕の制止が入る間もなく、風太の召喚獣が見えないぐらいに早い攻

撃で召喚獣を切り刻む。
――僕の召喚獣を。

明久
「……え？」

想像もしていなかった事態に頭が一瞬思考を放棄する。
そして、段々と状況を理解し始めた時、僕の全身に何かが迸った。

～風太視点～

明久
「痛あぁぁあっ！！ねぇ何コレ！？今までで一番痛いんですけど！？全身が！爪先から頭の天辺までのあらゆる部分に激痛が！」

雄二
「清水。この通り全ての元凶は粛清した。これで今回の件を水に流してはもらえないだろうか」

明久

「ぎゃぁあああっ！ＫＢで斬られる感覚ってこんななの！？今にも胴体が張り裂けそうな痛みが襲っているんだけど！？」

明久は結構痛い様でその場でのた打ち回る。

手加減は……召喚獣の操作って難しいね☆

美春
「……そうですね。この豚野郎に対する美春の怒りは収まりませんが……」

ザクッと良い音が教室に響いた。

明久
「し、清水さん！？もう決着はついたよね！？どうしてさらに追い討ちを――痛だだだっ！刃物の痛みが！刃物の痛みがふくらはぎから段々頭に向かって上がって」

美春
「切り刻んだあと、この豚野郎を放課後まで補習室に軟禁すると言うのなら休戦を受け入れてもいいです」

雄二
「約束しよう。明久はこれで戦死したから補習室行きだ。あとは放課後になるまでそれぞれの教室で点数補充でもやって時間を過ごせばいい。その間ずっとコイツは鉄人の餌食だ」

うわぁ……鬼だ……鬼がおるよ……

美春
「ふんっ。何を恨めしそうな顔をしているのです。元はと言えば貴方がお姉さまをたぶらかすから悪いのです。少しは反省してくるといいです」

ザクザクザク、と何度も明久の召喚獣に剣が押し込まれてる。

明久
「ははは反省してますっ！美波を傷つけたことを、心から反省して痛だだだっ！」

その痛みは全て明久に降り掛かってるね。あれは。

明久じゃなかったらショック死してるよ。

美春
「……まぁ、あの言葉が嘘だったとしたら、この程度では許しませんでしたが」

今度は斬った場所を蹴り始めた。止めるべきタイミング？

美春
「今回は、このくらいで、許して、あげましょう……！」

やった。これで交渉成立だね。

雄二
「それじゃ、交渉も成立したし教室に戻るか」

『『『おーっ！！』』』

空き教室からぞろぞろと皆が出ていく。無論、俺もその中の一人だ。

さて、後は俺の問題かな。

続く

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0288r/

バカと人格と召喚獣

2011年12月18日12時48分発行